

明日へ進め！ フォー
チューン・プリキユア

PlusIX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私、明日原ミクは、14歳の中学二年生。

引越してきたばかりの佐世浦の街を探索中に、私は奇妙なコインを拾ったの。

それをきっかけに出会ったのは、不思議な占い師さんと、そして街で暴れる謎の怪物：ネガテバー！

私は街を守るため、占い師さんの力を借りて、伝説の戦士「プリキュア」となった。

「明日よりの使者、キュアルカナ！」

「星詠みの使途、キュアストロジー！」

「刻を告げし予言者、キュアオラクル！」

「未来を見据える輝く眼差し。明日へ進め！ フォーチューンプリキュア！」

目次

93

第3話 三人で力を合わせましょう？

登場、キュアオラクル（後編）！

127

第4話・三人一緒♪ わくわくパジャマ

パーティー（前編） | 156

第4話・三人一緒♪ わくわくパジャマ

パーティー（後編） | 201

第5話・コンビ解散!? 家出したタ

ロット（前編） | 227

第5話・コンビ解散!? 家出したタ

ロット（後編） | 247

第1話 私がプリキュア！ 明日よりの

使者・キュアルカナ！（前編） | 1

第1話 私がプリキュア！ 明日よりの

使者・キュアルカナ！（後編） | 21

第2話 新たなプリキュア!? 星詠みの

使途・キュアストロジー！（前編）

40

第2話 新たなプリキュア!? 星詠みの

使途・キュアストロジー！（後編）

68

第3話 三人で力を合わせましょう？

登場、キュアオラクル（前編）！

第1話 私がブリキユア！ 明日よりの使者・キユアルカナ！（前編）

「コイントスをしよう」

イエスは唐突にそう言つて、隣に居る相棒・タデーの返事も待たずに一枚のコインを取り出した。

「表と裏、どちらを選ぶ？」

イエスからそう問われ、タデーは深く考えずに「裏」と答えた。

イエスがコインを指で弾き、落下してきたそれを再び掴み取る。その手を開き、彼は告げた。

「表だね」

「あつそ」

「次は？」

「まだやるのか？」

「次は？」

タデーの質問など無視してイエスは「次は」とせがむ。こいつは他人の話の聞かぬ

いやつだ。

「裏」

と、タデーは適当に答えながら、眼下に広がる景色に目を向けた。

二人が居るのは山の上の展望台だった。そこから、複雑に入り組んだ山や島に囲まれた入り江の海と、そこに面した中規模な街並みがあった。

晴れ渡った休日の昼下がり。

空と、雲と、そして海。街の港へと出入りする何隻もの船がいくつもの白い航跡を海に描きながら行き交っている。

爽やかな風が緑に溢れた山々を吹き抜け、二人が立つ山頂の展望台を流れて行く。

イエスがコインを指で弾いた。

「表だね。…次は？」

「裏」

またコインが飛ぶ。いったい何がしたいのだろう。と、タデーは少しだけ疑問に思ったが、すぐに考えるだけ無駄だと思いなおした。

イエスの考えていることは理解できないが、別にそれで彼との関係に支障は無い。タデー自身に害が及ばなければ、好きにすればいい。彼はそう思った。

「表だね。次は？」

「……………」

前言撤回。多少は鬱陶しくなってきた。タデーは眼下に広がる景色から、隣の相棒に目を向け直した。

日差しを浴びて煌めく金髪に、抜けるような白い肌。すらりとしたモデルのような高身長。

傍で見ているだけなら惚れ惚れするような美形だが、あいにく中身が残念過ぎる。とタデーはいつも思う。

「いったい何がしたいんだ、お前は？」

「コイントスだよ」

「行為そのものを聞いているんじゃない。その意味を聞いているんだ」

「意味？」

イエスはきよとした表情を見せながら、その手のコインを指で弾いて打ち上げた。

どうやら結局、タデーの言葉を待つ気は無かつたらしい。相棒のマイペースな態度にむかつ腹が立ったタデーは、落下してきたコインを横から攫うように掴み取った。

イエスは「おや」と少しだけ目を大きくしたが、すぐに何を考えているか分からない微笑みを浮かべ、タデーを見つめた。

タディーもイエスと同じくモデルのようなスタイルと顔立ちの美形だ。けれどその髪色は眩い銀の色であり、褐色の肌をしている。

コインを掴み取ったまま無然とした表情のタディーに、イエスは微笑みながら言った。

「手を開いてみたらどうだい」

「裏だ」

タディーは言いながら手を開いた。コインは表だった。

「次は？」

イエスの問いに、タディーは即座に答えた。

「今度こそ裏だ！」

自分でも馬鹿馬鹿しいとタディーは思う。半ばムキになりながらタディーは続けて言った。

「四回連続で表だったんだ。次も表が出る確率は32分の1だ。裏に決まってる」

「コインには表と裏の二面しかないんだよ。次だって2分の1さ」

「言ってる」

タディーは手のコインを指で弾いて真上に打ち上げた。ただ、少し力を入れすぎたようだ。

コインはかなり高く上がり、しかもちようどその時、山の上を強風が吹き抜けた。コインは風にあおられて放物線を描き、展望台から逸れて落下した。

コインは、ちりんちりと涼やかな音を立てながら展望台の緩く長い階段を跳ね落ちていき、そのまま、近くにある駐車場へと転がって行く。

駐車場にはちようどそのとき、街と展望台をつなぐバスが到着したところだった。そのバスから、ひとりの少女が降り立つ。

コインはまるで引き寄せられるように少女に向かって転がり続け、その足元にぶつかって止まったのだった。

バスから降りたばかりの私の足に、何かがこつんとぶつかった気がした。

「ほえ?」

足下を見下ろすと、そこに一枚のコインが落ちていた。

拾い上げてみると、見慣れた小銭とは違う、不思議な紋様が刻まれたコインだった。

その紋様が何を現しているのかもよく分からない。複雑で、でもいくつかのパターンが規則正しく連続した、眺めているうちに意識が吸い込まれてしまいそうな、そんな奇

妙な紋様だった。

反対側を返してみると、そちらには紋様は刻まれてはいなかった。鏡の様に滑らかな面だ。実際にそこには覗き込む私の顔が映りこんでいた。

赤味がかつた癖つ毛のショートカットヘア。短い前髪の下ではちよつと広めのオデコが目立っている。太めの眉毛に、真ん丸な目。低い鼻に、おちよぼ口。

お世辞にも美人とは言えないけれど、これが私：明日原 ミクの顔だ。そんな私の間抜け面が、コインにはくつきりと映されていた。

「なんだかコインっていうか、古代の鏡のミニチュアみたい」

手の上でひっくり返しながら思わずそんなことを呟いた。思考がすぐに口から出ちやうのが私の悪い癖だ。

ただど幸い周りに私以外の人影は無かった。降りたバスには私の他に乗客はおらず、そのバスもすでに走り去ってしまっている。

駐車場にも車は見当たらず、どうやら今日、この展望台を訪れたのは私ひとりだけみたいだ。こんなにも天気がいいのに、もったいない。

「ほえ？　ならこのコイン、どこから転がってきたんだらう？」

足にぶつかつた方向からして、多分、目の前にある展望台へと伸びる長い階段から転がってきたんだと思う。

なら、この先に持ち主が居るのだろう。私はそう思つて階段を上り始めた。

階段の勾配は緩やかで、山の尾根沿いに数十メートルほど伸びていた。その先の山の頂上を覆うように建てられて、広いステージ状をした露天の展望台に辿り着く。

「ほえ〜！」

そこから望む街の景色に、私は思わず声を上げてしまった。海と山に挟まれた佐世浦市の街並みだ。入り江の海には、その外に点在する小さな島々から行き交う小型高速フェリーが街の港を出入りしている。

その港のすぐそばには鉄道の駅「佐世浦駅」のターミナルが建ち、その周りにはショッピングモールも並んでいて、街の中心をなしている。

そこから視線を少し遠くに向けると、山の斜面沿いに住宅街が広がっていて、その一面に、私が先月から転校して通うようになった「市立佐世浦中学校」の校舎も見えた。

「ほえ〜、これが私の新しい街なんだあ……」

父の仕事の都合で幼い時から引越しを繰り返してきた私は、新しい街に来るたびに、こうして一望できる高い場所から眺めるのが習慣になっていた。

——こうすると、見知らぬ街でも、少しは身近になった気がするだろうか？

と、幼いころ、父は私は肩車しながら、こうして一緒に街を眺めていた。

——見知らぬ人ばかりで最初は少し寂しいかもしれないけれど、でも、ちよつとでも

見知れば、それはもう知り合いだよ。

——街も一緒だよ。ミクが見知れば見知るほど、その街はミクの街になるんだよ。

と、父は私を肩車しながら、少しくサくてキザっぽいことをよく言っていた。こういうセリフを言う時の父は、だいたい自分に酔っていた。

なので肩の上で必死にしがみついている私には全然気づいちゃくれなかった。やめろ、肩車したまま展望台の柵ギリギリまで近づくんじやない。頼むから降りしてくれ。マジビビりしてギャン泣きしてばかりだった幼き頃の思い出。あー懐かしい。

ちなみ今日は父は仕事だ。だから一人で来た。もし一緒に来たなら、あのマイペースな父のことだ、昔みたいに私を肩車をしようとしたに違いない。私がスカート履いていようが構わず膝の間に頭を突っ込んでくる変態親父だ。本人に自覚が無いのがタチが悪い。

私はもう十四歳のお年頃の女の子だというのに、父はその辺をまったく考慮してくれない。一緒にお風呂に入らなくなった時点で色々と察して欲しいものだ、まったく。

風光明媚な景色を前にそんなどうでもいいことに思いを馳せている内に、手にしていたコインの存在をハタと思い出した。

「あ、忘れてた。このコインを持ち主に返さないと……つて、ほえ？ 誰も居ない？」
展望台に居たのは私一人だけだった。

「おつかしいなあ。ここから落ちてきたと思ったのになあ」

それとも転がってきたということ自体が気のせいだったのかな。私は手にしたコインをしばらく眺めた後、それを元の場所に戻すことに決めた。

お金じゃないにしろ、誰かの貴重品かもしれない。それに近くには交番も無いし、なら元の場所に戻るのが一番無難だろうから。

私は展望台から踵を返して、階段を降り始めた……

コインを持ったまま展望台から去っていくミクの姿を、イエスとタデーは少し離れた空中に浮かびながら眺めていた。

「どうやら、表でも裏でも無い結果が出たようだね、タデー」

「あれが予言された伝説の戦士、俺たちの宿敵となるべき存在、プリキュア」だっていうのか。あんな小娘が？」

「未来は無限の可能性に満ちている。過去が指し示す『道標（サイン）』に従って未来を選び進む者。それが『プリキュア』だよ」

さあ、これから彼女が進む道を共に征こうじゃないか。イエスはそんな言葉を残して

その姿を虚空へと消した。

傍らのタディーも、そんな相棒の態度に肩をすくめながら、同じく虚空へと消えて行つた。

残された山頂の景色に、一陣の風が吹き抜けて行つた……

再びやってきたバスに乗ること三十分、私は山を下り、駅近くにある商店街でバスを降りた。

商店街はアーケードに覆われた直線の通りで、私はそのちょうど端っこの入口に立っていた。

そこには「四雀町アーケード」の看板が掲げられていて、その下には一キロメートルにわたつて店が建ち並んでいるのが見える。

駅近くには他にもショッピングモールがあるというのに、このアーケードにも大勢の人が行き交い、にぎわっていた。

「ほえ、これが『全国で一番長いアーケード』で有名な商店街なんだあ。すつごいなあ」

なんだかわくわくしてきちゃう。私は探検気分でアーケードに足を踏み入れた。洋服屋、文房具屋、美容室、本屋、おもちゃ屋、CDショップ、レストランに喫茶店、八百屋と魚屋も、洋菓子屋も和菓子屋も、とにかくなんでも揃っている。

なにしろ1キロメートルもの長い道のりに店がぎっしり並んでいるのだから一軒一軒を覗いて回っていたら日が暮れたって終わらない。

「あ、映画館もある。図書館に、美術館もある。博物館までここにあるの!? ほえ、一日じゃぜんぜん足りないよお」

これはまさに嬉しい誤算というやつだわ。この街に引越してきてから約一か月、色々とばたばたしてきてまともに街中へ出てこられたのは今日が初めてだったけど、でも、今日だけでもこの街のことを好きになれそうな、そんな確信があった。

だって、このアーケードで働く人々も、行き交う人々も、みんな目が活き活きとして
いる。

「あ、外人さんだ」

体格のいい白人や黒人さんが、人混みに交じってちらほらと歩いている。観光客という雰囲気じゃない。みんな普段着のような格好で手荷物も少ない。なんだかこの街に慣れていて、馴染んでいるような感じだった。

「あ、そっかあ。『基地』の人たちだ」

そういえば、この佐世浦市は“そういう街”だった。だからだろう、街の雰囲気も少し開放的な気がする。

いわゆる余所者な私がこの街に好感を抱いたのも、もしかしたらそんな雰囲気のお陰なのかもしれない。

そんなことを思いながらアーケードを歩いていると、

「あれ、明日原さんじゃない。おーい！」

そんな風に呼び止められたので、私は足を止めた。

振り向くと、小さなハンバーガーショップの通りに面したカウンターの奥から、エプロン姿の少女が私に向かって手を振っていた。

「ほえ、観月さん？」

彼女の名前は観月 珠代（たまよ）。私のクラスメートだ。そういえば実家がハンバーガーショップだと言っていたっけ。ここにお店があったんだ。

「この街の名物、佐世浦バーガー。よかつたら買ってかない？ いまなら内緒でドリンクもおまけしちゃうよ」

「観月さん、商売上手だね」

サーブスしてくれるというなら買わない訳にはいかない。おススメは？と聞くと、デカイ目玉焼きと分厚いベーコンを挟んだスペシャルバーガーを推してきた。

「ほえ!? デカっ!」

「この街、外人さん多いからね。リクエストに応じてたらどんどん大きくなっちゃって」
「このトマト&レタスバーガーでお願いします」

「まいどありー。あ、飲み物は? コーラ?」

「オレンジジュースで。ていうかカップもデカイね」

「外人サイズだからね。明日原さんみたいに引越してきた人はこの街の雰囲気によく驚いているよ」

「そう言いながら観月さんは、カウンターの向こうで手慣れた様子でバンズと薄いベーコンを鉄板に並べ焼き始めた。」

「色んな人が居て、にぎやかな街だよ。私、好きになれそうだよ」

「ありがと。そういうえば明日原さん、前はどんな街に住んでいたの?」

「ここと同じような海沿いの街かな。ここよりももう少し小さくて、もう少し静かな場所。でも、半年ぐらいで引越しちゃったの」

「へえ、そうなんだ。引越しが多くなって大変だね」

「大変だけど、良いこともあるよ。こうやって美味しそうなお店にも出会えたし」

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。明日原さんもなかなか上手だね。もひとつサービスしちゃおう」

観月さんはそう言つて、出来上がったハンバーガーとジュースが入った紙袋と共に、一枚のチケツトをくれた。

「はい、次回から使えるお得な割引券。また来てね！」

「うん、ありがとね。ばいばい」

観月さんのお店には客席が無いテイクアウト専門店だった。なのでお客の中には近くの公園で食べる者もいるらしい。

観月さんに教えてもらった方向へ向かうと、どこからともなく賑やかな音楽が聞こえてきた。

音を辿つてそちらに目を向けると、アーケードに面した広場があり、そこに常設されているステージではバンド演奏が行われていた。

どうやらここが目的地の公園らしい。広場には様々な屋台やワゴンタイプの移動販売車が集まり、お祭り会場と化していた。

「何かのイベントかな？」

広場の掲示板には「四雀町・春の音楽まつり」のポスターがある。その脇にはイベントスケジュール表もあった。先週は桜まつり、来週はこどもの日フェスティバルがあるらしい。どうも毎週、大なり小なりイベントをやつてるっぽい。

アーケードを歩き交う人々もイベントには慣れているらしく、特に気負った様子も見

せずに広場に立ち寄っては、屋台や移動販売車で買った食べ物や飲み物を手に、公園のあちこちでベンチに座ったり佇んだりしながら、ステージでかわるがわる演奏するバンドミュージックを楽しんでいた。

私も空いたベンチを見つけ、そこに座って生演奏を聴きながらハンバーガーを食べた。

「うま。これうまー」

しゃきしゃきレタスにジュースシートマト、カリッと焼かれたベーコンのアンサンブル。チエーン店のバーガーに比べたらちよつと割高だけど、その価値はある。割引券ももらったことだし、来週もまた買おうかな。

食べ終えて、バンド演奏も一区切りついた頃合いで私は立ち上がった。さて、アーケードはまだ中ほどだ。

「この先にはどんなお店があるのかなあ」

「もし、そこなお嬢さん」

「ほえ?」

なんか声をかけられた気がした。

「お嬢さんて、私のこと?」

声をかけられた方向に振り向くと、広場の片隅でシートを広げて座るローブ姿の女性

が居た。

「そう、あなたよ。お嬢さん」

「……」

女性つて言っても、全身をローブに包み、顔もフードを深くかぶってよく見えなかった。ただ声の質から女性だと思っただけだ。

つまり一見して不審人物。夜道で見かけたら即通報レベルの格好だった。ただ、今の場所は屋台が立ち並びイベント広場。彼女が座るシートの横にも「タロット占い」と書かれた小さな看板が立っていた。

辻占いの客引きってことだ。よくある光景。看板に一回1500円と書かれてなきや付き合っても良かった。

でももうハンバーガー買ったし、今日使えるお小遣いはもう打ち止めなのよ。というわけで、

「間に合ってます」

「ああ、待つて、待つて、別にお金取ろうって訳じゃないから安心して!」

「そんなこと言つて、どうせ何かと理由を付けて代金を請求するつもりでしょう」

「しない、しないから!」

占い師さんはそう言つて、片手に一冊の本を抱えながら立ち上がり、覚束ない足取り

で私の傍にやってきた。なんだろう、長く座り過ぎて足でも痺れたのかな。

「あ、あのね。私があなただを呼び止めたのは占いのためじゃないの。いえ、ある意味占ったおりの結果ではあるんだけど、その」

「言ってることがわからないので失礼しますね」

「ああ待って待って、お願いだから話を聞いてえ!」

踵を返した私の背後で女性がすつ転んだ気配があつた。ただその状態で足首を掴まれてしまった。

「警察呼びますよ?」

「それは勘弁して。用件はすぐ済むから。一分、いいえ、三十秒で済むから」

「…結論だけ言つて下さい」

「あなたが持つているコインを渡して欲しいの」

「ほえ!?!」

コインつて、あの展望台で拾ったあれのことだろうか。でもあれは元の場所に置いてきたから、今はもう持つてない——

「!?!」

突然、右手に違和感が生じた。気付かぬ内に握りしめていた手の内に、何かがある。私は恐る恐る右手を開いた。

そこに、あのコインがあった。

「どうして……？」

確かに置いてきたはずなのに。

ゾツと背筋に悪寒が走った。

私の目の前で占い師さんが立ち上がり、安堵の息を吐いた。

「やっぱりあなたの手の内にあつたのね。でも間に合つて良かったわ」

「これ、いったい何なんですか？」

「知らない方が良いわ。あなただつてこんな不気味なもの、ずっと持っていたくないでしょう？」

「え、ええ」

「それを私に渡してちょうだい。それで全部おしまい。こんなコインのことはすぐに忘れるわ」

「……………」

私はかすかに震える手でコインを占い師さんに渡した。彼女はそれを持っていた本に挟み、同時にその本に挟まれていた一枚のカードを抜きだした。

「迷惑をかけたお詫びにサービスで占つてあげるわ」

そう言つて見せてくれたカードには、小荷物を肩に担いだ少年が描かれていた。カー

ドの上面には、「THE FOO L」と書いてある。

「これは『愚者』のカードね」

「ぐしや…って、え、愚か者ってことですか?」

「ばかつて意味じゃないのよ。これは『旅立ち』や『新たな始まり』を暗示するカードなの。ふふ、今のあなたにはピッタリかもね」

「え、わかるんですか?」

引つ越してきた街で新たなスタートを切ったばかりの境遇を言い当てられた気がして、私は思わずそう言ってしまった。

女性はフードの下で穏やかに笑いながらカードをしまった。

「これ以上の言葉は必要なさそうね。じゃあね、お嬢さん。どうかあなたに幸運を」

占い師さんはそう言い残し、私に背を向け、今度は滑るように離れて行った。

「あ、待って!」

あの占い師さんはそんじょそこらの占い師とは違う。多分、1500円ならめちやくちやお得大セールな実力者だ。これは占ってもらわない手はない。

そう思っって呼び止めようとしたけれど、彼女の姿はすぐに人混みに紛れて見えなくなってしまった。

「あー、行っちゃった。勿体無いことしたなあ」

ん？ でも待てよ。占い師さん、店そのまんま残してない？

そう思つて彼女が最初に座つていた場所に目を向けると、そこにあつたはずのシートも、小さな看板も、まるで最初から無かつたように消え失せていた。

「ほえ〜……」

私はしばらく、間の抜けた顔をしたまま、そこに立ち尽くしてしまつていた……

第1話 私がプリキュア! 明日よりの使者・キュアル カナ! (後編)

太陽が西へと傾き、夕焼けの刻が街に訪れていた。

街の中心街から少し離れた、郊外へと続く大通り。交通量の多いその道の交差点に、ひとりの女性が花束を抱いて佇んでいた。

女性の足元には同じように、しおれかけた花束が置かれていた。女性はその場にしゃがみ込むと、しおれた花束を新しいものに交換し、そして、しばらく手を合わせて拝んだ後、その場から立ち去って行った。

そんな女性の後姿を、少し離れた場所から二人の男たちが見つめていた。背の高いモデルのようなスタイルの美形の男たち。イエスと、タディー。

イエスは言った。

「人間は過去を引きずりながら未来へ進む生き物だ。いつも後ろを振り返り、名残惜しみながら前へ進んで行く」

「だがどんなに振り返ったって、名残惜しんだって過去には戻れねえ。過去はその場においてけぼりだぜ」

そう答えたタデーの目は、交差点に残された花束に向けられていた。

二人はそれぞれ違う方向を向きながら、懐から一枚ずつコインを取り出した。

それは、あの展望台でコイントスをしていたものと同じもの。ミクが拾い、占い師に渡したコインと同じもの。

二人が同時に、同じ言葉を紡ぎだす。

「過去に囚われた人間に憐憫を。取り残された過去には救済を」

イエスとタデーの声が重なり、唱和しながら、二人は手にしたコインを頭上に掲げた。

「サインコインよ。過去に従い未来を示せ——」

「——待ちなさい！」

二人の言葉を遮って、別の声が割り込んだ。二人はコインを握り掲げていた手を下ろし、その声の方向に視線を向けた。

そこにフード付きローブに身を包み、片手に一冊の本を抱えた、あの占い師が居た。

「イエス、タデー！　ようやく見つけたわ！」

「やあ、ターロット。久しぶりだね」

イエスが目を細め柔和な笑みを見せた。その一方で、タデーは眉間に皺を寄せ、嫌悪感を露わにしていた。

ターロットと呼ばれたその占い師は、イエスとタデイーに指を突き付けながら言った。

「二人とも、未来を改変しようだなんて、もう諦めなさい! あんたたちがこの時代に落としたサインコインは、私がもう回収して封印したわ!」

「へえ、今回は随分と早くに手を打ったんだね。まだプリキュアさえ存在していないというのに!」

「そうよ、もうあの子をプリキュアになんかささせない。始まる前に、全部終わらせる!」
ターロットはそう言いながら、手に持っていた本を開き、そこから一枚のカードを引き抜いた。

「THE SUN (太陽)!」

ターロットが手にしたカードが燃え上がり、そこに火球が出現した。

「フレアボール!」

二人に向かって、ターロットの手から火球が放たれた。

だが、迫る火球を見てタデイーが嘲笑う。

「ハッ! プリキュアが居なけりゃ、太陽の力もちんけな火の玉でしかないってか!」

タデイーは素手で火球を打ち払う。火球が霧散し、周囲に大量の火の粉が舞った。

「そ、そんな!? 私にプリキュアの力が無いって言っても、サインコインは封印した以上

あんた達だって力は失っているはず。なのに、どこにそんな力が!」

「サインコインが一枚だけだと、いつから思い込んでた?」

「え!?!」

虚を突かれたターロットに対して、イエスとタデーはそれぞれが手にしていたコインを見せつけた。

「あ、ありえない……今までずっと一枚しかなかったコインが、どうして?!」

慄くターロットに、イエスが答えた。

「サインコインとは未来を示す道標のコイン。たったひとつの未来しかないなら、確かにコインは一枚きりだった。でもね……」

「俺たちとプリキュアがこの時空で何度も戦い過ぎたせいで、ついに未来も不安定になっちまったらしい。おかげでコインもぎくぎく生まれ変わった」

タデーがそう言いながら、懐に手を入れ、そこから何枚ものコインを掴み出して見せた。

「嘘……そ、そんな……」

「ターロット、もうこうなってしまうては、どんな未来が訪れるのか、もう僕らにもわからないよ。だから、全ては運命に任せよう。……タデー、さっきの女性はもう遠くへと立ち去ってしまった。今回は君に任せるよ」

「ああ、そうさせてもらうぜ」

タデイーはそう言って、手にしていたサインコインの一枚を、交差点に残されていた花束へ向かって投げつけた。

それを見てターロットが叫ぶ。

「駄目!? やめなさいっ!」

しかしコインは花束へと吸い込まれていく。タデイーが叫んだ。

「サインコインよ、過去に従い未来を示せ! この地に眠る悲しみよ、現世に黄泉がえり未来へ進め!」

タデイーの言葉と共に花束は光り輝き、ぐんぐんと巨大化していく。同時に光の中で花束はそのシルエツトを禍々しく変貌させていく。

「何という事を……」

呆然と呟くターロットの前に、人の背丈をはるかに超える巨大な怪物が出現した。

その上半身は花束を胴体とし、そこから長い触手のような両腕が生えていたが、その下半身はひしゃげた自動車のような形状をしていた。

「征け、ネガテバー、未来へ!」

「テエエバアア!」

怪物：ネガテバーの長い腕が大きく振るわれ、ターロットの身体を直撃した。

「きゃあああ!？」

悲鳴と共にローブに包まれたその身体が高々と舞い上がる。それを、偶然通りかかった一人の少女が目撃していた――

私は目の前で繰り広げられている非現実的な光景に、完全に凍り付いてしまった。

街を散歩中、あの占い師さんをまた見かけたので、こんどはちゃんと占ってもらおうと思いを追ってみれば、いきなり巨大な怪物と遭遇してしまった。

「うっそ、なにこれ?！」

特撮? そんなわけないよね、と正気を取り戻したのは、あの怪物に占い師さんが弾き飛ばされた直後のことだった。

鈍い音と共に占い師さんの身体が宙を舞い、私の前に落下した。

それを目にした瞬間、私の中で相反する現象が同時に起こった。

背筋がゾツと寒くなった一方で、私は「かつてあったこと」を思い出してカツと頭が熱くなった。

——お母さん! お母さん!?

激しいブレーキ音、鈍い音、横たわる母、響き渡る救急車とパトカーのサイレン音。
「占い師さん、しつかりして!」

脳裏にフラッシュバックした光景が今の状況と重なり、私はとっさに占い師さんに駆け寄った。

けれど声をかけても彼女は身じろぎもしない。私は俯せに倒れていた占い師さんの傍に顔を寄せ、呼吸を確かめた。

でも、

「息が無い……!」

すぐに手首を取って脈を診るが、これも無い。それどころか彼女の手は奇妙なほど無機質で、固かった。まるでマネキン人形のようなのだ。

「とにかく、心臓マッサージしなくちゃ!」

俯せの彼女の身体の下に腕を入れ、仰向けにひっくり返す。——って、

「うわわあわあわ!」

仰向けになり、フードが下がって露わになった彼女の顔を見て、私は思わず悲鳴を上げてしまった。

「ま、マネキン!?!」

人間じゃない。でも確かに占い師さんはさつきまで動いていた。どうなってるの？

「驚かせてごめんさい。でも、ターロットは大丈夫ロト」

「この声は、占い師さん!？」

確かに同じ声だ。でも、マネキンとは違う場所から、けれどすぐ近くから聴こえてくる。

「ターロットはここだロト」

すぐ傍だ。私は目を落とす。マネキンが抱えていた本からだ。その表紙に、ネズミともタヌキともつかない丸いシルエットをした三頭身の謎生物が描かれていた。

その表紙の中の謎生物が、私に向かって手（というか前足というか）を振っていた。

「ほえ!? 本が動いてしゃべってる!？」

「話はあとだロト、今はとにかく逃げるロト!」

「テエエバアア!」

見れば花束と自動車が合わさったような怪物は、腕を闇雲に振り回しながら徐々にその場から移動しようとしていた。

このままじゃここに居たら巻き込まれる。私はしゃべる本を手にとって立ち上がった。

「ねえ、このマネキンは置いて行っても大丈夫?」

「問題ないロト。……っていうか、ターロットのことは放っておくロト!? 逃げるのはあなただけでいいロト!」

「そんなわけにはいかないでしょ」

私は本を抱えて走り出し、近くの路地へと逃げ込んだ。

怪物は私たちを追ってはこず、別の方向へゆつくりと進んで行く。相変わらず振り回している長い腕が近くの街路樹に当たり、それを押し折った。

私はそんな怪物の様子を、路地から息を殺して窺った。

「狙って何かを壊しているっていうより、適当に振り回している腕が偶然当たって周りを壊してみるみたい。まるで癩癩を起している子供のよう……。ねえ、あの怪物はいったい何なの?」

「あなたには関係ないロト。そんなことより、もつと遠くに逃げるロト」

「でも、怪物をあのまま放っておいたら街がどんどん壊されちゃうよ。何とかしないと」

「それはターロットの役目ロト」

「どうやって? マネキン、壊れちゃたでしょ?」

「うっ……」

「……ねえ、私がマネキンの代わりになるのか?」

「……っ!?!」

表紙の中で、ターロットがはっと息を呑んだのが分かった。

「この案、イケそうだね」

「だ、駄目ロト!!? ミクにはそんな危ない真似はさせられないロト!」

「どうして私の名前を知ってるの?」

「しまったロトおっ!!?」

「…もしかして、あのコインを拾ったときから、こうなるって知っていたんじゃないの?」

「……………」

「ねえ、ターロット。聞いて」

私は立ち上がり、路地から出て怪物を眺めた。

「私は、あの怪物を止めたい」

「……………どうしてロト?」

「あのまま放っておいたら、いつか無関係な誰かが傷つけられる。死んじゃうかもしれない。たまたま通りがかっただけでそんな目に遭うのは、理不尽過ぎるよ」

「だからって、ミクが危険を冒す理由にはならないロト」

「そうだね。でももう一つ放っておけない理由があるの。…あの子、とつても苦しそうなんだもん」

そう、やっぱりあの怪物は、何か目的があつて暴れている訳じゃない。他にどうしようもないから、そうしている。そんな気がする。だから……

「ターロット、お願い。私に手伝わせて。——ううん、違う。私に力を貸して!」

「ミク……つて、あわわロトお!?!」

その時、閉じられていた本の隙間から強い光が漏れだした。

「ロトー!?!」

ターロットが自らページを開くと、そこから一枚のコインが飛び出し、私の手に収まった。

これは、あのコインだ。

「サインコインの封印が勝手に解けたロト!?!」

「サインコイン……プリキュアの方……?」

不意に、そんな言葉を無意識に口にしていった。

「ミク……やつぱり、こうなる運命だったロトね」

「ターロット!」

「わかったロト。そのコインでプリキュアに変身するロト!」

コイントスを、と言うターロットに従い、私はサインコインを親指で弾いた。その瞬間、胸の奥から言葉が湧き出した。

「プリキュア！ フォーチューンセレクト！」

舞い上がったコインが、回転しながら落ちてくる。

裏に刻まれた紋様は変わらぬ過去。

鏡の様に滑らかな表は白紙の未来。

私の左手でターロットがページを開き、落ちてきたサインコインを受け止め、バタリと閉じた。

再びこのページを開いたとき、そこに現れるのは、表か、裏か。

「オーブーン！」

開かれたページから、光の粒子が噴水のように湧き出でて、私の身体に降り注いだ。

着ていた私服は黒地にピンクのフリルが付いたゴシック風のミニスカート姿へと変わり、それを覆うようにルビーのような光沢をもった赤い色のマントを羽織った。

視界の端に、赤く染まった自分自身の髪が見える。

そう、これがプリキュアとしての私。

「未来へ歩む、明日よりの使者。キュアルカナ！」

怪物：ネガテバーが私の存在に気づき、振り向いた。

「テエエバアア！」

がむしやらに振り回された長い両腕が、鞭のようになりながら私の周囲に次々と叩

きつけられた。

けど私はその場から動かなかった。動けないんじゃない。動く必要が無いだけだった。

当たりそうな軌道はごくわずかだ。これは当たらない。これも当たらない。でも、次の次は当たる。

ネガテバーの腕が私のすぐそばを掠めた瞬間、私は真上に向かって跳躍した。そのすぐ足をネガテバーの腕が横なぎに振り抜かれていった。

私はネガテバーの頭上を跳び越え、その背後の離れた場所に着地する。

「テエエバアア!」

ネガテバーは振り向き、突進してきた。下半身のひしやげた自動車がエグゾーストノートをがなり立てる。

それはまるで悲鳴のように私には聞こえた。

「ねえ、あなたは どうして泣いているの?」

「ルカナ、危ない口ト!」

大丈夫、ちゃんと視えている。私は軽くステップを踏んで、わずかに右へと移動した。しかしネガテバーもそれに合わせてカーブしてきた。

だけどその時、私は既に左へと大きく跳んでいた。

「テバあ!？」

ネガテバーは私を追って慌てて逆へカーブしようとしてバランスを崩し、土煙を立てて横転した。

「テバアアア! テバアアア!」

ネガテバーが泣き叫ぶ。まるで幼子の様に。

「ルカナ、タロットカードを引くロト!」

引けるのは一度に三枚。タロットの言葉に従い、私はページをめくった。

「初めの一枚は過去を示すカードだロト!」

めくったページに現れたのは、雷に打たれて崩れ落ちる高い塔が描かれたカード。

「THE TOWER (塔) の正位置だロト。その暗示は『突然の崩壊』」

その瞬間、私の脳裏に『ヴィジョン』が視えた。

交差点を渡る母親と幼子。そこに猛スピードで飛び込んできた一台の自動車。泣き崩れる母と、物言わぬ幼子――

「二枚目を、現在を示すカードを引くロト!」

私は二枚目のカードを引いた。そこに描かれていたのは、足を縛られた逆さ吊りの男の姿。

「THE HANGED MAN (吊るし人) の逆位置だロト。その暗示は『報われない苦難

“

「テバアアア!」

ネガテバーの声が聞こえる。寂しいよ、と泣く声。置いていかないで、と泣く声。忘れないで、と泣く声。

「三枚目は未来を示すカードだロト!」

私は引く。手にしたのは、大きな鎌を構えた骸骨の怪人。

「THE DEATH (死) の正位置だロト。暗示は “変化と終了”」

「そうだね。終わらなければ、何も始まらないよね」

「テエエバアア!!」

ネガテバーが起き上がり、再び突進してきた。下半身のタイヤが白煙を上げる。エンジンが轟音を上げる。ネガテバーが咆哮する。

「避けるロト!」

「いいえ、受け止める」

「ロトーっ!」

私はターロットを両腕で抱き込み、右足を後ろに引いて大地を踏みしめた。

真正面にネガテバーが迫る。

「テバアアアア!!」

凄まじい衝撃が私の身体を駆け巡り、踏みしめた足から大地へ伝わり足下のコンクリートを粉砕した。

それでも、私はその場に踏みとどまる。

痛い、痛い、痛い。全身の骨が軋む音がする。でも……

「……あなたはきつと、もつと痛かったよね」

「テバあ!？」

「私はあなたの過去を知らない。名前も知らない。お互い見知らぬ他人でしかない。でも、あなたの痛みと辛さは、少しでも見知った。——だから、あなたのことは忘れない」
私はネガテバーと接触したまま、右の拳を固めて後ろへ引いた。

その拳に、引き抜いた三枚のカードが光となって吸い込まれていく。過去、現在、そして未来。

「この痛みがある限り、私はあなたを忘れない!」

プリキュア・イレイザーナックル。

光の拳をネガテバーに叩き込む。力の奔流がネガテバーの体内を駆け巡り、その身体を構成していた悲しみや苦しみ、痛みを消し去っていく。

消えるという事は、この世から痕跡が消えること。

ネガテバーの姿が消えて行くと同時に、破壊された道路や街路樹もまた、何事もな

かったかのように復元されていく。怪物が暴れた過去など、どこにもなかったかのように。

そして私の姿も、プリキュアから普段の私へと戻って行った。

傷一つない、私の身体。あれだけの衝撃を正面から受けたはずなのに。

「プリキュアの耐久力はすごいロト。でもいくら平気だからって、あれは避けるべきだったロト」

「ああしなきゃ、私、すぐに忘れちゃうんだ。物覚え悪いから」

そう言いながら、あのネガテバーの姿を思い返す。心がズキンと痛み、私は安堵した。大丈夫、あなたが遺した傷は、あなたが生きた証は、私の心にちゃんとある。

胸を押さえた私の目の前で、一枚のコインがちやりと音を立てて落ちてきた。

「サインコイン? 私、落としちゃった?」

「これはネガテバーの核だったコインロト。この場所に残された『暗い過去』がサインコインを中心に集まって生まれたのが、あのネガテバーだロト」

「ほえく。けっこう面倒くさいアイテムなんだね、このコイン」

「だから封印しなくちゃいけないロト」

ページに挟んで封印完了。結構お手軽なのね。

「ねえターロト。コインを封印するのが、プリキュアの使命なの?」

「正確にはちよつと違うけど、今はそうロト」

「サインコインって、他にもまだいっぱいあるの？」

「いっぱいあるロト」

「じゃあ、いっぱい頑張らないとね」

「そうロトね。……って、何でプリキュアを続ける前提で話しているロトかー!？」

「えー、だって私、プリキュアだもん」

自分で言つて、何故だかすごく腑に落ちた。

きつと、こころなるべくして、こころなつたんだ。

「これからもよろしくね、ターロツト」

「勝手に決めないでほしいロト！ プリキュアは今回限りで解散ロトー!」

「ねえ、実は私たち、昔どこかで会った覚えとか無い？」

「な、無いロト！ 初対面ロト！ っていうか人の話を聞けロトー!」

「はいはい、じゃ家に帰ろうね」

「だから人の話を聞けロトー!？」

本を抱えて去っていくミクの姿を、離れた場所からイエスとタディーが見守っていた。

「やつぱり予言どおり、伝説の戦士プリキュアは誕生した。どうやらこの時間でも、僕らとプリキュアの戦いは始まったようだね」

「あのなイエス。今さら言っちゃなんだが、マッチポンプだよな、これ」

「ふふ、未来がどうなるかなんて、過去よりの使者たる僕らには知りようが無いよ。僕らはただ、今というこの瞬間、瞬間を必死に生きるだけさ」

イエスはそう言いながら空を見上げた。

夕陽は既に沈み、晴れ渡った空には満点の星が瞬いていた。

「僕らにとって未来は多くの可能性に満ちている。そう、まるでこの星空の様に。そしてプリキュアもまた——」

見上げる二人の頭上で、流れ星が一筋の尾を描いた。

「——さあ、新たなプリキュアを迎えに行こう」

第2話 新たなプリキュア!? 星詠みの使途・キュアス トロジュー! (前編)

「星巡りの唄を知っているかい?」

満天の星空を見上げながら、イエスは唐突に語り始めた。

「宇宙の深淵を渡る星々たちは、定められた己の軌道をわずかも違えることなく進んで行く。それこそが宇宙の真理だと、古の人々は信じ、探求を始めた」

「そんな話は知らんし興味もない」

隣のタデイーはそう吐き捨て、ため息を吐いた。

だがイエスは、そんな相棒の様子などまったく無視して、フンフフンと鼻歌混じりに奇妙な節回しで、歌いだした。

「巡れ巡れよ星々よ、フンフンフン、人のさだめをその背に乗せて〜♪」

「何なんだ、その適当な歌は?」

「古から伝わる星巡りの歌だよ」

「嘘つけ。絶対今適当に思いついただろ」

「失礼だね。星巡りの歌はちゃんと実在するよ。ただ、僕がその内容を思い出せないだ

けさ」

「同じことじゃねーか!？」

「フフフ〜ン♪ 廻れ廻れよ星々よ〜、フンフンフフ〜ン♪」

タデイーのツツコミにもイエスは馬耳東風で、上機嫌に鼻歌を歌い続けた。

駄目だこいつ、他人の話なんか聞きやしない。タデイーは深くため息を吐きながら、眼下に広がる景色に目を向けた。

満天の星空の下、佐世浦市街地の眩いネオンが拡がっていた。

二人が立っているのは、とある高層マンションの屋上だった。

「流れ流れよ、星々よ」

イエスは相変わらず夜空を見上げながら歌い続けていた。その見上げた先で、流れ星が一筋の長い長い尾を引いた。

「人の運命をその背に乗せて、未来へ運べ、星々よ」

流星は消えず、ゆるりと弧を描いてその軌道を変えた。

「選べ選べよ、星々よ。未来を示す少女を選べ。星詠む力の少女を選べ」

流星が…いや、それは流星ではない。その何かが、二人が立っているマンションの、その一室に向けて飛び込んだ。

「あわああっ!？」

どこからか、ゴツンという音と共に少女の悲鳴が聞こえてきた。それを聞いて、イエスが満足そうに笑みを浮かべた。

「どうやら、運命の出会いは無事に果たされたようだね」

「無事って…おいおい、大丈夫なのかよあれ？ 顔面に思いつきりぶつかっていたぞ？」

「平気だよ。妖精と少女の出会いというものは、ああいうものなんだよ」

「どういふものだよ!？」

「ふふ」

イエスは明確に答えることなく、薄く笑みを浮かべたまま、どこからともなくサインコインを取り出した。

「さあ、プリキュアを生み出そう。新たな未来を選ぶ者、星詠みのプリキュアを」

イエスの手からサインコインが離れていく。それはそのまま屋上の縁からはるか下の路上に向かって落下していった。

だが、その途中で重力を無視するかのように軌道を変え、流星が飛び込んでいったその部屋へと、同じように飛び込んでいった。

「あわつ、痛ったあい!? 今度はコインって、今夜はいつたいなんなのよおお!？」

散歩したりハンバーガーを食べたりプリキュアになったりと、なんだかんだと色々あった昨日の出来事から、一夜が明けた今日の朝。

私はいつもどおりに目を覚まし、いつもどおりに朝の支度を整えると、制服姿で玄関に立った。

「お父さん、私もう学校に行くからねー。朝ごはんは準備しておいたからなるべく早めに食べてね。それとお弁当はキッチンに置いてあるから、仕事に行くときは忘れずに持って行ってね。わかった?」

うちは2LDKの賃貸アパートだ。私が立つ玄関のすぐ近くの閉まったドアの向こうで、遅番のため昨晚遅くに帰宅した父は、まだ布団の中に居るのだろう、「ふあゝい」と寝ぼけた声で返事した。

「じゃ、いってきまーす」

「いってらっく……ふあゝ……」

あくび混じりの父の声を背中で聞きながら、私はアパートの部屋を出た。

昨日に続いて今日もいい天気だ。

春から初夏へと移り変わろうとしている季節の中、私は中学校への通学路を歩きながら、周囲に人が居ないことを確かめると、カバンから一冊の本を取り出した。

その本を小脇に抱えながら、私は独りごとを呟くように、「ねえ、ターロット」と呼びかけた。

「何ロト?」

と、私の小脇で、その本：ターロットが返事した。

「昨日の夜、プリキュアとか、ネガテパーとか、それと『過去よりの使者』については一通り説明してもらったけどさ」

「したロトね」

そう、昨晚自宅のアパートに帰ってから、私はターロットを説得してプリキュアを続けることを認めてもらい、そしてある程度の事情については説明してもらっていた。

先ずこの本：ターロットは、未来からタイムスリップしてきた妖精らしい。

今よりもずっと先の遠い未来で、あるときから、その未来から見た過去の歴史がどんどん変化してしまったらしい。

それはある時代から始まって、そこからターロット達が暮らす未来へ向かって、歴史の文書記録や、遺跡や、そして歴史に関する人の記憶が、どんどん曖昧に、そして不安定になってしまったそうだ。

なので、タイムスリップの能力をもつ『本の妖精：ターロット』が、そのとある時代である、この現代へとやってきたそうだ。

そしてそこで、歴史に干渉しようとしている二人の男を見つけたのだという。それが
イエスとタデー、
“過去よりの使者”を自称する二人組だ。

彼らは“サインコイン”という不思議な力を持つコインを使って、土地や人が持つ
“暗い過去”から怪物：ネガテバーを生み出している……

……と、そこまで説明されたところで、ちょうど父が帰ってきたので説明はいったん
中断となった。

その時、時刻はもう深夜近くになっていた。

帰宅した父は、いつもならとつくに寝ているはずの私がまだ起きて居たことに怪訝な
顔をしたが、

「お父さんの帰りを待っていたの」

とか何とか言って適当にごまかした。しかし、これは拙いごまかし方だった。

父は仕事の疲れと深夜ハイテンションもあつてか妙に感激してしまい、久しぶりに一
緒に寝ようかなんて言い出してきたものだから、それをさらにごまかして部屋から蹴り
出すのに随分と苦労したものだ。

ただでさえ狭いアパートなのに、これ以上思春期の女の子からパーソナルスペースを
奪おうとしないで欲しいものだ、まったく。

そういうこともあつて疲労も溜まり、残る説明は後回しにしてもらつてグツスリと眠

り、そして今朝に至ったというわけだ。

閑話休題。

「で、昨晚の続きで、いくつか質問っていうか疑問があるんだけど、訊いてもいいかな？」

「いい口ト。言ってみる口ト」

「先ずさ、妖精って、何？」

「今さらそれ口トか!？」

「他にもツツコミどころがいっぱいあり過ぎて、頭の中が飽和状態だったんだよねえ。というかさ、未来から来たって言ってたけど、もしかして未来人って、みんなターロツトみたいな妖精になっちゃってるの？」

「そうじゃない口ト。ちゃんと人間は人間として社会を築いている口ト。それはそれとしてターロツトのような妖精たちが棲む世界 “フェアリーランド” とも交流がある口ト。未来では人間と妖精が仲良く共存している口ト」

「ほえ、ファンタジーな社会になっているんだねえ。いったい、いつぐらいの時代からそうなったの？」

「それが、わからない口ト」

「わからない？」

「そう口ト。ちよつと前までは人間界と妖精界の歴史については、ちゃんと残っていて、

語り伝えられてきたロト。でも、いつのまにかその記録も、記憶も、全部曖昧になってしまったロト。昔のことについて、みんなバラバラなことを言い出して、そのたびに、本や遺跡といった物理的な記録までころころと変化してしまう異常な現象が起き始めたロト」

「それが、未来が不安定になったってことなんだね」

「そうロト。でも、その中で唯一、変わらなかつた歴史が一つだけあつたロト」

「それって、どんな歴史?」

「『伝説の戦士、プリキュア』が未来を創つた、という歴史ロト」

「ほえ!? それってつまり、私が歴史に名を残しちやつてるってこと? うわ、私ってば

もしかして超重要人物?」

「誰もミクがそのプリキュアだとは言っていないロト。この時代はともかく、今より先の未来にはプリキュアは他にもいっぱい居るロト」

「え、そなの?」

「プリキュアは、人間と妖精が力を合わせて変身する戦士のことロト。だから別にターロットだけが特別ってわけじゃないロト」

「ほえ、そうなんだ。……あれ? ってことは、もしかしてターロット以外にも、この時代に妖精が来てたりするの?」

「そ、それは口ト……」

ターロツトが妙に歯切れ悪くなり、それきり押し黙ってしまった。

「ん？ どうしたの、ターロツト？」

私がターロツトに目を落とそうとしたとき、ちょうど背後から自転車がベルを鳴らしながら近づいてきた。

「おっはー、明日原さん！」

同時に元気いっぱいな挨拶も聞こえてきた。

振り向くとそこには、私のクラスメートである日比野 星華（せいか）さんが自転車に乗って近づいてきたところだった。

「おはよう、日比野さん。今日も朝からテンション高いね」

「でしよでしよ、ここんところ三日連続でラッキー星座トップ3入りしているからね！」

日比野さんはニハハつと満面の笑みを浮かべながら、私のそばで自転車を降りた。

彼女は自宅が学校から遠いため自転車通学が認められていたけれど、私と仲が良いこともあって、登校中に出遭ったときはこうして一緒に徒歩で通学することが多かった。

まあ、中学校が山の中腹に位置していることもあって、通学路が途中から急な坂道になつていることも多分に影響しているとは思うけれども。

自転車をペダルを漕いで登るにはちよつと辛そうな坂道を、日比野さんは自転車を押

して歩きつつ、私に話しかけた。

「明日原さんって、何座だっけ?」

「私? 蟹座」

「おお」

途端に日比野さんの顔がどんより曇った。なんだ、いったい何が起きた。

「明日原さん、ドンマイ」

「どうして蟹座ってだけで慰められなきゃいけないのかな?」

そういえば父が子供のころ、蟹座ってだけでバカにされていたと話をしていたことを思い出した。なんでも当時、星座をモチーフにした漫画が大流行していたそうだが、その漫画で蟹座は悪役扱いされていたんだそうだな。

——友達同士でごっこ遊びするときは決まってやられ役でな。しかもセリフは「あじゃぱアー!」以外に許されないんだぞ。ひどい扱いだ。

と、のたまっていた父も当然、蟹座だ。いったいその漫画でどんな扱いされていたんだ蟹座。

「あー、そういえばウチのパパも同じようなこと言ってたわ。ごっこ遊びでオカマ扱いされたって」

「パパさん何座?」

「魚座」

「魚でオカマ？」

「意味わかんないよね〜」

と日比野さんはケラケラと笑った。ちなみに日比野さん自身は双子座だそうだ。

つと、話がズレた。

「何で読んだこともないマンガの話になっているんだっけ？」

「明日原さんから振ってきたんでしようが」

「蟹座というだけで慰めてきたのは日比野さんでしょ」

「そう、それよ」

「どれよ？」

「今朝のワイドショーの星座占いコーナー、蟹座が最下位だったのよ」

「ほえ、マジ？」

「マジマジ。今日は面倒なトラブルに出くわすかもしれないから、大人しく引きこもるのが良いでしょう、だってさ」

「トラブルかあ」

と言つても昨日ほどのトラブルがそうそう起きると思えないけれど。

「そういえば、双子座の占いにはなんて書いてあったの？」

「新しい出会いがあるかも、だってさ。もしかしたら運命の出逢いとかあったりしちゃったり? やだ、どうしよう。ちよつと期待しちゃう!」

二へへ、と締まりのないニヤケ顔の日比野さん。表情がコロコロ変わるのが彼女の魅力の一つだ。

そうやって日比野さんと他愛のない話をしながら歩いているうちに、佐世浦中学校の校舎が見えてきた。

ホームルームが始まる10分前だ。まだ遅刻するほどでは無いが、周りを歩く他の生徒たちの中には少し急ぎ足になっている者もチラホラ見かけた。

そして――

「ほらほらアキラってば、急いでってば!」

「うるせーな珠代、まだ時間あるから歩いたって平気だつての!」

「そんな余裕ぶっているから、いつもギリギリになるんでしょ!」

私たちの後ろから賑やかな遣り取りが聞こえてきた。

振り返ると、気だるそうな一人の男子生徒と、その背中を押して歩く女子生徒の姿があった。

それを見て、日比野さんが声をかけた。

「アキラつちと珠代つちじゃん。おっはー。今日は遅刻せずに間に合いそうだね!」

「よお星華。明日原さんも一緒か。お前らとここで会えたなら、やつぱ全然余裕じゃん」
「それは私が急かしたお陰でしょ。家出た時のペースのままだったら絶対に遅刻していたわよ」

この男子生徒は水木 晶（あきら）くん。彼もクラスメートの一人だ。そしてその背中を押していたのは、観月 珠代さん。昨日、アーケードでハンバーガーを買った店で働いていたあの子だ。

水木（みずき）と、観月（みづき）で、二人とも名字の発音が同じ。しかもこの二人は幼馴染なので二人でいることも多いので、クラスメートのほとんどは二人を名前で呼んで区別しているらしい。

まあ私はまだ付き合いが浅いから名字呼びだけど。

「明日原さん、おはよう」

「おはよう、観月さん。昨日はハンバーガーご馳走様。とっても美味しかったよ」

「そう言ってくれると嬉しいわ。よかつたらまた来てね。私が店番の時はサービスしちゃうから」

「また調子の良いこと言ってるなあ、お前」

と、水木くんが口を挟んだ。

「そんな何でもかんでもサービスしてるのがバレたら、またおばさんに怒られちゃうだ

ろうが」

「良いじゃない、サービス分は私のお小遣いからちゃんと払っているから問題ないわよ。損して得取れ、よ」

「いやいや観月さん、ちよつと待って」

今、聞き捨てならないことを聞いてしまったぞ。

「昨日のジューズ代つて、観月さんが代金を立て替えてくれたの!」

「うん、そうだよ」

あっけらかんと答えた観月さんの頭を、水木くんが横からコツンと軽く小突いた。

「あ痛、ちよつとアキラ、なんでぶつのよ?」

「そんな強く叩いてねえよ。それより、お前の余計なサービスのせいで明日原さんが気にしちゃったじゃねえか」

「え、どうして?」

観月さんの目が私に向いた。

私は苦笑しながら答えた。

「ええと、あれはてつきり、お店としてのサービスだと思ってたの」

「んん? あれも店のサービスだよ。だって私の家の店だし」

そう言った観月さんは、また水木くんから小突かれた。

「なんで叩くのよ、もお!？」

「そういうのを公私混同って言うんだよ。お前はもうちよつとプライベートと店を切り離せ」

「言ってる意味がわかんないよ!」

「おーい、お二人さん」

と、日比野さんが少し先を歩きながら、こちらに向かって呼びかけてきた。

「そろそろ急がないと、私たちもまとめて遅刻になっちゃうよ」

「え? もうそんな時間?」

観月さんが慌てて、水木くんの背中を押して走り出した。

「うわ、つとと!? おい珠代やめろ危ないって!」

「そう思うならちゃんと言えよ! ほら、明日原さんも急ぎましょう」

「ほえ、あ、はいはい」

促されて、私もみんなの後を追って走り出した。

こうして今日も、私のいつもと同じ日常が幕を開けたのだった。

勉強は好きでも嫌いでもない。

というところだ。好きな教科と、苦手な教科がはっきりしている、というのが正確なところだ。大雑把に分けると、文系は好きで、理系は苦手。

文系の中でも歴史や地理が特に好きだ。これは私が、幼い頃からあちらこちらを引越してきた影響もあるかもしれない。見知らぬ土地を見知るには、歴史を知るのがその第一歩だ。と、父はよく言った。

というわけで、今は歴史の授業中だ。

黒板には年号や西暦、それに関連する単語なんかがびつしりと書かれ、それを前にして、おじいちゃんみたいな年配の老教師がぼそぼそとした声で教科書を読み上げている。

正直、歴史は教科としては好きだけど、授業が面白いかといえば微妙なところだ。

基本的に暗記量が試験の結果を左右するような教科なものだから、興味が持てない人々にとっては単に苦痛で退屈な時間ではないかと思う。

現に私の隣の席では、日比野さんが教科書を立て、その背後で机に突っ伏して居眠りをしていた。

ちよつと離れた前方の席でも、水木くんが頭をこつくりこつくり揺らして、そのたびに横に座る観月さんに突っつかれている。

私というと、教科書を開いた横で、ノートを取るふりをしながら、ターロットをペー

ジを開いた状態で置いていた。

何も書かれていないその白いページに、ひとりでに文章が浮かび上がった。

《昨日あんなことがあったのに、よく平然と学校で過ごせるロトね》

私はペンを取り、ノートに文字を書き込んで返事した。

《そんなことないよ。これでも色々と気にしているし、授業もあんまり集中できていないし》

私の書いた文章は、その直前の文章と共にすぐに消え去り、そして新たな文が浮かび上がる。

《そうロトか？ ミクはあんまり感情が表情に出ないから、わかりづらいロト》

《そうかな？》

《そうロト。隣の子、日比野って名前だったかロト。この子に比べたらミクは表情のバリエーションが少ないロト》

《そりや比べる対象が悪いよ。日比野さんって、むしろ無表情で居るほうが珍しいレベルだし》

書きながら、私は隣に目を向けた。

「……一へ……」

あ、よだれ垂れてる。

「……うえ……せな、なにすんのお……ばかあ……」

今度は眉間に皺寄せて、への字口になった。寝てる時もこんなに表情が変わるなんて、よく顔が筋肉痛にならないもんだ。

そんなことを思っていると、

「明日原さん、この質問に答えてください」

老教師が黒板を示しながら指定してきたので、私は席から立ち上がった。

黒板には、「佐世浦が村から市へと発展した理由」と書かれていた。

老教師が言った。

「この佐世浦市は、近代以前は小さな漁村でしかありませんでした。それが、ある理由から急激に発展したのですが、それが何故か、わかりますか？」

「はい」

私は教科書に目を落とすことなく答えた。

「維新後に発足した新政府により海軍基地の拠点として選ばれたからです」

「そのとおりです。では、なぜ選ばれたと思いますか？」

この問いの答えは教科書には載っていないなかつたはずだ。だから私は推察と想像力を交えて答えた。

「地形が軍港に適していたんじゃないでしょうか。山々に囲まれた広い入り江が陸地の

奥深くまで伸びているから、嵐になっても海が荒れなかったり、外国からも攻めにくかったり……とかだと思えます」

「ふむ、良い答えですね。ほとんど正解と言っても良いでしょう」

老教師は満足そうにうなずくと、私に座ってよろしいと促した。

私は内心で安堵しながら着席する。

《授業はほとんど聞いていなかったのに、大したものロトね》

《教科書はもらったその日に一通り目を通していたからね》

《真面目ロト》

《白状すると、理系の教科書は開いてすらいらない》

《偏っているロト》

《自覚してる》

「つまりこの佐世浦の街は近代以降、海軍の一大拠点として発展し……」

老教師が相変わらずぼそぼそとした声で授業を続けている。

「……つまり佐世浦の発展は、我が国の近代化の歩みに深く関わってくるわけです。そのため、皆さんにもつと地元の歴史を深く知ってもらおうべく、来週の校外学習で、隣町にある海軍墓地の清掃活動を行ってもらいます」

老教師の言葉に、かろうじて起きていた生徒たちが「ええ……」と面倒くさそうな声を

上げた。

それを聞きながら、私はターロットに思ったことを書き込んだ。

《プリキュアは続けたいけれど、ちよつと不安があるんだよね》

《どんなことロト?》

《今みたいな授業中にネガテバーが現れたら、どうしようかな、ってね。どうやって抜け出したらいいかな? 先生に「プリキュアやらなくちゃいけないので早退します

”って言うって通じるかな?》

《まだプリキュアどころか、ネガテバーも世間には認知されていないから、話が通じないと思うロト。でもまあ、しばらくは平日の昼間にネガテバーは出現しないから、安心していいロト》

《どうしてわかるの?》

《ネガテバーの出現を占ってみたロト》

《へー、そんなことができるんだ》

《これでも占い師ロト。…ただ》

《ただ?》

《今夜、また出るロト》

《マジ?》

《マジドロト》

ターロットのその文章が消えた後、白紙のページに、複数のカードが並べられた図が浮かび上がった。

六枚のターロットカードが円を描くように配され、さらにその下にも四枚のカードが横並びに配されていた。

《なにこれ？》

《ヘキサグラム法とフォーカード法を組み合わせて応用した占いロト》

《ゴメン、わかんない》

《説明してもどうせ理解できないロト。結論だけ言うと、今夜、近所のドラッグストアの周辺で異変が起きる可能性が高いロト》

《そこまで予想できちゃうなんて、ターロットってやっぱり凄いなだね》

《伊達に未来の代表としてこの時代に來ている訳じゃないロト》

えっへん、と胸を張っていきそうなターロットの文章。表紙の様子は見えないけれど、きつとドヤ顔をしているに違いない。

教室にチャイムが鳴り響き、授業が終わった。今日の授業はこれで最後だった。老教師がそのまま明日の予定を伝え——この教師が、そのまま私たちのクラスの担任だった——退出していった後、私の隣で、日比野さんがようやく目を覚ました。

「んあーっ、よく寝た。よし、放課後だ。今日も部活がんばろー」

「ねえ日比野さん。天文部って、こんな明るいうちから何をやっているの?」

「あ、明日原さん気になる? 知りたい? いっそ入部しちゃう?」

「別に入部してもいいけど、私も色々と用事があるから毎日は参加できないよ。今日もちよつと用事あるし」

「名前だけでも入部してくれたら大助かりよ。んで、何やってるかというとな、文化祭用のプラネタリウムを造っているのだよ」

「ほえ、プラネタリウムって、あのでっかいドームに星空を映すアレを?」

「ま、手作りだから、教室にテント張ってその内側に映すくらいの小規模なシロモノだけどね。今はまだ設計図を描いているところ。本格的に制作を開始したら、その時は手伝って欲しいな」

「うん、いいよ。楽しそう」

「よつしや作業員一名確保! サンキュー明日っち。いやもう、ミクっちって呼んでいい?」

「いいよ。じゃあ私も星華ちゃんと呼ぶね」

「もちもち大歓迎よ。よつしや、それじゃ頑張っちゃうぞー!」

そう言つて日比野さんは——いや、星華ちゃんは張りきつて教室から出て行つた。

その後姿を、私だけじゃなく、水木くと観月さんも見送っていた。その二人の視線が、私に向く。

二人が私のそばにやってきて、水木くんが肩をすくめながら言った。

「星華のやつ、けつきよく明日原さんまで巻き込んだのか。気を付けろよ。あいつは人使いが荒いからな」

「もしかして水木くんも天文部なの?」

私の質問に、水木くんと、そしてその隣に居た観月さんが同時に頷いた。

観月さんが言った。

「星華に、どうしても、つて頼まれたのがきつかけよ。でも、私は店の手伝いがあるから、明日原さんと同じく毎日参加できないけどね。アキラも、他の部活との兼務だし」

「へえ、水木くんつて他に何の部活動をやっているの?」

私の質問に、水木くんが「フットサルと、ミニバスケ」と得意げに答えた。

「ほえ、運動部を二つも掛け持ちしてるなんて、すごくない?」

「へっへっへ、すげえだろ。運動神経は抜群なんだぜ、俺」

ドヤ顔の水木くん。その隣で、観月さんが呆れた表情を見せた。

「どっちも公式試合に参加しようとしてもしないお遊びクラブでしょ。昔はリトルリーグでエースを張っていたっていうのに、なんでやめちゃったのかなあ、もう」

「……うるせえよ」

観月さんの言葉に、水木くんは不意に表情を消した。

「…俺も部活があるから、もう行くぜ。じゃあな」

水木くんはそう言い残して、私たちに背を向けて教室から出て行ってしまった。それを見送る観月さんは、どこことなく不満そうで、そして少し寂しそうだった。

「アキラ……」

「なんだか、色々とありそうだね?」

「……別にそんな深い事情があるわけじゃないのよ。単にあいつが飽きっぽいだけよ。……あ、そうだ明日原さん。さつき星華のことを名前で呼んでいたでしょう?」

「うん」

「私も名前で呼んで欲しいな。駄目かな?」

「ううん、駄目じゃないよ。珠代…ちゃん? さん?」

「ちゃん付けがいいな」

「よろしくね、珠代ちゃん」

「ふふ、よろしくね。ミクちゃん。ところで、今日はウチの店に寄っていく?」

「行きたいけど、もうお小遣い残り少ないんだよね。来週でいい?」

「無理にとは言わないわよ。それに世間話に来るだけでも大歓迎だからね」

「うん、じゃあまた行くね」

ただ、今日は今日で用事があるのも事実だった。ネガテバーもそうだが、それとは別に、父が今日は早く帰ってくるので夕飯の準備を早めにしなくちゃいけない。

と、言う事を珠代ちゃんにはかいつまんで（もちろんネガテバーのことは除いて）説明した。

「へー、ミクちゃん父子家庭なんだ。どおりでしつかりしてると思った」

「意外とフラットな反応するんだね、珠代ちゃん」

「私の周りにも片親の家庭って他にも居るからね。変に気遣うより、そういうもんだってあっさり受け入れるべきものかな、ってね。…それとも逆に傷ついた？」

「全然。私はむしろ、そういう反応の方が助かるかな」

「そう、よかった。じゃあこれ以上引き留めるのも悪いし、私も帰るね。バイバイ」

「うん、バイバイ」

珠代ちゃんとも別れ、私は学校を出た。

そのまま家へと帰る道すがら、通り道にあるスーパーマーケットに立ち寄って、夕飯の買い出しを行う。

えっと、今日のお買い得品は……つと。あれ？

「あそこに居るのは、星華ちゃん？」

私の視線の先、子供向けお菓子コーナーでしゃがみこみ、商品を品定めしている彼女の姿があった。

「星華ちゃん、なにしてんの?」

「あわあっ!?!」

声をかけた瞬間、彼女は奇声を発して飛び上がった。彼女が、信じられないものを見たという驚愕の表情を私に向ける。

「え、違つ、あたしは、その、えと…!?!」

「今日は部活じゃなかったっけ?」

「いやだから違——いや、むしろ好都合?」

彼女は何やら呟いたかと思うと、急にいつもの調子で笑い出した。

「二ハハ、そう、部活中なんだけど、ちょっと買い出しでさ。いや、あんたと会うなんて本当に奇遇だねえ。じゃ、あたしは急いでいるから、これで」

そう言つて彼女は両手にお菓子——特撮ヒーローモノの食玩を数個抱えて、レジへと走つて行つた。

「……星華ちゃん、なんか様子が変ね」

そういえばオデコに絆創膏を貼っていたけど、どこかにぶつけたのかな?

「まあいいや。明日、会ったら聞いてみようつと」

私はそれ以上気にすることを止め、買い物に気持ちを切り替えた。

夜。

月も無い、しかしそのおかげで星々に埋め尽くされた満天の星空の下、郊外にあるドラッグストアから一人の中年男性が出てきた。

疲れ切ったような暗い表情に、猫背気味に丸まった背中と、力のない足取り。片手に下げられたビニール袋には大量の缶ビールと、そして太いロープが入っていた。

中年男性は駐車を抜け、そのまま徒歩で、人気がない方向へと進んで行く。

周囲から民家が消え、雑木林に囲まれ、街灯も無い暗い道へと入ったとき、その中年男性の行く手を阻むかのように、ひとりの背の高い人影が現れた。

「過去に囚われた人間に憐憫を。取り残された過去には救済を」

それは「過去よりの使者」の一人、イエスだった。

暗がりの中であるにも関わらず、星空の下に佇むイエスの姿は不思議と輪郭がうつすらと輝いているようにも見え、それはまるで此の世のものでは無い、どこか幻想的な美しさを纏っていた。

中年男性は、突然現れたイエスのその異様な雰囲気と言葉を失い、その手からビニール袋を取り落としてしまう。

そんな中年男性を前に、イエスはサインコインを取り出した。

「サインコインよ。過去に従い未来を示せ。その心を占める悲しみを、現世に放ち未来へ進め……」

イエスの手からサインコインが離れ、それは自ら意思を持つかのように宙を飛び、中年男性の胸元へと吸い込まれていった。

驚愕した表情の中年男性の胸から黒い霧が噴き出し、それはそのまま彼自身の全身を覆いつくし、丸い塊となってそのまま巨大化していく。

「さあ征ぐがいい、ネガティブ。心を支配する悲しみのままに」
「テエバアアアアア！」

—— (後編に続く) ——

第2話 新たなプリキュア!? 星詠みの使途・キュアス トロジャー! (後編)

買い忘れがあつた、と父に言い訳して出かけた先。

近所のドラッグストアに向かう途中の人氣のない辺りに差し掛かった時、不意に、うなり声のような不気味な声が、どこか遠くから微かに聞こえてきた。

「ミク、今の声は、ネガティブの咆哮だロト!」

「ほえ、本当に出たんだ。ターロットの占いつてすごいね、ほんと」

「感心するのは後にするロト。プリキュアに変身するロト!」

「わかった」

私はサインコインを取り出し、指で空中高くに弾き上げた。サインコインが星空の中でキラキラと輝きながら回転する。

「プリキュア! フォーチューンセレクト!」

落下してきたサインコインを、左手に開いたターロットのページで受け止め、閉じる。

「オープン!」

着ていた私服は黒地にピンクのフリルが付いたゴシック風のミニスカート姿へと変

わり、それを覆うようにルビーのような光沢をもった赤い色のマントを羽織った。

視界の端に、赤く染まった自分自身の髪が見える。

そう、これがプリキュアとしての私。

「未来へ歩む、明日よりの使者。キュアルカナ!」

変身を終わると、私の身体が一気に軽くなつたように感じられた。感覚も研ぎ澄まさ
れ、遠くに居るネガテバーの位置が手に取るように感じられる。

私は大地を蹴り、夜の風と一体化するように高々と跳躍した。

拡がった視界の中、眼下に佐世浦の街のネオンや、住宅街の光がまるで星々のように
煌めいている。

その地上の星が輝いている場所から外れた闇の中に、ネガテバーは居た。

民家も何も無い、街灯さえも無い暗闇の中で、それをさらに濃くしたような黒い霧の
塊が、そのネガテバーだった。

「昨日と違って、形が不定形だね」

「ネガテバーは元になつた過去次第で形が変わるロト」

「じゃあ、あれはどんな過去なの?」

「わからないロト。でも、カードを引けば暗示が出るロト」

そうだった。私、キュアルカナは一体のネガテバーにつき、過去・現在・未来を暗示

する三枚のタロットカードを引くことができる。

私はネガティブの居る現場付近に着地すると、黒い靄のようなその存在に意識を集中しながら一枚目・過去を暗示するタロットカードを引いた。

手にしたカードに描かれていたのは、冠をかぶり、立派な玉座に座った白髭の老人の姿。

「THE ENPEEROR（皇帝）の逆位置だロト。その暗示は『失脚』『疎遠』『孤独』」

その瞬間、私の脳裏に「ヴィジョン」が視えた。

己の半生をかけ、苦勞して設立した自分の会社。しかし経営難で業績は悪化し、やむなく解雇した従業員からは罵詈雑言を浴びせられ、それでも悪化して会社は遂に潰れ、家族さえも離れて行った。

今では、賃貸アパートの狭い部屋で、寂しくひとりきりで、手元に残ったわずかな金で買った酒をあおるだけの毎日……

「このネガティブ、まだ生きてる人の過去だ……」

現在進行形で続く、終わりの無い、形の無い不安。それがこの黒い靄の正体だった。

「これにどうやって対処すればいいの？」

「タロットにも分からないロト。とにかく二枚目を引いてみるロト」

二枚目は現在を示すカード。引いたのは、二頭の馬に引かれた銀色の馬車。

「THE CHARIOT (戦車) の正位置だロト。暗示は『迅速』『前進』」

「あら、意外と前向き?」

「そうとも言えないロト」

「テバアアア!」

黒い霧から悲痛な叫びが響き渡った。私はその叫びに耳を澄ます。

何だろう、この感じ? 心を急かされるような、焦り、苛立ち。

ああ、そうか。不安に押しつぶされそうな現在の状況から、抜け出さたくて、もがいているんだ。

「テエエバアアアア!」

ネガテバーを構成する黒い霧が、その色をさらに濃くし、どろりと粘度を帯びた。

膨れ上がっていた黒い塊が、今度は逆に小さく収縮し、黒いアメーバのようなどろどろとした塊へと変化する。

「テバアアア!」

ネガテバーから数本の触手が伸ばされ、私の周囲をでたらめに叩き始めた。

私は自分に当たりそうな攻撃だけを見極め、最小限の動きでそれをかわした。

攻撃を避けながら、私は、ネガテバーの塊の中に、また別の気配が含まれていること

に気が付いた。

「あのネガテバーの中に、まだ生きている人が居るわ！」

きつと、このネガテバーを生み出してしまった人だ。

なんとかして助けないと。

私は未来を示す三枚目のカードを引いた。

手にしたのは、ライオンが描かれたカード。

「STRENGTH（力）の逆位置だ口ト。暗示は“無力” “自身の喪失”」

「確かに今のままじゃ、そうなっちゃうよね」

だけど、ネガテバーに取り込まれている人は、まだ生きている。

なら、今のままじゃダメだって、分かってくれるはず。

「過去に向き合えば、未来だって変えていけるはず！」

そうなつてくれるように願いと祈りを込めて、私は三枚のカードを光に変えて、右の

拳に宿して力とした。

「プリキュア、イレイザーナックル！」

振り回される触手をかわしながら飛び込みぎまに、その拳を本体に叩き込んだ。

拳から光の奔流が噴き出し、ネガテバーのアメーバ状の身体を押し流すかのように、

残らず消し去っていく。

「…やった」

ネガティブが消え去り、そこに一人の中年男性が取り残された。男性は覚束ない足取りでふらつきながら、うつろな目を私に向けた。

「あの、大丈夫ですか?」

私は声をかけつつ、その男性に近寄ろうとした。

「だけど、その時——」

「ルカナ、離れるロト!」

「っ!?!」

目の前で、中年男性の身体が、再び黒く塗りつぶされた。

黒い靄はすぐにアメーバ状に変化し、幾本もの触手が鞭のように私に襲い掛かってきた。た。

その攻撃の軌道は読んでいたが、距離があまりにも近すぎた。回避が間に合わず咄嗟に腕を上げてガードを固め、その攻撃を受け止める。

「あうっ!?!」

想像以上に重い打撃だった。身体が宙を舞い、そのまま十数メートルも吹っ飛ばされてしまった。

落下する際に何とか態勢を立て直し、上手く着地することには成功したけれど。

「ネガテバーを消しきれなかった……!?!」

私の視線の先では、ネガテバーはすっかり元の大きさを取り戻してしまっていた。ターロットが言った。

「過去に起因する不安が消えていないロト。取り込まれた人が不安を感じ続ける限り、表層の不安を消したところで、後からいくらでも湧いてくるロト」

「……過去も、今も、辛くて、悲しくて、心が屈しちやっただね」

「こういうのは自分自身で立ち直る以外に解決策は無いロト」

「そうだね。だから……私にできることは、それを少しだけ手伝うことぐらいかな」
「ルカナ、何を言っているロト?」

ターロットの言葉に答える代わりに、私はもう一度、右の拳に力を込めた。

「プリキュア、イレイザーナックル!」

大地を蹴り、ネガテバーに再び接近し、力の限りに拳を叩き込む。

黒い不定形なネガテバーがはじけ飛び、中年男性が再び姿を現した。

私は、その男性に向かって呼びかける。

「お願い、頑張つて! 自分の過去に負けないで!」

「ロトつ!?! 何やってるロトか!?!」

「お願い、負けないで!」

「テバアアア!」

私の声をかき消すような咆哮と共に、ネガテバーがすぐに復活した。

私は再び拳を構えた。

「ルカナ! そんなことは意味が無いロト!」

「そんなこと無いよ。たった一瞬だけど、不安は消せる。その間なら、立ち直るチャンスはある!」

「そんな都合よく行くわけ無いロト!」

「だったら、都合よくなるまで、繰り返し返す!」

再び拳で、ネガテバーを打ち払う。

私にできることは、ほんの一瞬だけ、不安を消す。ただそれだけ。その一瞬で、取り込まれたあの男性が、何を思い、何を選ぶのか。

それは、私にはわからない。

きつと、なんの解決にもならないだろう。九割九分、そのとおりだと自分でも思う。

でも、たった一分でも可能性があるなら、私はその可能性を引き当てるために、百回でも、千回でも同じことを繰り返し返すつもりだった。

「プリキュア! イレイザアア、ナツクル!」

「テバアアア!」

.....

.....

.....

.....

「デバアアア！」

「プリキュア……レイザア……ナアツクル！」

これで五十発目。

参ったなあ、腕が、重いや。

百回繰り返し返すどころか、まだそのやつと半分だったのに、もう息が上がって、拳を構えるのがやつとという有様だった。

「デバアアア！」

触手が空気を切り裂き、私の身体を打ち据えた。

ガードは間に合わなかった。腹部を打たれ、呼吸が一瞬止まる。そのまま、また十数メートルの距離を吹っ飛ばされた。

痛みと、苦しさと、そして疲労で頭がくらくらする。これ、プリキュアじゃなかったら何度死んでいたことやら。

「よい…しよ…つと」

「ルカナ、もうやめるロト!」

「でも、放っておいたら、あの人はずっとあのままなんでしょ?」

「そ、そうロトけど…でも、今のルカナの能力じゃ、あのネガテバーは相性が悪すぎるロト。無理なものは無理だロト。諦めも肝心だロト」

「諦めたら、どうなるの?」

「ロトお……」

ターロツトは、言いづらそうに言葉をこぼした。

「あの調子なら、きつともう長くは無いロト……」

「長くないって?」

「不安が大きくなりすぎて、もうじき自壊するロト。サインコインは、その時に回収できるロト。幸い、ここは人気が無いし、ネガテバーも移動する気配がないし…その…ロトお」

「自壊したら、取り込まれた人はどうなっちゃうの？」

「……………」

沈黙は、そのまま答えた。

「やっぱり、やるしかないね」

「ルカナ!？」

「プリキュア！ イレイザアアア…ナアアツクル！」

「テバアアア！」

真正面から肉薄しようとしたが、うねる触手に行く手を阻まれてしまった。

「でも、まだまだあつ！」

触手を拳で消し飛ばし、すかさずもう一撃を加えるべく拳を構えた。

だけど、ネガテバーが新たな触手を伸ばすほうが早かった。ガードをすることもでき

ず、触手の攻撃を顔面にまともに受けてしまった。

私は大きく仰け反った姿勢で、また背後に吹っ飛ばされてしまった。

あー、やばい、これは効いた。視界も、頭の中もぐらぐらと揺れている。仰向けに倒れた私の視界の中で、満天の星空がダイナミックに回転していた。

どうしよう、立ち上がりたければ、足腰に力が入らない。

そんな私を、誰かがひよつこりと覗き込んでいた。

その誰かが、私に向かって言った。

「あんたさあ、やり方が間違ってるよ」

あなたは誰?

「私? あんたと同じ、プリキュアだよ」

「プリ……キュア……?」

「そ。まあ、今夜が初デビューなんだけどね。よろしく、せんぱい♪」

そう言つて彼女は——視界がぼやけて顔がよく分からないけれど、多分、私と同年代ぐらいの女の子だ——その手に何かを取り出した。

「プリキュア! フォーチューンセレクト!」

それはサインコインだった。私に変身した時と同じように、彼女もそれを指で、空中高くに弾いて上げた。

徐々にはつきりとした私の視界の中で、彼女は左手に持っていたモノで、落下してきたコインを受け止めた。

それは二重三重に円が重なったような、不思議な構造をした金属製の円盤だった。

「廻れ、アストロラーベ!」

彼女の手が円盤の縁をなぞりながら勢いよく振り抜かれた。

円盤が回転しながら光り輝き、視界を埋め尽くす。その眩いばかりの輝きの中で、彼

女が高らかに名乗りを上げた。

「未来へ飛び立つ、星詠みの使途。キュアストロジ―！」

目を瞬きながらも何とか立ち上がった私の前に、変身した彼女の姿があった。

黒地に青のフリルが付いたミニスカート姿に、サファイアのような深みのある光沢のブルーに染まったマントを羽織った、青い髪のプリキュア。

そう、私の格好をそのまま青色に置き換えたといってもいい姿だ。

他にも違う個所とえば、私が本（ターロット）を持つているのに対し、キュアストロジ―と名乗った彼女は、先ほどの金属製の円盤を手に行っていることだろうか。

ストロジ―が、私に向かってニツと笑顔を見せた。

「せーんばい、ここはちよいと、アタシに任せてくんない？」

「どうするの?」

「ニハハ」

笑うストロジ―の背後で、黒い影がいくつもうねった。

「ストロジ―、後ろツ?!」

ネガティブの攻撃だったが、ストロジ―は私が注意するまでもなく、背後を振り返りすらせずに、高々と跳躍してその攻撃を回避してみせた。

「だいじょーぶ、アタシにもちゃんと“視えている”から」

ストロジーが空中で身体をひねり、猫のような敏捷さで着地した。

そしてすぐに、手にしていた円盤を構えた。

「行くよ、アストロ!」

「OK!」

円盤が声を発し、返事した。まさか、あれもターロットと同じ妖精なのかな?

「……拙いことになったロト」

「ターロット?」

ターロットの態度がおかしいことに首を傾げている間に、ストロジーは、アストロと呼んだ円盤を回転させた。

「ぞでいあん、ルーレット♪」

なんだそりゃ?

「何が出るかな♪ 何が出るかな♪」

「PISCES」

「うおーつと出ました、魚座です!」

……おやじギャグかな?

呆れた私の前で、ストロジーが持つ円盤：アストロから、デカイ魚が水しぶきを上げて飛び出した。

うおっ!? ビックリした。

「逃げるは恥だが役に立つ。お魚さん、パツクリ行っちゃって〜!」

デカイ魚がさらに巨大になり、空中を泳ぐようにネガテバーへ襲い掛かった。大きな口を開き、ネガテバーを丸ごと飲み込んでしまう。

次の瞬間、魚は水風船のように弾け飛び、中から、あの中年男性が一人現れ、その場に取り残された。

きつと今の魚が、私のイレイザーナツクルと同じ浄化技なのだろう。でも、やっぱり私と同じく黒い霧が男性の胸元から噴き上がり始めた。

「ぞでいあん、ルーレット♪」

ストロジーは迷うことなく円盤を回しながら、横目で私の方を見た。

「せーんぱい。あんたさ、あの人を過去と向き合わせようとしたでしょ」

「え? ああ、うん」

「それに、頑張れ、負けるなとかまで言っちゃってさ。……それ、ああいう人には一番やっちゃ駄目なことだよ」

「え……?」

私は、思いがけない言葉に虚を突かれた。

アストロが回転を止め、選び出したモノの名を告げた。

「CANCER」

「辛い過去はもうカンニン、蟹座です!」

巨大な蟹が出現し、その大きな鋏を振りかざしながら男性に襲い掛かった。

「ストロジー、待って!?! あの人が怪我しちゃう!」

「鋏が切るのは肉体じゃない。『暗い過去』だよ」

大蟹が両手の鋏を振るい、男性を覆いかけていたネガテバーを切り裂いた。

男性が、糸の切れた人形のように倒れこむ。その真上で、切り離されたネガテバーが黒い塊となってゆらゆらと浮いていた。

「ネガテバーが、完全に分離された…? ストロジー、あなたは何をしたの?」

「過去を切つてあげたのよ。不安の根っこだった過去をね。……辛だけの過去なんて、きっぱり忘れ去ったほうがスツキリするでしょ」

「っ!?!」

彼女の言葉を聞いた瞬間、私の中で、何かが沸騰しそうになった。

「——辛くても忘れちゃいけない! 母さんのことを、忘れていいはずが無いッ!」

喉奥まで出かかり、叫びそうになった言葉を、歯を食いしばって堪え、再び胸の奥底へ飲み下す。

「なにさ、せんぱい。どうかした?」

「いいえ。……確かに、あなたの言う事も正しいのかもね」

「でしよ、二ハハ」

ストロジューは屈託のない笑顔を見せると、突然、ひよいと背後へ飛び退いた。その直後、ストロジューが寸前まで立っていた場所を、ネガテバーの触手が薙ぎ払った。

「おっと、危ない危ない。あの残ったネガテバーも浄化しちゃわないとね。行くよ、アストロ！ぞでいあん、ルーレット♪」

ストロジューが再び円盤を回そうとした。だけど……

「——あ、あれえ、まわんない!? ちよ、ちよつとアストロ、どうなってるのコレ!？」

「Sorry can only turn up to twice」

「え? 回せるのは二回だけって、そういう大事なことはもつと早く言つてよ!？」

「H A H A H A」

「笑つてごまかさないでよ!?! ——つて、あわわ!?!」

どうやらもう技が打てないらしい。そんなストロジューに、ネガテバーの触手が再び襲い掛かった。

ストロジューは慌てて跳躍して攻撃をかわすと、私の背後に、身を潜めるかのように着地した。

「せ、せんぱーい。ちよつと、ご相談が……」

「……いいわよ、後は私に任せて。あなたのお陰で、ちよつとは体力も回復したしね」
 「おつ、さつすがせんばい、話がはっやーい」

私は目前に迫るネガテバーに向かって拳を構えた。

ストロジーの言動には色々と思うところはあられるけれど、少なくとも今は、このネガテバーを浄化させることを優先するべきだ。

「プリキュア、イレイザーナックル!」

私の渾身の一撃が、ネガテバーを今度こそ、跡形もなく消し去った。

ネガテバーが消失した後の虚空に残されたサインコインが、星のように煌めきながら落ちてくる。

突然、ターロットが叫んだ。

「ルカナ! 急いでコインを確保するロト!」

「ほえ?」

「C u r e a s t r o l o g y ! T a k e a w a y f i r s t , h u r r y u p !」

「ちよ、アストロ、早口で言われてもわかんないって!」

お互いの妖精たちの態度が急変し、私もストロジーも、訳も分からず戸惑うばかりだ。

「もう、らちが明かないロト!」

「I got!」

ターロットが突然、私の手を引くようにサインコインに向かって動き出した。その力はビックリするほど強く、私はターロットを掴んだまま引きずられていく。

私の横では、ストロジューも同じ目に遭っていた。

「あわわわ、アストロ、ちよちよ、待って、引つ張らないでー!」

ターロットとアストロは二人(?)同時に地面に落ちたサインコインに飛びついていく。

そうなると、引つ張られていた私たちも当然――

「ほええー!」

「あわあー!」

ごっつんこ。

妖精同士が一点に飛び込んだせいで、私はストロジューと頭をカチ合わせてしまった。

ほええ、目から火花が散ったあ。

「あわわ、目の前で星が飛んでるうわ」

私とストロジューがそれぞれ自分のオデコを押さえている間に、ターロットがアストロに食って掛かっていた。

「コインを渡すロト! そのコインはターロットたちの物だロト!」

「H A H A H A f u c k y o u !」

「キーツロト! この腐れ星座盤、絶対に許さないロト!」

「ターロツト、ちよつと落ち着こう?」

私は激しくページをバタつかせているターロツトを両手で抱え込んだ。一方で、ストロジーも同じくアストロを抱え上げた。

「アストロ、あんたちよつと口悪いよ? せんぱいには借りがあるんだからさ、ちよつとは気を遣おうよ」

あら、意外。

ストロジーつてここまでの態度だけ見てたら、そんなの全然無視するタイプだと思つてたのに。

そのストロジーが、私に向かってニハツと笑つた。

「ま、それはそれとしてサインコインは頂いていくけどね。じゃ、またね。バカみたい你真つ直ぐで不器用な、せくんばい♪」

そんな言葉を言い捨てて、彼女は高々と跳躍すると、そのまま夜空遠くへと去つて行つてしまった。

……あれ? 私もしかしてバカにされた?

「ルカナ、追いかけるロト! サインコインを取り返すロト!」

「もう見えなくなっちゃったよ。それに彼女も同じプリキュアなんでしょ？　なのに、どうしてコインの取り合いなんかしてるの？」

「そ…それはロト……」

口ごもったターロットに、私は内心でため息を吐いた。

多分、ターロットは私に色々隠し事をしている。きつと、込み入った事情があるの
だろうけれど。

「まあ、その辺はおいおい聞かせてもらおうとして、今はそんなことより……」

私は変身を解き、離れた場所で倒れていた、あの中年男性の元へ駆け寄った。

「大丈夫ですか？　しっかりしてください」

「うう……」

中年男性が身じろぎし、目を覚ました。夜の暗がりの中だったけど、見た限りに目
立った外傷は見当たらなかった。

中年男性は上体を起こすと、不思議そうにあたりを見渡した。

「あれ？　どうしてこんなところで寝ていたんだ？　……って、君は誰だ？」

「通りすがりです。えと、あなたが倒れていたのを見つけて、心配になって声をかけたん
です」

「そうか、それは心配をかけてしまったね。申し訳ない。だけど身体は何とも無さそう

だから、もう大丈夫だよ。ありがとう」

中年男性はゆっくりと立ち上がった後、服についた土埃を払い落とし、そして不意に、何かに気づいたかのように夜空を見上げた。

そこには、満天の星空が拡がっていた。

「ああ……奇麗だなあ……」

男性の口から、そんな呟きが漏れた。

「…不思議だな。何故だかとても晴れ晴れとした気分だ。……あれ? そういえば、何をここに来たのだっけかな?」

独り言のように呟いて、首を傾げた拍子に、私と目が合った。

「おっと、また変なところを見せてしまったね。わたしはもう大丈夫だよ。だから君ももうお家へお帰り。ご家族も心配しているだろうからね」

中年男性は穏やかな表情と声でそう言って、私に背を向けて歩き始めた。

その背中は真っ直ぐに伸ばされ、時折、夜空を見上げながら、足取り軽く遠ざかって行った。

それを見送った私のそばに、ドラッグストアのビニール袋が残されていた。

中身を開くと、大量の缶ビールが詰め込まれていた。さっきの戦いで踏みつけられたか、それとも重い物でも当たったのだろうか、缶の大半が潰れ、中身が噴き零れてしまっ

ていた。

ビニール袋には、潰れた缶に混じり、太くて長いロープが一緒に入っていた。ドラッグストアでは売っていないそうじゃない物だ。それに、缶ビールと一緒に持ち歩くには随分と不自然な気もする。

「これ、あの人のものかな…？」

「多分、そうロト」

「短絡的な想像かも知れないけど、あの人、ネガテバーにされていなかったら、もしかしたら今頃……」

「……………」

ターロツトは答えなかった。この妖精は、答えづらい質問には沈黙をもって肯定とする傾向がある。

私は、これを自宅で処分することに決め、ビニール袋を手に、家路へとついたのであった。

家路につくミクの姿を、遠くから一人の少女が眺めていた。

キュアストロジーではない。しかしその少女は、彼女によく似通った格好をしていた。

黒地に黄色のフリルが付いたミニスカート姿に、トルマリンのような煌めきをもったイエローのマントを羽織った、その姿。

ブロンドのロングヘアが夜風になびき、夜空の星々を背景に、金色の波の様にたゆたっていた。

「へえ……あれが私以外のプリキュアかあ」

彼女は手にしていた拳大の水晶玉を顔の前にかざし、遠ざかっていくミクの姿を透かしながら、眺めていた。

「キュアルカナ……タロットで過去、現在、未来を暗示する『明日よりの使者』か。いいね、なんかカッコいいじゃん。……なあ、クリルン?」

彼女は含み笑いをしながら、手にしていた水晶玉を軽く投げ上げ、両手でお手玉をするように弄んだ。

「ここ、止めるルン!? クリルンを乱暴に扱わないで欲しいルン!」

水晶玉が言葉を発し、少女の手から逃げるように宙へ浮いた。

「アハハ、悪い悪い。でもさ、『明日よりの使者』と『星詠みの使途』だぜ。前口上つて言うの? ああいうの、私らにも何か無いの?」

「クリルンにはそんな初期設定はされてないルン」

「そうなのか。やっぱ旧世代の妖精だからスペック低いのか」

「クリルンをポンコツみたいに言うなルン!?!」

「そこまで言っただけだよ。それよりも口上ぎ。無いなら自分で考えるかあ……」

少女はしばし迷った後、

「よし、こんなのどうだ?」

「言ってみるルン」

「未来を繋ぐ、刻を告げし予言者、キュアオラクル!」

「……中二クサイルン」

「リアル中二だから問題ないってーの」

アハハ、とあっけらかんとした明るい笑い声が夜空に響く。そんな笑い声の残響が、

夜風に乗って、ミクの耳にまで届いた。

「?」

微かに聞こえたその声に、ミクは振り向く。

しかし、そこにはただ星空が無限に拡がっているだけだった……

第3話 三人で力を合わせましょう？ 登場、キュアオラクル（前編）！

新たなプリキュア、キュアストロジーと出会い、そしてともにネガテバーを浄化したその夜。

アパートに帰宅した私は、自室のベッドに寝転びながら、天井を見上げていた。

プリキュアとしての二度目の戦いはかなりの苦戦だったが、身体に残るような傷はついていないし、疲労も徐々に回復しつつある。

プリキュアは頑丈だ、とターロットは初戦闘の時に言っただけで、実際そのとおりだった。

ただ、心に残る痛みと疲労だけは別だけだ。

私はネガテバーに取り込まれていた人のことを思い返しながら、胸に感じる痛みを抱きしめるように反芻した。

そんな私に、「ミク…」と囁くように呼ぶ声が聞こえた。

寝転がったまま首だけ横に傾けると、枕元に置いた本の表紙に描かれた、三頭身の小動物のような姿の妖精と目が合った。

本の妖精：ターロット。私にプリキュアとしての力を与えてくれた、未来からやってきた占い師だ。

そのターロットが、心配そうな表情で言った。

「ミク……悩んでいるロトね？」

「うん、まあね」

私は力の抜けた笑みを返ししながら、ターロットに「ごめんね」と謝った。

「どうして謝るロト？」

「ターロットの忠告も聞かずに、強引なことしちゃったなあ……って」

「確かに強引だったロト。でも、ミクひとりじゃ、あれ以外に手段が無かったのも事実だロト。しかたなかったロト」

「ストロジーが来てくれなかったら、あの人を助けられなかった。……ねえ、ターロット。彼女とは協力できないの？」

私の問いかけに、ターロットは表紙の中でその顔を伏せ、言い辛そうに答えた。

「……無理だロト」

「どうして？ 同じプリキュアでしょう？」

「プリキュア同士は競争相手だロト」

「競争？」

私は身を起こし、本を手に取ってターロットと正面から向き合った。

「どうということなの？」

「プリキュアは本来、この時代ではたったひとりだけだった口ト。サインコインも本来は一枚きり口ト。だけど、サインコインが増えてしまったから、プリキュアも増えてしまった口ト」

「それは理解できるけど、でもどうして競争相手になつてしまうの？」

「サインコインが増えてしまった今、それをより多く集めた者が“正しいと思う歴史”を本当の過去にすることができ口ト。…この“過去”はターロットの時代にとつての過去口ト」

「つまり、私たちにとつては未来という事ね」

「そう口ト。そしてストロジのパートナーである星座盤の妖精アストロは、ターロットが知っている歴史とは違う、別の歴史を正しいと主張している口ト。…ターロットたちの時代からみた過去は、不安定で曖昧になつていて、どの歴史が正しいのか、もう誰もわからない口ト。だからアストロは、別のプリキュアを使ってサインコインを集めて、自分の信じる歴史を正当化しようとしている口ト」

「そうなんだ…なんだか難しい話なんだね」

つまりこれは歴史対立ということだ。これはなかなか根深くて、ややこしい問題だ。

単なる歴史解釈ですら喧嘩に発展しかねないというのに、歴史そのものが変わってしまったというなら、妥協点を探すことは困難極まるだろう。

この分だと、妖精同士がおいそれと仲良くすることは無さそうだった。私はターロットを枕元に戻し、再びベッドに横になった。

「ミク、疲れたロトか？」

「うん。……今日はもうこれで寝るね。色々と話してくれてありがとう。…おやすみなさい」

「…おやすみロト」

私は灯りを消し、暗闇の中で目を閉じながら、心の中でターロットに再び、ごめんねと謝った。

ターロットには悪いけれど、私はサインコインの奪い合いにはあまり興味は無かった。ターロット達にとっては過去でも、私にとっては未来なのだ。どちらの歴史が正しいかなど、私にわかるはずもない。だから一方的に肩入れするには若干の抵抗があった。

私はそれよりも、ネガテバーの苦しみを浄化してあげたいという思いの方が強かった。あの悲痛な叫びをあげながらもがき苦しむように暴れるネガテバーの姿が見えられなかったから、私はプリキュアになったのだ。

だけどひとりじゃ限界があることを今日の戦いで思い知らされた。だから、ストロ
ジーともう一度会えたなら、協力し合えるように話し合ってみたい。

そんなことを思いながら、私は深い眠りに落ちたのだった。

あれから数日間は特に何事もなく、ネガテバーも出ないまま過ぎて行つた。

平穏な日々であることは喜ばしいが、ネガテバーがいつまた現れるかわからないとい
う懸念が別に消えたわけでもない。

私とターロットはこの数日の間、元凶たる“過去よりの使者”の動静や、キュアスト
ロジーの正体などを多少は探っていたものの、目新しい情報はさっぱり手に入らなかつ
た。

まあ私はないが中学生だし、学業やら家事やらなにやらもあるので、こういった調
査は主にターロットに任せきりだったけれど。

ターロットは私と初めて出会ったときの様に占い師の女性の姿で、街に出て、辻占
をしながら聞き込みや見回りをしているらしかった。

ちなみに女性の姿と言ってもターロット自身が変身しているのではなくて、精巧なマ

ネキンのような——不思議な力でもかかっているのか、本当の人間にしか見えない——人形をターロットが操っていた。

そのマネキン人形は大人の女性を模しているだけあつて結構な大きさがあつた。だけれど、そんなものを普段から私の自室に置いておくわけにもいかない。私の部屋は六畳しかない一間なのだ。

じゃあ普段はどこに仕舞っているのかというと、それはなんと、ターロット自身のページの間だった。

私は、ターロットがそのマネキン人形を出し入れしているところを何度か見たことがある。

ターロットは自身のページの間から一枚のカードを抜きだすと、それに向かって、

「パペットアピアー」

と、割とそのまんま呪文を唱えるのだ。すると、そのカード——THE HIGH PRIESTESS（女教皇）——に描かれていた女性の絵が浮き上がり、立体化して、大きくなってマネキン人形となる。と言った具合だった。

「そのカードって、過去・現在・未来を暗示すると、ナツクルの時に込める力になるだけじゃないんだ？」

私の疑問に、ターロットは占い師の女性の口を通じて、「そうよ」と答えた。

「各カードにはそれぞれ固有の能力があるの。この女教皇のカードは操り人形の具現化。他にも太陽のカードなら火球を放つことができるわ」

「ほえ〜」

「どうやらカードごとに色々和小技が使えるという事実に加え、ターロットはこの姿だと変な語尾は無くなるんだな、という二点に私は感心した。」

「でもさ、そんなに色々と技が使えるなら、どうして最初から教えてくれなかったの？」

「教えても戦闘にはあまり役に立ちそうに無いからよ」

「どういうこと？」

「プリキュアとして引けるカードは、ネガティブ一体に付き三枚だけ。それも何を引くかわからないランダムなものよ。そんな行き当たりばったりで出す技じゃとても戦えないわ」

「なるほど、そりやそうだわ」

「それに攻撃や防御に使える能力ばかりでも無いので、結局、殴ったほうが手っ取り早いし効率的だ。というのが、その時の話題の結論だった。」

そして、月が変わり、大型連休を目前に控えた平日のある朝のことだった。

仕事の都合で早朝から出かけて行った父を見送った後、私が自室に戻ると、そこに例の占い師姿のターロットが居た。

「うわ、びっくりした」

今さら別に珍しくも無い姿だけど、狭い部屋に入った途端に、目の前にローブ姿の女性が座り込んで、床一面にタロットカードを敷き詰めているという光景を目の当たりにすれば、誰だって声ぐらいは上げてしまおうと思う。

「ターロット、何やってるの？」

「御覧のとおり、占っているのよ」

ターロットは私の方も見ずに、床に並べたカードを一枚、また一枚とめくっていた。「いや、私が訊きたいのは、なんでわざわざその恰好で占っているのかってことよ。本のままでも占いはできるし、むしろそっちの方が場所を取らないでしょう？」

数日前、ターロットが自らの白紙ページにカードの図柄を表示させていたことを思いだしながら言うと、ターロットは床のカードに目を向けたまま答えた。

「確かにそのとおりだけどね。でも、これから出かけようと思つてこの格好になつたところで急にピンときちやつたのよ。あ、これは今占わなきゃダメだ”ってね」

「それ、後じゃダメなの？」

私だってヒマじゃないのだ。そろそろ制服に着替えて登校の準備をする必要があるのに、床一面にカードを拵げられてしまつては、足の踏み場もありやしない。

「ダメよ」

と、ターロットはにべもなく否定した。

「占いはね、こういう予感がきた瞬間にやらなくちゃダメなのよ。……大丈夫、もうすぐ終わるわ」

ターロットはそう言って、最後の一枚を引つ繰り返し、それから十数秒の間、床一面のカードを眺め渡した。

「今日の午後……墓地……東の山……」

ぶつぶつと小声で何やらを呟いた後、ターロットは私に顔を向けた。

「ミク、今日の午後にネガティブが出現するわ」

「ほえ、それは拙いなあ。今日の午後は校外実習があるんだよ。うまく抜け出せるかなあ」

「その実習って、どこでやるのかしら？」

「隣の東山公園ってところ。海軍墓地があつて、公園としても整備されているの。歴史の授業で、海軍と関係の深いこの佐世浦市の歴史を知るために行くんだけど……ターロット？」

私が説明している間、ターロットが妙に強くうんうんと頷いていた。

「あ、まさか？」

「占いは、『午後』に『東の山』の『墓地』に出現すると示されているわ。ドンピシャ

ね

「まじかー」

それはそれで面倒なことになるぞ、と私は頭を抱えて天井を見上げたのだった……。

授業をサボらずにネガテバーに対応できるのは私個人としては助かるが、その代わりにクラスメートを危険に巻き込んでしまう可能性があった。

できるなら校外実習を注視にしてみようとした上で、私だけ現場に駆け付けるのが一番いいのだろうけど、それをするための具体的方法がなかなか難しい。

なにしろプリキユアもネガテバーもまだ世間一般には認知されていないのだ。だから先生に正直に打ち明けたところで信じてもらうことは難しいだろう。

ちなみにターロツトの話によれば、ネガテバーを浄化すると、それによつて起きた被害や、関わった者に関する記憶なども復元され、痕跡は残らないらしい。

つまりこの先うまくやればやるほど、プリキユアもネガテバーも世間には認知されな
いままらしい。

かといつて他に信じてもらえそうな言い訳も思いつかないままに午前中は過ぎてしまい、実習に出かける時間が迫ってきていた。

《どーしよう？》

《ここは水際で食い止めるしかないロト》

午前の授業が終わった昼休み、私は教室の自分の机で、ターロットと筆談する。

《ミク、これはチャンスでもあるロト》

《チャンス？》

《ここまで具体的に出現場所と時間を限定できることは滅多に無いロト。上手く行けば、ネガテバー出現前にサインコインを回収することができるかもしれないロト》

《それってつまり、“過去よりの使者”から直接コインを奪うってこと？》

《そうロト。元凶であるあの二人組を倒すことができれば、未来は安定化するし、新たなネガテバーが生まれることも無くなるロト》

《倒す……かあ》

ターロットの言っていることは理屈としては理解できる。だけど、見ず知らずの相手を倒せと言われても、いまいちピンとこないのだ。

そもそも私がプリキュアをやっているのは、ネガテバーの苦しむ叫びを聞いたからだ。私はネガテバーとなって苦しむ過去を救いたい。

ならそもそも過去をネガテバーにさせなきや良いわけで、そうなるとやっぱターロットの言う事は正しいのだ。

「ただど私は『過去よりの使者』とやらと出くわしたとき、果たして躊躇なく殴り掛かることができるだろうか？」

うーむ。

「お〜い、ミクつち〜」

密かに悩む私の元に、売店へ昼食用のパンを買いに行っていた星華ちゃんがビニール袋を片手に帰ってきた。

「あ、おかえり星華ちゃん。目当てのフルーツサンドは買えた？」

「いや〜、全然ダメだったわ。今日も昼休み始まった瞬間に人がいっぱい押しかけて全滅よ。今朝の星座占いで『スタートダッシュが肝心でしょう』って言われてたのに、そこをミスっちゃったからね。しゃーないわ」

星華ちゃんは大きいため息をつきながら私の向いに座ると、ビニール袋から小ぶりのハンバーガーとパック牛乳を取り出した。

無然とした表情でハンバーガーの包みを解く彼女を前に、私もカバンから自分の弁当箱を取り出した。

「星華ちゃん」

「ん〜?」

しょんぼり顔でハンバーガーにかぶりつこうとしている彼女の前で、私は弁当箱の蓋

を開けてみせた。

中に詰まっているのは、私お手製のフルーツサンドだ。

「わ、ミクっちスゴ！ どしたのコレ？」

「星華ちゃんがいつも食べたがっているフルーツサンド、私も気になっていたから、自分で作ってみたの。星華ちゃんが買ってきたら食べ比べさせてもらおうと思っていたのになあ」

私はそう言いながら、弁当箱の蓋に、四切れあるうちの一切れを移して、星華ちゃんの前に差し出した。

「はい、どうぞ」

「え、良いの？」

「もともと食べてもらおうと思って多めに作ってきたからね」

私の言葉に、星華ちゃんは驚愕の表情で目を見開いた。

「て、天使や……天使が降臨しよった…!？」

「なんで関西弁？」

「あー、もー、ミクっち大好き。あたしが男だったら、あんたをお嫁さんにするわ」

「はいはい。……あ、そういえば珠代ちゃんは見えない？」

「ふあい？ 見ひえないへほ」

見てない、と答えた星華ちゃんの口には、私があげたばかりのフルーツサンドが既に啜えられていた。

そのままもぐもぐされる。

「——うっわ、これ美味しい！ フルーツの酸味と甘みがクリームと溶け合って程よい感じで、これはまるでクリームでお化粧したフルーツたちがパンという舞台の上でバレエを踊っているかのようだよ！」

「何を言ってるのか意味不明だけど、とりあえず褒めてるってことは理解したよ。ありがとう」

「あ、珠代っちのことだったけ？」

「そう、珠代ちゃんにも食べてもらおうと思ってたんだけど、昼休みが始まったとたんに出て行っちゃって、それからまだ戻ってこないの。てつきり星華ちゃんみたいに売店に行っただけだと思ってたんだけど」

「ん、見てないね。途中までアキラと一緒に廊下を歩いているところは見かけたんだけど」

もしかして、と星華ちゃんは眩き、ニヒッと笑った。

「今ごろ二人きりで、どこかに居るのかもね」

「ほえ、あの二人ってやっぱり付き合ってるの？」

「そこはよくわからんよ。お互いに幼馴染とは言い張っているけどね。でもでもさ、ミクっちもその辺はきになるっしょ？」

「そりやまあ——」

と、私がそこまで言いかけたところで、その話題の当人である珠代ちゃんが教室に帰ってきた。

ただちよつと浮かない顔、というか少し機嫌が悪そうな雰囲気を纏っていた。

「珠代ちゃん、どうしたの？」

私が声をかけると、珠代ちゃんはすぐに私たちのそばへ小走りに寄ってきた。

「ミクちゃん、星華、ちよつと聞いてよ。アキラがさ……って、あら星華、美味しそうなものを食べてるわね。フルーツサンド買ったんだ？」

「うんにゃ、これミクっちのお手製よ。めっちゃ美味いんだよ。珠代っちも食べてみ」

「はいコレ、珠代ちゃんの方だよ」

「あらいいの？ じゃ遠慮なく。……美味しい！ ミクちゃんこれどうやって作ったの？ レシピ教えてくれない？」

「いいよ。でもその前に、アキラくんがどうか言っただけでなかった？」

「そうそう、それよそれ。アキラってば昼休み始まったとたん急にお腹痛くなつたとか言い出したのよ。だから保健室まで連れて行ったの」

「ほえ。アキラくん大丈夫だった？」

「胃薬だか何だかをもらってトイレに駆け込んでいったから、単にお腹の具合が悪いだけだと思うけど。でもそれだけなら別にいいのよ。問題はその後よ」

珠代ちゃんは盛大にため息を吐いて、言葉を続けた。

「アキラつてば、トイレの中から大声で私の名を呼んだのよ！ 周りに他にも人が居るのに、恥ずかしいったらありやしないわ。それで何の用かと思えば、”トイレから出られそうにないから、午後の実習を休むって先生に伝えてくれ”だって。何よそれ。私はあいつの母親じゃないっての、もおー！」

とは言いつつも職員室によつてその旨を伝えてきたそう。珠代ちゃんはひとしきり憤慨した後、

「ごめんね。食事中にする話題じゃ無かったわね」

と謝りながらフルーツサンドの残りを口にした。

「ん、美味しいわあ。あ、もらってばかりつてのも悪いわ。ミクちゃん、私のお弁当からも好きなもの取っていつて」

そう言つて珠代ちゃんを取り出したお弁当箱には、カラフルなふりかけを混ぜ込んだ俵型の小ぶりなおおむすびと、サラダとから揚げが詰められていた。

「ありがとう、珠代ちゃん。じゃ、遠慮なく」

私は桜でんぶのおむすびをもらった。うん、美味しい。私の向かいで星華ちゃんが羨ましそうに珠代ちゃんのお弁当箱を覗き込んでいた。

「珠代つちさあく、あたしにも一つ分けてくんない？」

「トレードオフよ。ちなみにその食べかけのハンバーガーは却下ね」

「ありや、ケチ〜」

星華ちゃんと珠代ちゃんの三人で過ごす昼休みはあつという間に過ぎていき、そして実習へと出かける時間となった。

クラス全員がジャージに着替え、掃除用具をもって、学校が手配してくれたバスに乗り込んで移動する。

目的地は東山公園。正式名称は「東山海軍墓地公園」。

今から百数十年前、この地に海軍基地が設置され、戦後、それが解体されるまでの約六十年に渡る間に戦死もしくは殉職した軍人軍属の御霊が祀られている場所だった。

けれど、墓地と言っても不気味な雰囲気は漂う場所、という訳ではない。

バスが到着したその場所は、佐世浦を囲む山の尾根沿いの一面に位置していた。敷地は広々としていて、周囲には立派な桜の樹々が植えられている。時期的にもう過ぎてしまったけれども、三月から4月にかけては満開の桜が咲き誇るお花見スポットとしても有名ならしい。

山の尾根沿いにあるため見晴らしも良く、その開放的な敷地内に、小ささまざまな石碑が立ち並んでいた。

ここは普通の墓地と違って個人のお墓ばかりがあるのではなく、戦争で沈んだ軍艦や、潜水艦、そして戦場となった場所が記された慰霊碑が大半を占め、それぞれには、その辿った歴史が刻まれていた。

つまり、教科書には載せきれないような歴史の詳しい資料が、ここにはズラリと並んでいるという訳だ。

……というようなことを歴史担当教師であり、また私たちの担任でもある老教師が、駐車場に整列した私たち生徒を前に説明してくれた。

「皆さんにはこれから、この公園を清掃していただきます。そうしながら、慰霊碑に刻まれた説明文をしつかりと読んでみてください。普段読む教科書とは違い、そこには当時を生きた人々の生の言葉が刻まれています。……今はまだ、書かれた言葉の意味はほとんど理解できないかもしれませんが、いつか将来、何らかの形で影響を与えることがあるかもしれません」

老教師の淡々とした言葉は、整列している生徒たちの大半には聞き流されてしまっているようだった。

「では、清掃に取り掛かる前に、皆さんに注意してもらいたいことがあります。これは

しつかり聞いてください」

老教師の言葉が張りを帯び、それで逸していた生徒たちの注意が老教師の方へ集まった。

「ここは公園ですが、れつきとした墓地でもあります。くれぐれもふざけたり、大声ではしゃいだりしてはいけません。また、碑の大半には個人名が無いとはいえ、それらは大勢の人々を祀っているものです。それはこの街で暮らす誰かのご遺族、もしかしたら皆さんのご親族も含まれているかもしれません。それを念頭に入れて、くれぐれも粗相の無いよう、清掃にあたってください。…よろしいですね？」

念を押す老教師の言葉に、私は「はい」と返事をした。意外なことに、私以外にもあちこちから「はい」という素直な返事が結構あがっていた。

その中には星華ちゃんの声も混じっていた。歴史の授業中は居眠りばかりで、今日の実習についても興味が薄そうだったのに、ちよつと驚きだ。

「では、始めてください」

清掃用具を手に取り、あらかじめ決められたグループごとに割り当てられた場所へと散っていく。

私は星華ちゃんや珠代ちゃんと同じグループだった。本当はアキラくんも加わるはずだったんだけど、昼休みの一件があつて実習を欠席していた。

ちなみにターロツトは本の形態のまま、この公園をこつそりと飛びまわりながらネガテバーの出現に備えていた。

もし「過去よりの使者」を発見し、ネガテバーの出現を阻止できたならそれでよし。もし間に合わずに出現を許してしまつたら、私は大声で先生に知らせ、みんな揃つて急いで避難。後はどさくさに紛れて現場に取つて返し、プリキュアとしてネガテバーに対処するという算段だ。

人はこれを出たとこ勝負と呼ぶ。

私は周囲に気を配りながら、手にした竹ぼうきで地面を掃いていた。そんな私の近くで、星華ちゃんはある大きな慰霊碑を見上げていた。

慰霊碑に向ける表情があまりにも真剣だったので、私は気になって、星華ちゃんに呼びかけた。

「何を見ているの?」

「ん? ああ、これ……あたしのひいおじいちゃんが乗つてた船なんだつてさ」

星華ちゃんが見上げていた慰霊碑には、とある航空母艦の名前が刻まれていた。星華ちゃんは言った。

「昨日さ、家族に実習のことを話したときに、おばあちゃんが、ひいおじいちゃんのことを教えてくれたんだよね。クープつて言うんだっけ? なんかでっかい船に乗つてて、

そして遠い遠い海で沈んで、死んだんだってさ。……正直、その話を聞いた時はふーんて感じだった。だって顔も知らない、ずっと昔に死んだ人だしさ。……でも」

ふと、星華ちゃんの目が遠くを見たような気がした。目の前の慰霊碑よりも、ずっと遠くを。

「……でも、ここに来て、これを見たら、なんか変な気持ちになっちゃった。うまく言えないけど、おばあちゃんのパパがここに居るんだと思ったら、なんか切ないっていうか」
一瞬、星華ちゃんは顔を伏せ、言葉を切った。でも彼女はすぐに顔を上げ、いつものニハツとした笑顔を私に向けた。

「ゴメン、あたし変なことを言ってたね。さて、掃除しよ、掃除！」

その言葉に、私は首を横に振った。

「ううん、いいよ。星華ちゃんはもう少しここに居てあげて」

「え？」

「ここに、星華ちゃんにつながる歴史があったんでしょ。だったら、それをもう少し感じてみたら？」

「あたしの……歴史……」

星華ちゃんは独り言のように呟くと、もう一度、慰霊碑へと目を向けた。その碑の台座には、この空母が生まれ、そして散って行った歴史が記されていた。

星華ちゃんの目が台座に向き、その文を読み始めたのがわかった。

「ミクつち……これ難しい感じとか単語がいつぱいあつて意味不明なんだけど、なんて書いてあんの？」

「どれどれ」

と私もその文に目を通し、解説した。

「えつとね、この空母は昭和十年に造られて、昭和十七年にミッドウエーつてところで沈んだんだつて。その間、精鋭の航空隊を載せて各地で奮戦し、最期の戦いでも、沈む間際まで勇敢に反撃を続けていたつて書いてあるよ」

「ふむふむ」

私のざつくりとした説明に、星華ちゃんはひとしきり頷いていたが、

「ねえミクつち、ミッドウエーつてどこ？ ていうか、このクーボつて誰と戦つてたの？」

「え、そこから？」

「そつからだよ。だつて私、授業とかぜんぜん聞いてなかったし」

そつかあ、そうだよなあ。百年前後の昔のことなんて知らなくても人は生きていけるし、知ろうと思わなければ、それは存在しないも一緒だ。

だけど、今という時間は過去が無ければ成り立たない。

お父さんやお母さんが居たから私が生まれ、その両親にはまたそれぞれに父と母が居て、そうやって膨大な人たちが私一人の存在には関わっている。そして、私につながるその人々にとって、過去は紛れもない現実で、その時代の積み重ねの上で私たちは生きている。

きつと星華ちゃんは今初めて、それを意識したのだと思う。だから、今まで知らなかったことを知りたくなった。

その彼女の気持ちを尊重し、私は知ってる限りの知識で、できるだけ丁寧に、当時に何が起きていたかを解説した。

「へー、ひいおじいちゃんの生きてた時代に、あの国とそんなすごい戦争やってたんだ。でもさ、あの国の人たち、当たり前みたいにこの街に居るけど、それってやっぱり、うちの国が負けたから？」

「そのとおりだけど、他にももつと事情があるというか」

「うわー、なんか基地の人たちの見方変わりそう」

「そういうの良くないよ」

「なんでさー、だつてひいおじいちゃんは、あの国のせいで死んだんだよ」

「戦争だもん。お互いにいっぱい死んだわ。今、基地に努めている人たちだつて、きつとひいおじいさんを亡くした人たちがいるよ。……歴史つて、見方を変えれば善悪はころ

ころ変わるし、加害者にも被害者にもなるんだよ」

「ミクっち、なんかすごい難しいこと言うね。うーんと、つまり、お互い様ってことだね。ま、基地の人たちは良い人多いし、この街ですつと一緒に暮らしてきたから今更だげどね」

星華ちゃんは屈託なく笑って、続けた。

「それに基地の人たちが居なくなったら、珠代っちのお店も潰れちゃうもんね。だって観月バーガーの常連客ってほとんど基地の人たちだし……って、そういえば」

星華ちゃんが言葉を切って、周辺を見渡した。私もその意味に気づき、同じく視線を巡らせた。

「……珠代ちゃん？」

そう、一緒に近くで掃除していたはずの珠代ちゃんの姿が、いつの間にか見当たらなくなっていたのだ。――

「ちよつと珠代ちゃんを探してくるね。星華ちゃんはここで待ってて」

私は内心でかなり焦りつつ、外見は何でもない風を装いながら、星華ちゃんを残しその場を離れた。

いつネガティブが出るか分からない状況というのもあるが、それは最初から織り込み済みだ。だけど珠代ちゃんが見当たらないことに気づいた瞬間、私の中で正体不明の大きな不安がよぎっていた。

（もしかして、珠代ちゃんの見に関わって何か危機が迫っているのかも？）

不意にそんなことが思い浮かんだ。プリキュア変身時に発言する予知能力が、この状態でも発現したのだろうか？ 気が付けば私は、サインコインを握りしめながら公園内を走っていた。

他の場所で掃除をしているクラスメートたちが、奇異なものを見る目を私に向けている。私は出くわしたクラスメートに片っ端から珠代ちゃんの居場所を訊いたが、誰も知らないという返事だった。

そのまま探し続けているうちに、私はいつの間にか公園の隅のほうまで来てしまっていた。

他のクラスメートもここまでは来ていないらしく、誰も居ない。珠代ちゃんの姿も見当たらないことを確認し、私はその場から立ち去ろうと踵を返し――

――かけて、あることに気づいて、思わず身体が硬直した。

踵を返しかけた瞬間、視界の端に見えていた“誰も居なかったその場所”に、突然、ひとりの男の姿を捉えたのだ。

背筋を走る悪寒と共に身体が硬直した一瞬後、私は微かに身震いしながら、再びそちらへと目を向けた。

今まで誰も居なかったある慰霊碑の前に、その男は居た。

背の高い、モデルのように手足がすらりと長い、若い男の人だ。その少し長めの髪は銀色に輝き、それと対比するように褐色の肌をしていた。そして慰霊碑を見上げるその横顔は、思わず見惚れてしまいそうな美形だった。

きつと他の場所では出会ったなら一目惚れしてもおかしくないようなイケメンだ。でも、今の私は生憎そんな気になれなかった。虚空から突然現れるような怪しい人物に鼻の下を伸ばせるほど、私は能天気じゃない。

私はサインコインを握る手に力を込めながら、ゆっくりと深呼吸して気持ちを落ち着けようとした。

と、その男性の顔が慰霊碑から逸らされ、私に向けられた。

「——よお、遅かったじゃないか。てつきり来ないものかと思つたぜ」
馴れ馴れしいその言葉は、間違いない私に向けて放たれたものだった。

「……私を知ってるの？」

「ああ」

男は私に向き直りながら、その秀麗な顔に薄い笑みを浮かべた。

「明日原ミク。…いや、明日よりの使者・キュアルカナ」だったか。俺のことはターロットあたりから聞いてないか？」

「……『過去よりの使者』」

「（名答）」

私の言葉をあつさりと肯定した男の目が、私を真っ直ぐに見つめていた。金色の、まるで狼のような瞳だ。恐ろしく獰猛な気配を放っているのに、同時に夜空の月のように冴え冴えとして美しく、目を離そうにも、離せない。

私はお腹のあたりから身体が冷たくなっていく感覚を味わっていた。

単なる恐怖とも違う。異質で、圧倒的な何かを前にして、私の中で眠っていた生存本能が目覚まし、目の前の男に対抗しようとして全身の感覚を研ぎ澄まそうとしているかのようだった。

その一方で、私の頭の中はふつつつと熱くなっていく。その熱さを勇氣に変えて、私は男に問いかけた。

「ここで何をしているんですか？ なぜネガテバーを生み出すんですか？」

「俺がネガテバーを生み出しているって？ それはとんだ誤解だぜ。過去が自らネガテバーになりたがっているんだ。俺は過去に呼ばれたから、ここに居る」

「過去に呼ばれた？」

「そうだ」

男は再び慰霊碑を見上げた。その石碑には、ある戦艦の名前が刻まれていた。

男は言った。

「この戦艦にはかつて同型艦が他にも三隻居た。四人姉妹つてやつき。知ってるか、船つてやつは女性名詞で表すんだぜ」

男は碑に刻まれた碑文に手を伸ばし、指先でなぞりながら続けた。

「長く厳しい戦いの果てに、姉妹は一隻、また一隻と沈んでいき、とうとうこの戦艦ただ一隻が残された。だがこいつも、戦いで傷つきボロボロになった船体を港に浮かべておくのがやつとの状態だった。…連日襲い来る敵にまともに反撃もできず、守るべき街が空襲で焼き尽くされていくのをただ見ているだけしかできなかつた。…なあ、お前には、その気持ち理解できるか？」

「……………」

私は答えなかつた。答えてはいけなかつたから、口を閉ざし続けた。

目の前で大切な人が死んでいくのに、何もできずに見守ることしかできなかつた悔しさ、悲しさ、辛さ。私がああ抱いた感情が、この慰霊碑に眠る戦艦の乗員たちと同じとは思わない。

でも、安易に「理解できる」と口走ってしまいそうで、私はそれが怖くて、唇を噛み

しめ沈黙を保ち続けた。

男がまた私を見て、フツと鼻で笑った。

「過去に残された悲しみを、今を生きる者は誰も理解しようとしなさい。そんな悲しみがあつたことを知ろうとすらしない。だったらもう一度、今に黄泉返つて叫び声をあげたくなる。そう思わないか？」

歴史を知らなくても人は生きていける。むしろ忘れたい過去だつていっぱいある。でも、そうやって取り残され、忘れられた過去は何を思うのだろうか？

その時代を生きた人々は、何のために生まれ、死んでいったのだろうか？

今を生きる人々がその意味を考えようとしないうなら、過去そのものが声を上げるのは当然じゃないだろうか？

私の脳裏をそんな思考が一瞬にして過ぎて行つた。

だけど。

「私は、そうは思わない」

男を見据え、私ははつきりと相手の言葉を否定した。

「ほう？」

男の目が細められ、私を睨む。その冷たい威圧感に私は気圧されそうになるけれど、それでも、私は足下に力を込めて、言葉を続けた。

「あなたのやり方は間違つてる！ ネガテバーを暴れさせたつて、そんなのは新しい悲しみを払げるだけだよ！」

悲痛な叫びをあげなあらのたうち回るように暴れるネガテバーは、ただ闇雲に周囲を傷つけるだけの存在だ。そんなことを、過去たちは本当に望んでいるのだろうか。

「過去がネガテバーになりたがつているなんて、私はそうは思わない。もしそれが本当でも、私はそれを認めない！」

「傲慢なことを言うじゃないか。お前はいったい何様だよ」

「私はプリキュア。あなたを止める『明日よりの使者』！」

私の啖呵に、男は大声で笑い出した。

「こいつは面白いぜ！ いいぜ、やってみなよ！」

男が懐からサインコインを取り出した。

「過去に囚われた人間には憐憫を！ 取り残された過去には救済を！」

男がコインを慰霊碑に投げつけようとしたのに気づき、私はとつさに足元の石を拾い上げた。

「させない！」

手にした石を男に向けて投げつけた。

「おっと」

「ただど男は慌てる素振りもなく、私が投げた石を身をよじってかわしてみせた。男があげけるような目を私に向ける。」

「ハハッ、無駄な足掻きだなあ！」

「でも、サインコインを投げつけるのを遅らせることはできた。なら、私の役目は十分に果たした。」

「後は頼んだよ、ターロット。」

「突然、男の背後の茂みから一冊の本が飛び出し、男の手に体当たりしてコインを弾き飛ばした。」

「なっ、ターロットか?! しまった!?!」

「空中に跳ね上がったコインに向け、男は慌てて手を伸ばしたが、どれよりも早くターロットが宙を飛び、その開いたページでコインを挟み込んだ。」

「やったロト！」

「そう、私が男と対峙している間に、ターロットは背後の茂みに隠れずっと機会をうかがっていたのだ。」

「ターロットが私の手元に舞い降りる。」

「ターロット、ありがとう、助かったよ！」

「ミクが注意を引いてくれたおかげロト。——タディー、あんたの悪だくみもここまで

ロト。これ以上好き勝手はさせないロト！」

そう言われ、タディーは悔しそうな表情を……浮かべてはいなかった。

「くつくつく……あーはっはっは！」

タディーは腹を抱えて大笑いをしていた。

「な、何がおかしいロトか!？」

「やるじゃねえかプリキュア。……だがなあ、残念なことに、もう手遅れなんだよ」

タディーが急に笑みを消し、そして何も持っていない手で、その指を鳴らした。

乾いた音が周囲に響いた、次の瞬間——

「テバアアア!!!」

慰霊碑の背後から、ネガテバーの巨大な姿が突如として出現した。

「悪いな。実はとつくに仕込み終わっていたのさ。サインコインはまだ大量にあるんで

な、ちよつとからかったのさ」

「ば、バカにするなロト!」

「あーっはっはっは、せいぜい頑張るんだな、あばよ!」

男が掻き消えるようにその姿を虚空へと消した。

「待てロト! 逃げるなロト!」

「ターロツト、そんなことより今はネガテバーを止めるよ!」

私はすかさず握っていたサインコインを指で空中に弾き上げた。

「プリキュア、フォーチュンセレクト！」

私の手元からターレットが飛び立ち、空中のコインをページを開いて挟み込む。再び手元に落下したターレットを受け止め、私は新たにページを開いた。

「オーブン！」

私は光に包みこまれ、身体に力が漲っていく。私は変身を続けながら即座に大地を蹴り、ネガテバーに体当たりを仕掛けた。

「テバあつ!?」

「はあああつ！」

私はネガテバーの巨体を、公園の奥に広がる森の中へと押し込んだ。

先ずは人が居るところからネガテバーを遠ざける必要がある。私の不意打ちによってネガテバーの体勢がまだ整っていないうちに、私は立て続けに大地を蹴って、ネガテバーを森の奥へ、奥へと押し込んでいった。

かなり奥まで来たところで、ついにネガテバーが体勢を立て直し、踏みとどまった。

「テバアアア!!」

「くっ!?!」

途端に、ビクともしなくなった。それどころか、さつきまでとは比べ物にならない力

で押し返してくる。

このまま力比べをしても押し負けると悟った私は、すぐに自分から身を引いて、背後へと大きく飛び退いた。

「テバ!?!」

私という支えを失ったことで、ネガテバーはそのまま前方につんのめって倒れ込む。私はネガテバーの前方十数メートル犯れた場所に着地する。

「未来へ進む明日よりの使者、キュアルカナ!」

立ち上がろうとするネガテバーに向かって、私は名乗りを上げたのだった。

第3話 三人で力を合わせましょう？ 登場、キュアオラクル（後編）！

「テバアア!!」

再び立ち上がったネガテバーの姿を、私は改めて観察した。

それは、船だった。船を横から見たような左右に長い胴体から手足が生えたような姿をしている。その胴体中央から艦橋を模した頭部が伸びていた。艦首と艦尾にあたる左右に伸びた肩の上には、大砲がたくさん載っている。

「まるで戦艦ロトね」

「戦艦……」

「テバア……セエエンカアンテバアアア！」

ターロツトと私のつぶやきに呼応するかのようには、戦艦ネガテバーが己の名を誇示するかのようには咆哮した。

その咆哮は重々しく、そしてどこか物悲しく聞こえた。

「ルカナ！」

「わかってる」

私はターロットのページを開き、三枚のカードを一気に引き抜いた。

「THE MOON (月) の正位置、THE STAR (星) の逆位置、JUDGE
NT (審判) の逆位置、暗示は不安、失望、裏切りだロト！」

ヴィジョンが脳裏に広がる。

故郷を離れ、遠く離れた異国の海で明日をも知れぬ命懸けの戦いに臨む日々。愛する家族を残して次々と斃れていく戦友たち。奮戦むなしく追い詰められていく祖国。母港に帰ってきたものの、燃料も弾薬も欠乏し、沖で錨を降ろしたまま、守るべき街が焼き尽くされていくのを見ていることしかできなかつた悔しさ。

そして今、そんな歴史があつたことさえ忘れ去られようとしている、そのことへの虚しさ、怒り……

「違うー！」

私は三枚のカードを光に変えて、右の拳に力を宿した。

「あなた達の戦いは忘れ去られてなんかいない！ あなた達はその感情を利用されているだけよ。悲しみに囚われて、あなた達が守った未来を壊さないで！」

私は戦艦ネガテバーに向かって拳を構えて突貫する。

「センカーンー！」

戦艦ネガテバーの砲身が私に向けられ、一斉に発砲した。

周囲の樹々を震わせる大音量と発砲煙が拡がり、六発の砲弾が私めがけ迫りくる。

「だけど大丈夫だ。プリキュアとしての動体視力と予知能力によって、六発全てを避けることなど簡単だった。」

「だけど――」

「――っ!?!」

私は公園を背にしていた。かなり距離があるとはいえ、砲弾を避けてしまえば流れ弾が公園まで届く可能性はかなり高い。

判断に要した時間は一瞬だった。私は砲弾とすれ違う寸前に固めていた拳を開き、掌底として前方へ突き出した。

右手に宿していた力がその場で解放され、四方をへ拡散した。飛来した砲弾がその力のフィールドに接触し、爆発する。

至近距離での爆発の威力に、私は背後へと吹っ飛ばされた。けれど、なんとかうまく着地することに成功する。

傷は無い。だけど煤で真っ黒に汚れたターレットが抗議の声を上げた。

「何で避けなかった口トか!?!」

「公園に飛んで行ったら危ないでしょ」

咄嗟の迎撃手段だったけど、上手く行って良かった。だけどすぐにプリキュアとして

の予知能力が、次の攻撃が迫っていることを告げた。

大砲の発射と砲弾の爆発によってもうもうと舞い上がった土煙の向こうで、戦艦ネガテバーが再び発砲しようとしている。しかし次弾装填までまだ数秒はかかるはずだ。

予知でそれを知った私は、すかさず右拳に再び力を込めて大地を蹴った。

「プリキュア、イレイザーナックル！」

土煙を突き抜け、その奥に居る戦艦ネガテバーの胴体のど真ん中に拳を打ち込んだ。

「——ぐっ!？」

拳が当たると同時に光がさく裂し、戦艦ネガテバーの分厚い装甲に拳大の凹みが生じた。だけど、それだけだ。戦艦ネガテバーはよろめきながら数歩後ずさっただけで、すぐに体勢を立て直し、その砲身を、足元に着地した私に向けた。

発射まで残り1秒。それだけあれば逃げるのは容易いが、流れ弾を出す訳にはいかない。しかしまたフィールドで迎撃しようにも、拳を打ち込んだ直後なのでまだ力が溜まり切っていない。

猶予は残り0.5秒。一か八か、私は拳を足元の大地に叩きつけた。イレイザーナックルの力は宿していないものの、プリキュアとしての全力パンチは大地を穿ち、半径数メートルのクレーターを生じせしめた。

そのクレーターは戦艦ネガテバーの足元にまで達し、そのバランスを崩すことに成功

する。

「テバあ!？」

うつぶせに倒れた瞬間に大砲が発砲され、戦艦ネガターは自身の砲弾の爆発に巻き込まれた。

私は大きく跳躍し、その爆発から逃れて離れた場所に着地する。

「やった?」

「その台詞はフラグだロト」

ターロットの言葉どおり、視界を埋め尽くすほどの土煙の向こうで戦艦ネガターが再び立ち上がる気配があった。なんとというタフネスぶりだろう。私は舌を巻きながらも、右拳に力を貯め込んだ。

どんなネガターが相手だろうと、私にできることはただ一つ、この拳を打ち込むことだけだ。ならば、四の五の言わずに真正面から行くしかない。

私はその覚悟を決めて拳を構えた、その時だった。

「せーんばい」

聞き覚えのある声と共に、私の背後に誰かが着地した気配があった。

「苦労してそうじゃん。手伝ったげよか?」

「ストロギー!？」

振り返ったそこには、青を基調とした私と同じ格好の、青い髪のプリキュア：キュアストロジーが居た。

その彼女が、私に向かって手を差し伸べて、言った。

「プリキュア同士で助け合いましょ？」

あらまあ、殊勝な事を言ってくれるじゃないの、この子。一瞬、感動しかけたわ。

その感動も彼女の差し出した手を見た瞬間に引っ込んだけど。

ストロジーが差し出した手は、親指と人差し指で輪を作っていた。つまり「マネープリーズ」という意味。ターロットが胡乱な声で問いかけた。

「対価は何ロト？」

その問いに、ストロジーが持つ星座盤型妖精：アストロが答えた。

「it's a coin」

「だと思ったロト。だれがコインを渡すかロト——」

「ストロジー、手伝って！」

「ロトお!!？」

「さつすがせんぱーい、話がはっやーい」

「ルカナ！ 何で勝手に決めるロトかあ!!？」

「時間が無いの。——来るよ！」

私は力を込めた拳を構え、土煙に目を向けた。

「セエンカンテバアアア!!」

咆哮が土煙を吹き飛ばし、隠れていた巨体が再び姿を現した。戦艦ネガテバーは至近距離での爆発であちらこちらが煤けていたが、目立ったダメージは私が殴って凹ませた部分以外に無さそうだった。

つくづくすごい装甲だ。その砲身が私たちに向けられる。私は叫んだ。

「砲弾は私が防ぐから、ストロジューはその間に攻撃を!」

「おっけー!」

「センカンテバアア!」

大砲が発射され、六発の砲弾が私たちに向け迫りくる。

「プリキュア、イレイザーフィールド!」

私は拳の力をその場で解き放ち、周囲を包み込むようにして展開させた。つい先ほど編み出した防御方法だが、力は光のフィールドとなつて砲弾全てを食い止め、破壊した。

その私のそばで、ストロジューは星座盤：アストロを回転させた。

「ぞでいあんルーレット♪」

「TAURUS!」

「うっしっし、これなら勝てる。牡牛座です!」

星座盤から戦艦ネガテバーと同程度の大きさの巨大な牛が飛び出し、その逞しい角を振りかざしながら弾丸の様にネガテバーへ突っ込んだ。

「グモオオオ!!」

「テバあ!!」

巨牛が戦艦ネガテバーに真正面から衝突した。戦艦ネガテバーは大きくよろめきながら数歩ほど後ずさったが、それでも倒れなかった。

「うっそ!! 全然効いてない!!」

巨牛の姿が消失した。一度のルーレットで出せる攻撃は一撃程度らしい。巨牛の攻撃は、私の一撃と同じ場所に打ち込まれたようで、胴体中央がさらに大きく凹んでいたけれど、それでもその厚い装甲を穿ち抜くことはできなかったらしい。

「やっぱあ。さっきのが一番強い攻撃だったのになあ。せんばーい、どうしよう——つて、せんばーい?」

ストロジの言葉を私はとつくに置き去りにして、戦艦ネガテバーに向かって突撃していた。

戦艦ネガテバーが再び姿勢を立て直す前に、その足元にまで到達する。右の拳はチャージ完了。

私は深く屈みこんだ姿勢から跳躍して、一気に拳を振り上げた。

「プリキュア、イレイザーアッパー！」

狙うは二度の攻撃を打ち込んで凹ませた胴体中央。私の拳は見事にその中心を捉え、遂に装甲を打ち抜いた。

光の奔流がそこからネガテバー体内に流入し、その勢いで戦艦ネガテバーを空中高くに押し上げる。

「テバアアア……」

戦艦ネガテバーは空高くに打ちあがった後、そこで花火の様に強い光を四方に放ちながら浄化され、消失した。

「うっわ、せんぱいの火力、エグ……」

離れたところでストロジューがドン引きしている気がするけれど、気にしないでおう。そんなことより、私が見上げた視線の先、その空中高くでサインコインが煌めいているのが見えた。

そのコインが落ちてくるよりも早く、ストロジューが跳躍した。

「約束どおり、コインは貰ってくよ〜」

「危ないっ!？」

サインコインに向かって飛び掛かっていくストロジューに向かって、私も跳んだ。ストロジューがサインコインを掴み取る寸前に、私は横から彼女を抱きかかえるようにして飛

びついた。

「あわあつ!! ちよつと、邪魔しないでよ!」

邪魔したつもりはない。私が飛びついて軌道が変わった、その直前の場所を、鳥のよ
うな影が幾つもの、高速で次々と飛びぬけて行った。

その影は風を切り、エンジン音のうなりをあげて急上昇し、旋回して再びこちらへと
向かってきた。

ストロジーが狼狽する。

「な、何アレ!! ラジコン飛行機!!」

「まさか、ゼロ戦……?」

それは白と灰色のまだらな迷彩に塗装されたプロペラ機だった。大きさは鳥よりも
少し大きい程度だけれど、十数機もの数がびったりと編隊を組んで襲いかかってくる。

その翼に仕込まれた機関銃が火を噴き、大量の弾丸が発射された。私とストロジーは
着地するや否やすぐに横に跳び、銃弾の列をかわす。その私たちを追って、別のゼロ戦
が機銃掃射を放ってくる。

それをかわし続けながら、ストロジーが私に問いかけた。

「せんばい、ぜろせんって何さ!! えびせんの親戚!!」

「昔の海軍の戦闘機よ。きつとあれもネガテバーだわ」

「ええ!? 一体だけじゃ無かったの!？」

「クウーボオオオン!!」

ゼロ戦編隊の機銃掃射から逃げ惑う私たちの前に、新たなネガテバーが出現した。

これも船を模った姿をしている。だけど戦艦ネガテバーと違って大砲などは載せておらず、平らになったその表面にはあのゼロ戦がずらりと並んでいた。

「空母ネガテバーだロト!」

「じゃあこのゼロ戦たちを操っているのは、あのネガテバーなんだね」

私はカードを三枚引き出す。

「STRENGTH(力)の正位置、THE DEVIL(悪魔)の正位置、THE HANGED MAN(吊るし人)の逆位置。暗示は有言実行、敗北、耐えられない苦痛だロト!」

ヴィジョンに映されたのは、遠い海で敵の航空機の大軍に襲われている空母の姿。他の仲間の艦艇が次々と被弾炎上していく中、最後の一隻として死力を尽くして戦い、敵に一矢報いて沈んでいった勇敢な船。

ただど戦いには敗れてしまった。この戦いで多くの艦艇と航空機を失ったことで、その後、この国そのものまで敗れてしまった。それが悔しい、口惜しい。

その負の感情が戦闘機の形となって、空母ネガテバーの身体から次々と空へ舞い上

がっていく。

上空を埋め尽くすほどのゼロ戦の大軍が、四方八方から私とストロジューめがけ襲い掛かってきた。

逃げ惑う私は、いつのまにかストロジューと同じ場所に追い詰められてしまった。

「せんばい！」

背中合わせになったストロジューが叫ぶ。

「せんばい、さっきの技でもういつぺんだけ攻撃を防いでくんない!? そのあいだにアタシがああのコキを片付ける！」

「わかった！」

ゼロ戦が四方から一斉に機銃を放ってきた。

「イレイザーフィールド！」

逃げ場のない全方位攻撃を光のフィールドで弾き返す。その隙にストロジューがアストロを回した。

「ぞでいあんルーレット！」

「SAGITTARIUS！」

「いてまえ！ 射手座です！」

ストロジューの前に、黄金に輝く弓矢を携えた半人半馬の男たちが出現した。

「ケンタウロスさんたち、やっちゃって〜！」

「「ウオオオオ！」」

ケンタウロスの群れが私たちを囲むように一斉に走り出しながら、空に向かって矢を放ち始めた。その矢は驚異の命中率で次々とゼロ戦を射落としていく。

「すごい……」

感嘆した私に、ストロジーがドヤ顔で胸を張った。

「ふっふっくん、どーんなもんよ。アタシの実力、すんごいでしょ〜」

「Will disappear in 30 seconds」

「え、残り三十秒？ げげ、そんだけしか保てないの!？」

「やっぱー、とストロジーの表情が引きつった。どうやらストロジーの能力は強力だが、回数制限がある上に持続力にも欠けるようだ。」

結局、ゼロ戦の半分以上を落とすところまでケンタウロスさんたちは消えてしまった。でもだいたい減らしてくれたおかげで余裕はできた。

私は空母ネガテバーめがけ突撃する。

「プリキュア——」

「クウウボオオオ!!」

拳を構えながら駆け寄る私の目の前で、空母ネガテバーが新たなゼロ戦をその身から

発艦させていく。でも、そのゼロ戦が攻撃に移るよりも、私の突撃の方が早い。

「イレイザーナツ——」

私が拳を打ち込もうとした瞬間、背後からストロジーに飛びつかれた。

「せんぱい危ない！」

「ほえっ!？」

ストロジーに抱きつかれ地面に転がされた私のすぐそばを、何かが通り抜けていった。

それは地面の土の上なのに、まるで水面を何かが滑走するかのよう白波が立ち、それが私とストロジーのそばを通り抜け、離れた場所の岩にぶつかった。

直後、その岩が爆発した。

「新手の攻撃!？」

「よくわかんないけど、地面の下を何かがすごい勢いで走ってた。——そう、アレ、あそこ！」

ストロジーが指さした方向。そこに、まるで水中を進むかのように波しぶきを立てながら、私たちに向かつて真っすぐに突っ込んでくる「何か」があった。

数は三。迫りくる三本の直線を、私たちは跳躍して避けた。その何かは私たちの足元を通り抜け、背後で爆発した。

「Torpedo!？」

「とつぴーどつて何き、アストロ!？」

「魚雷のことだロト!？」

陸上なのに魚雷？ 私は空中からその魚雷が放たれた方向を見下ろした。

「居た! 潜水艦のネガテバーよ!」

地面がまるで水であるかのように、潜水艦の形をしたネガテバーが、その半身を地面に沈めていた。

ストロジューもそれを見て声を上げた。

「三体目のネガテバーってこと？ ちよつとこれ大盤振る舞いすぎない!？」

「確かに拙いね」

空中から落下しつつある私たちめがけ、ゼロ戦が再び襲い掛かってきた。私はイレイザーフィールドでその攻撃を防ぐ。

だけど、着地しようとしていたその場所へ、潜水艦ネガテバーがタイミングを狙いすまして魚雷を放っていた。このままじゃ着地した瞬間に魚雷に当たってしまう。

私のすぐ横で、ストロジューが咄嗟にアストロに手をかけた。

「ぞでいあんルーレット!」

「ARIES」

「あらようつと、牡羊座です！」

今のは、あら“よう”と羊をかけたのかな。ちよつと苦しいぞ。と思いつつ落下する私の横で、ストロジーが手にする星座盤から、巨大でモコモコな毛の塊が出現した。

ストロジーはその巨大毛玉を真下の地面めがけてぶん投げ、私たち二人はその上にボスンと落下した。

直後、魚雷が巨大毛玉の真下に到達し、爆発した。

爆発は巨大毛玉を残らず吹き飛ばしたが、その分、衝撃は毛玉によって相殺され、私たちはノーダメージで改めて着地することができた。

「ストロジー、助かったよ。ありがとう」

「せんばいに頼りっぱなしつてのも癪だかんね。…けどヤバいわコレ。アタシが使える技はネガテバー1体に付き2回までだからね。クウボとセンスーカンだっけ？ それぞれに後一回ずつしか使えない」

「おまけに空と地下の挟み撃ちだしね」

潜水艦ネガテバーは完全に地中へと潜航してしまい、次はどこから魚雷が来るか見当がつかなかった。

それに加えて空からはゼロ戦がひっきりなしに機銃を撃ってくる。それを操っている空母ネガテバーは私たちからかなり距離を取って、そこから新たなゼロ戦を次々と空

に放っていた。

形勢は私たちにかなり不利な状況だった。せめて、どちらか一方を短時間でも無力化することが出来れば、その隙に残る一方を浄化することができるのだけど。

「せめて、あと一人でいいから他にプリキュアが居てくれたら……」

詮無いことだとわかつては居たが、それでも思わず呟いてしまった、そのときだった。

「——私たちを呼んだかしら？」

そんな第三者の声が、頭上から降り注いできた。

「誰っ!？」

思わず見上げたその視線の先に、太陽が輝いていた。まぶしさに思わず目を細めた視界の中で、その輝きを背に、声を発した何者かがこちらへと向かって跳んでくるのが見えた。

その影は空中で群がるゼロ戦の攻撃を身をひるがえして華麗にかわすと、私とストロジーのすぐそばに着地した。

長い金髪に、黒地に黄色のフリルが付いたミニスカート、そしてトルマリンのような煌めきをもったイエローのマントを羽織った、その姿。

「あ、アンタももしかしてプリキュアなの!？」

ストロジーの問いに、彼女はにこやかな笑みとともにウィンクをしてみせた。

「未来を繋ぐ、刻を告げし予言者、キュアオラクル！」

「オラクル……三人目のプリキュア？」

「What!? I don't know！」

「オラクルなんてプリキュアは聞いた事ない口ト!?」

慌てふためく妖精たちに対し、オラクルが手にしていた水晶玉から声が上がった。

「うるせーぞ妖精ども！ 私たちがプリキュアと言ったらプリキュアなんだよ。それより手を貸して欲しいのか、欲しくないのか、どっちだ——リン」

「欲しいですー！」

ターロット達が何か言う前に、私はとっさに答えていた。

「わかったわ」

オラクルが頼もしく応え、そして続けて言った。

「ルカナ、ストロジー、あなた達二人は空母ネガテバーをお願い。潜水艦は私が対処するわ」

「ありがとう。でも一人で大丈夫？」

「心配ご無用よ。私の実力、あなたたちに見せてあげるわ」

自信満々に答えるオラクルの背後で、魚雷が三本、波しぶきをあげながら迫ってくるのが見えた。

「魚雷よ！ オラクル、避けて！」

「避けるたって、せんばい、無理だよ!? 空からぜろせんにも困まれてるし!」

ストロジীর言葉どおり、上空に跳ぼうにも四方からゼロ戦が殺到しようとしていた。

「イレイザーフィールド！」

私は咄嗟にストロジীরとオラクルも含めて光のフィールドで囲い込む。これでゼロ戦と魚雷の攻撃を同時に受け止めるしかない。でも耐えられるかどうかは未知数だ。

私が迫りくる衝撃に身体を固くした、その時だった。

「ここは私に任せてって言ったでしよう？」

オラクルが余裕の態度を崩すことなくそう言つて、手元の水晶に語りかけた。

「行くわよ、クルリン！」

「応よ！」

「プリキュア、ジャイロクリスタルボール！」

「うりやりやりりやあああ!!」

オラクルの手の上でクルリンと呼ばれた水晶が自ら高速回転を始めた。オラクルはそれを手に乗せたまま、自らも片足を軸にスピンを開始する。

その状態で、オラクルとクルリンの声が同時に響いた。

「重なる二重螺旋！ 大地に響く波紋疾走！」

水晶がオラクルの手から離れ、足元の大地に撃ち込まれた。水晶自身の回転力とオラクルの回転力が重なり、それが大地を波打たせ渦を描いた。

それは単なる物理的な力ではなく、私が拳に込める光にも似たものだと感じて理解できた。その力が、私たちの足元で激しく渦を巻いているのを感じとった。

その地中を渦巻く回転力に、三本の魚雷が突っ込んだ。魚雷は爆発することなく、その回転力に巻き込まれるように軌道を変え、私たちの周りを一周すると、そのまま来た方向へと帰っていく。

「セ!? センスイカーン!?!」

まさか魚雷を返されると思わなかったのだろう。潜水艦ネガティブは三本の魚雷をまともにくらつて、大爆発に巻き込まれながら、その身体を地上に浮き上がらせた。

「どう? ざっとこんなものよ。私もなかなかやるでしょう?」

オラクルはバレリーナのように華麗にスピンを止めながら私たちに言った。

「さあ、二人とも。空母の方をよろしくね」

「わかったわ。ストロジー、行きましよう!」

「りよーかい。ぞでいあんルーレット!」

「AQUARIUS!」

「みずがめ——えっと——すいへいりーべぼくのふね、水瓶座です！」

「なにそれ？」

「水瓶とすいへいをかけてみました。って、やつば無理あり過ぎ？」

「というかそもそもそのダジャレは必要なのだろうか。そんな疑念を抱いている間に、星座盤から私たちの背丈よりも大きい水瓶が飛び出した。ストロジーがそれを肩に担ぐ。」

「ゼロせんはアタシが蹴散らすから、せんばいはクーボーってやつをよつろしくう！」

「わかった！」

ストロジーが担いだ水瓶の口を空に向けた。そこから大量の水が噴水の様に勢いよく放たれた。

「そーりやそりやそりやあー！」

ストロジーが水瓶を振り回し、その高圧放水で空のゼロ戦たちをかく乱した。

その隙に私は拳を構えて、空母ネガテバーに向かって突貫した。

「クボツ!？」

空母ネガテバーが慌てふためいている。戦艦ネガテバーと違い、空母ネガテバーには大砲も厚い装甲も無いのだろう。懐に入ってしまえばこつちのものだ。

「プリキュア、イレイザーナックル！」

真正面から光の拳を叩き込む。拳から力が奔流となつてネガテバーの体内を駆け巡り、その身体を浄化して消し去った。それと同時に、空を埋め尽くしていたゼロ戦も消え去っていく。

私の前方、かなり離れた場所にサインコインが落ちていた。ナツクルの勢い余つてあんなところまで飛んで行つてしまったようだ。

ターロットが叫んだ。

「ルカナ！ 早く回収するロト！」

「おっと、そうはいかないよつと。行っちゃえアストロ！」

「OK！」

ストロジーが手元のアストロを円盤投げの様に投擲した。サインコインに向け駆け寄ろうとした私の前で、地面を掠めるように飛来したアストロが、落ちていたサインコインをかつさらっていく。

「H A H A H A See you」

「キーっ、また先を越されたロト！ 悔しいロトー!!」

「さあて、アストロ、つぎはせんかんのコインを回収するよ。あ、せんぱい、約束したよね。あれもアタシのもんだからね」

「渡すもんかロト！ ルカナ、早く探すロト！」

「まあまあターロット、落ち着いて」

「これが落ち着いてられるかロト！ だいたい、ルカナがあんな約束しなきゃ——ムガっ!？」

私はターロットの表紙を手で塞いで黙らせた。ちなみにその手の下には、一枚のサインコインがある。

ターロットがそれに気づき、声を潜めて訊いてきた。

「……これ、もしかして戦艦ネガテバーのものロトか？」

「まあね」

ストロジューをゼロ戦からかばったときに、たまたま私の服のすそに入り込んでいたものだ。

「……ストロジューに報酬の約束したんじゃないロトか？」

「私は『手伝って』と言っただけだから」

なので別に約束をしたつもりはない。とりあえずターロットも納得したようなので、私は、未だセンスカンネガテバーを相手にしているオラクルに加勢しようと、彼女の方向へ目を向けた。

だけど私が目にしたのはキュアオラクルの圧倒的な闘い振りだった。

潜水艦ネガテバーは再度地中に潜航したようで姿が見えなかった。そうやって地中

に潜つたまま放つてきた魚雷が、大地に直線の雷跡を描きながらオラクルに迫つていく。

オラクルはそれを真上に跳躍することで回避した。それを妨げるゼロ戦はもういない。オラクルは高空から悠々と大地を見下ろすと、足元を通り過ぎようとしている魚雷めがけ、水晶妖精のクルリンを投げつけた。

「プリキュア、ジャイロクリスタルボール！」

クルリンが高速回転しながら魚雷のそばに着弾し、その不可思議な回転力で魚雷の軌道を捻じ曲げた。魚雷が反転し、地中に潜む潜水艦ネガテバーに命中する。

「センスーイ!?!」

爆発と共に地上に姿を現した潜水艦ネガテバーに向かって、オラクルが上空から、高速スピしながら襲い掛かった。

「貫く螺旋の力! 天翔ける波紋疾走!」

高速スピンを伴ったオラクルのキックが潜水艦ネガテバーの巨体を貫通した。
「テバアアア!?!?!」

潜水艦ネガテバーの身体にオラクルのスピンの回転力が伝わり、その巨体が渦を描いて自身に開けられた風穴に吸い込まれていくように小さくなっていく。やがてそれは小さな一点に集約され、そして弾けるように光となって消え去った。

その光が消え去った場所にサインコインが一枚、ギョルギョルと音を立てて回転しながら落ちていた。

「ルカナ、あれも回収するロト!」

「いや、あれは拙いよ、多分」

「何言ってるロトか!?!」

なぜだかオラクルがコインを拾おうとしない。そのことに疑念を抱いて警戒している間に、離れた場所で未だに最初の一枚を探し続けていたストロジューが、こつちの様子に気づいた。

「あつれ、コインどこ? って、センスイカーンが倒されたっぽい? よっしや、じゃあそつちももらつちやうよ」

ストロジューがサインコインに向かって飛び出し、手を伸ばした。けれどコインを掴もうとしたその手は、高速回転するコインに触れた瞬間、バチィつと音を立てて弾かれた。「あわあ!?! 痛ああ!?! なにこれ、コインに触れられないじゃん!?!」

やっぱり変な仕掛けがあつたか。

「ルカナ、こうなることを予知してたロトか?」

「そうじゃないけど、明らかに変な回転してるし、オラクルも余裕な態度のままだしね。そりゃあ何かあるでしょ」

私の言葉が聞こえたのだろう、離れた場所に居たオラクルが、私に向かって語り掛けてきた。

「流石ね、ルカナ。ちゃんと物事をよく見ているじゃない。ストロジーも見習った方が
良いわよ」

オラクルの言葉に、ストロジーは弾かれた手を振りながら不機嫌な表情で答えた。

「急にしゃしゃり出てきたくせに上から目線とか、やなかんじー。アンタ、いったい何様よ？」

「プリキュアよ。ただし——」

オラクルが高速回転を続けるコインへ向けて、クルリンを投げた。クルリンもまた高速回転しながら大きく回り込むような楕円軌道を描いてサインコインに横から命中し、コインをオラクルの手元めがけて弾き飛ばす。

オラクルはコインをキャッチすると、ブルーメランのように帰ってきたクルリンを受け止め、そして言った。

「——私こそが本当の、そして唯一のプリキュアだけどね」

「ロト!?!」

「What!?!」

「ほええ?」

「どゆこと?」

首を傾げた私たちに向かって、オラクルはにこやかな笑みを浮かべながら言った。

「まあ細かい説明は省くけど、私は“この時代”で生まれた、正真正銘“この時代のプリキュア”なのよ。あなた達みたいに未来の妖精の力で生まれたプリキュアとは違うの。だから……」

オラクルの目がスッと細められ、その表情から笑みが消えた。纏っていた穏やかな雰囲気を、肌を泡立たせるような冷気に変えながら、オラクルは言った。

「……サインコインは、私が集めるべきものなのよ。あなた達が持っているコインを渡しなさい」

あー、やっぱりそうなるのか。こんなこと言われたら当然、

「絶対に渡さない口ト!」

「No, No, No! Fuck you!」

妖精たちはこうなる訳で、話し合いにすらならなくなってしまう。うーん、困った。

オラクルが言った。

「交渉の余地がなければ、力づくで行かざるを得ないわ。それでもいいの? ……本当にいいの?」

ん? わざわざ念押ししてくるあたり、もしかしてオラクルもちよつとは躊躇してい

るのかな。なら、彼女自身とは少しは交渉の余地はあるかもしれない。

「ねえオラクル、話を聞いて——」

「——まだるっこしいな！」

私の声を遮るように、クルリンが声を上げた。

「奪うと言ったら、問答無用で奪えばいいんだよ！」

「で、でもクルリン、そういうのは……」

「うるせえ！ お前ができなきや私がやる。選手交代だ！」

クルリンが叫んだ瞬間、それは激しく発光し、私たちは思わず目を背けた。

「ほえ!!」

「あわ!!」

光はすぐに収まった。目を戻したそこには、オラクルが変わらず立ったままだった。

「……」

「くくく……あはは……」

オラクルが喉を鳴らすかのように低い声で笑い出す。

「オ、オラクル、どうしたの？」

「なあに、何でもねえよ。ただ、中身を入れ替えただけさ」

オラクルがそう言って、口の端を吊り上げるような凶悪な笑みを浮かべた。まるで別

人だ。

やばい。

「ストロジー、避けて!？」

「へ？ ——あわあ!？」

私とストロジーが慌てて飛び退いた次の瞬間、一瞬前まで私たちが立っていたその場所を、水晶玉が高速回転しながら地面を深くえぐっていた。

「さあ、禁断のプリキュア対決と行こうじゃねーか!」

オラクルはそう叫ぶと、大地を蹴って私たちに向かって襲い掛かってきたのだった――

第4話・三人一緒♪ わくわくパジャマパーティー（前編）

「くくく……あはは……」

オラクルが喉を鳴らすかのように低い声で笑い出した。

「オ、オラクル、どうしたの？」

「なあに、何でもねえよ。ただ、中身を入れ替えただけさ」

オラクルはそう言って、口の端を吊り上げるような凶悪な笑みを浮かべた。まるで別人だ。

やばい。

「ストロジー、避けて!？」

「へ? —— あわあ!？」

私とストロジーが慌てて飛び退いた次の瞬間、一瞬前まで私たちが立っていたその場所を、水晶玉が高速回転しながら地面を深くえぐっていた。

「さあ、禁断のプリキュア対決と行こうじゃねーか!」

オラクルはまるで人が変わったようにそう叫ぶと、大地を蹴って私たちに向かって襲

い掛かってきた。

二手に分かれていた私とキュアストロジーに対し、オラクルはストロジーの方へ向かって行った。

「げ、狙われてんのアタシ!？」

オラクルが獣のような敏捷さでストロジーの目前に迫り、右腕を振り上げた。その掌は、握り拳ではなく、獐猛な肉食獣のようにかぎ爪が立てられている。

「シヤアツ!」

「あわあつ!？」

鋭いかぎ爪が振り下ろされ、ストロジーの胸先を掠めた。ストロジーは咄嗟に飛び退いてかわしたものの、その服は鋭利な刃物に切り裂かれたように破れていた。

避けていなければ大ケガどころじゃなかったかもしれない。その容赦仮借ない攻撃に、見ている私もゾツとした。

ストロジーが、オラクルから大きく間合いを取りながら顔を真っ赤にして叫んだ。

「ちよつと! 胸元破くなんて、なんつーことしてくれんのさ! ポロリしちゃつたらどうすんのよ!？」

「恥ずかしがるほどのサイズでもねえだろ」

ストロジーが手で押さえている胸元を眺めながら、オラクルが嘲笑う。

「カッチーンときた。このストロジュー様の海より広い堪忍袋がブチ切れだわ。アンタ、絶対に泣かしたる」

「いいね、やる気になってくれて何よりだ。じゃあ、もういっちょよ行くぜ！」

オラクルが再び大地を蹴ってストロジューに迫る。

それに対し、ストロジューが持っている星座盤：アストロラーベを構えた。

「アストロ！」

「OK！」

ストロジューの手が星座盤を素早く回転させる。彼女とそのパートナー妖精：アストロラーベの能力「ゾディアンルーレット」だ。十二星座をモチーフにした能力を二回だけ発動できるらしい。

先ほどまでのネガテバーとの戦いを見るに、この二回という回数制限は「一度の変身につき二回まで」ではなく、「二体の敵につき二回まで」のようだ。

私のタロットカードも「一体の敵につき三枚まで」引けるので、それと似たような条件なのだろう。

オラクルの爪が襲い掛かる直前、ストロジューの手元の星座盤から水しぶきが噴き上がり、二人の間の視界を塞いだ。

けれどオラクルはそんな目くらましに怯みもせず、かぎ爪を立てた掌をストロジューめ

がけ振り下ろした。

オラクルの爪が水しぶきを切り裂く！

だけど——その手は、水しぶきから飛び出してきた大きな何かに阻まれた。

それは一頭の大型の四足獣だった。その頭から生えている螺旋状に渦を巻いた大きな角が、オラクルの爪を受け止めていた。

山羊だ。大きな山羊の頭部がオラクルの攻撃を押し返す。

「やつぱりギリギリ、もうやーめた！ 山羊座です！」

またしようもない駄洒落を言ってるなあ、この青いの。しかもストロジューは山羊を放つと、即座に背を向けて逃げ出した。

うわ、マジか。これには私も、そしてオラクルも一瞬、呆気に取られてしまった。

「おい!! あんな啖呵を切ったくせに逃げんのかよ!?!」

「アンタみたいなイカレポンチとまともに付き合うわけないでしょ、バーカー！」

振り向きもせずに言い捨てながら、ストロジューは全力疾走で遠ざかって行った。

オラクルは追いかけてしようとしたけれど、出現した山羊が彼女の周りをびよんびよんと飛び跳ねながら邪魔をする。しかもその山羊は、後ろ半身が魚の尾の様な形になっていて、それがビタンビタンと地面を叩くたびに大量の水しぶきを撒き散らかすので、うっとおしくて仕方がない。

「だあああ！ 邪魔くせえ!」

オラクルの全力の一撃が山羊を捉えた。爪が当たった瞬間、山羊の身体は風船のように弾けて、さらに大量の水をオラクルに浴びせかけた。

「うおっ!?! ……あ、あんのヤロー、次に会ったらせめて逃がさねえ!」

「あーあ、びしょ濡れだね」

私は離れていたから濡れてないけど。

私のそばで浮いていたターロットが呆れたように言った。

「ストロジーもこすつからいい奴だロト。やつぱりアストロが選ぶ奴はロクなもんじやないロト」

いやいや、あの退き際は鮮やかなものだよ。と、私はフローしつつ、オラクルの様子から目を離さなかった。

オラクルは金色の髪から水を滴らせたままストロジーが去って行った方向をしばらく睨みつけていたが、私がまだここに留まっていることに気が付いて、不思議そうな顔で私を見た。

「お前はなんで残ってんだ?」

「逃げた方が良かったかな?」

「…いや、良くねえなあ」

「私も、先ずは話し合おうと思ってるの。相手の事情も知らない内から、ケンカはしたくないからね」

「事情を知ったところで一緒だぜ。こっちの要求はただ一つ。お前らが持っているサイコインを全部寄せ、だ」

「交渉の余地は無いの？」

「ねえな」

「これでも？」

今にも襲い掛かってきそうなオラクルに対し、私は右手で拳を握りながら、左手に持っていたモノを掲げて見せた。

左手に持っていたモノ、それは水晶玉だった。

きれいに透き通ったその球の中には、三頭身の小動物に似た妖精の姿があった。

「お、おい、クリルンじゃねーか！　なんでお前が持つてんだよ!？」

「足元に落ちていたから拾ったの」

正確に言えば、足元めがけ投擲された水晶玉を、回転が納まったところを見計らって捕獲した、というべきだけだ。

「ふっふっふ、だロト」

ターロットが私の周りをパタパタと飛びながら、勝ち誇ったように笑った。

「キュアオラクル！ このパートナー妖精を返してほしくば、大人しくこちらの要求に従うロト！」

「人質とるなんざ汚ねーぞ。それがプリキュアのやることかよ?！」

「問答無用で襲い掛かってきた奴に言われたくないロト！」

「オラクル、落ち着くルン！」

そう叫んだのは、私の手に握られている水晶玉妖精：クリルンだった。

「大丈夫。クリルンとしての私はとつても頑丈ルン。プリキュアが全力で投げつけても平気なのは、あなたが一番よく分かっているルン。だから心配すること無いルン！」

「そ、そうか。そうだったな」

「うーん、それはどうかな」

私は握った右拳を見せつけた。

「確かに壊すことは出来ないと思うし、そのつもりも無いけど……私が本気で殴ったら、多分、すごい痛いと思う」

「てめえ、この外道!?!」

「オラクル、落ち着くルン。この子にそんなことできる筈もないし、そもそもそんな力だつて——」

私が水晶玉を握る左手に力を込めると、クリルンが急に言葉も切った。

「……せ、前言撤回するルン。お、オラクル、大人しく言う事を聞いて欲しいルン。この子、マジだルン!？」

水晶の中で、クリルンが真つ青になりながらそう言った。

いや、その、ちよつとね、自分でも引くくらい力が入つちやつた。利き手じゃないのにこの握力なんだから、右手で本気出したら本当に握りつぶしちゃうかも。

プリキュアの力つてヤバいわ。加減に気を付けないと。

「わ、わかつた!」

オラクルが焦りの表情を浮かべながら言った。

「お前たちの要求に従う。話し合おう。な?」

「良かった。じゃあ、事情を聞かせてくれるかな」

「その前にクリルンを解放してやってくれ。大切な相棒を人質に取られたままじゃ、落ち着いて話もできやしねえ」

「うーん、それもそうだね」

「いやいや待つ口ト。信じちや駄目口ト」

「とは言っても、私もこういう悪役染みた真似を続けるのはあまり気乗りしないし」

私に迷いが生じ、視線をターロットに向けた、その瞬間をオラクルは見逃さなかった。

彼女は即座に大地を蹴り、私に向かって弾丸のように突っ込んできた。

「おっと」

けれど私も、その動きは予知済みだった。軽くステップを踏むように後方へ飛跳んでオラクルの間合いを外した――

——つもりだった。

予想外、というか予知外だったのは、左手に持っていたクリルンが、オラクルの突進と同時に、彼女へ向かって動き出したことだ。

クリルンの移動しようとする力はそこまで強くは無かったけれど、私に掴まれたまま移動しようとしたことで私はわずかに前方へ引つ張られた形となり、オラクルとの間合いを外しきれなかった。

オラクルが拳を下からすくい上げるように振るい、私の手からクリルンを弾き飛ばした。

「しまった!?!」

「クリルン!」

「オラクル!」

真上に打ち上げられたクリルンを、オラクルが同じく真上に跳躍して空中でキャッチする。

そのオラクルの目が、地上に居る私を見下ろし、睨みつけた。

「卑劣な真似をしやがって、許さねえぞ。倍返しだ！」

空中でオラクルがすかさず投擲姿勢を取った。

せつかく取り返した相棒をすぐさま投げるのは、ちよつとどうなの？ と内心で突っ込みつつ、私は咄嗟に横方向へ飛び退いた。

その直後、私が元居た場所に水晶玉：クリルンが高速螺旋回転しながら着弾し、地面を深くえぐり抜いた。

横跳びにそれを避けた私は、そのまま転がりながら距離を離す。そんな私めがけ、オラクルが空中から急降下してきた。

私は地面を転がりながら両腕を使って身体を勢いよく跳ね上げ、今度はそのままバク転に移り、オラクルの振り下ろしたかぎ爪攻撃を避ける。

私はさらにバク転を続けながら距離を離す。

そして、もういいだろと思ひ、着地してすぐに腰を落とし、拳を構えた。

だが――

「ほえい！」

私のすぐ目の前にオラクルが迫っていた。

息つく暇も、予知さえもする隙のない追撃だった。鋭利なナイフのような爪をもった

彼女の右手が、まるで槍の穂先のように指をそろえ、私に向けて一直線に突きこまれた。

その攻撃に、私の身体は無意識のうちにカウンターパンチを放っていた。

これは私自身の反射神経というより、プリキユアとしての防御反応かも知れない。私の意思が関与する間もなく、私は首を傾げて、髪の毛一本の差でオラクルの抜き手を避けると同時に、腰だめに構えていた私の右手が放たれ、オラクルの顔面を捉えていた。

「ぐげえ!」

「やばっ、やっちゃった!」

私のパンチ力と、オラクル自身の突進力が顔面の一点に集中したことで、オラクルは大きく背後に仰け反った。それどころかそのまま後方へ空中一回転までした挙句、うつぶせになって落下し、倒れ伏した。

「わ!? わ!? ごめん! 大丈夫!? 生きてる!」

慌ててオラクルのそばにしやがみ込もうとした私だったが、足元から何かが急に飛び上がり、私の顔面に直撃した。

「あ、痛ったあ」

「オラクルから離れるルン!」

私の顔にぶつかってきたのはクルリンだった。彼女(?)は私を体当たりで遠ざけた後、倒れ伏したオラクルのそばに着地した。

「オラクル！ オラクル!? 返事をするルン!?」

「ね、ねえ、本当に大丈夫？ 死んでないよね？」

「生きてるルン！ 勝手に殺さないでルン！」

「あ、うん、ごめんなさい。でも生きててよかった」

本気で胸を撫で下ろした私の前で、クリルンが「こうなったら非常手段ルン」と呟いたのが聞こえた。

クリルンは気絶したままのオラクルの顔のすぐそばに寄ると、突然、その身を激しく輝かせた。

「ほえ!？」

その強い光に一瞬、目がくらむ。

光が収まり、眩んだ視界が元通りになったとき、倒れていたはずのオラクルが既に立ち上がっていた。

オラクルは水晶玉を左手に持ちながら、右手で自分の鼻先をさすった。

「あ痛たた……本当にすんごく痛い!？」

オラクルが鼻を押さえながら、涙目で私を睨む。

「えっと、ごめんね。鼻の骨とか折れてない？」

「それは大丈夫だと思おうわ」

オラクルはため息を吐きながら、手元の水晶玉に目を落としたり。

「クルリンも気絶したままだし、今日のところはこれで勘弁してあげるわ」

「クルリン？ クリリン？」

「どつちでもいいでしょ。じゃあね、ルカナ。また会いましょう」

オラクルは鼻声涙声で捨て台詞を吐くと、さつと身を翻して森の奥へと消えて行ったのだった。

「もー、ミクつち、どこに行つてたのさ。アタシ心配したんだかね」

墓地公園に戻ると、星華ちゃんからさつそく叱られてしまった。

ネガテバー三体を相手にかなりドンパチをやらかしたものの、すべて浄化に成功したことで、戦いに関する事実は痕跡ごと人々の記憶から消えていた。残された現実は、私がおひとりで迷子になっていたという不名誉な事実だけだった。

まあそれも星華ちゃんが誤魔化してくれたおかげで、教師を含めて他の誰にもバレてないらしいけど。

「ありがとう、星華ちゃん。……ところで、珠代ちゃんは？」

そう、そもそも私は、居なくなった珠代ちゃんを探していたのだ。

「私ならここに居るわよ」

「ほえ？」

その声に振り返ると、そこに珠代ちゃんが居た。

ただ、その口元には目元近くまで覆う大きな白いマスクで覆われていた。

「珠代ちゃん、そのマスクどうしたの？」

「花粉症が悪化しちゃったのよ。今日は平気だと思ってたけど、やっぱり途中で我慢できなくなっちゃったから、先生に許可をもらって近くのコンビニへ買いに行ってたの。でも、焦ってたから二人には言い忘れてたわ。ごめんね」

珠代ちゃんは鼻声涙声でそう言って、私たちに手を合わせて謝罪したのだった。

「どう思うロト？」

「どうって、なんのこと？」

「観月 珠代って子のことロト」

当然、という風にターロットがそう訊いてきたのは、実習を終えて自宅に帰宅してからのことだった。

私はキツチンに立って夕飯の支度を始めながら、ターロットに訊き返した。

「珠代ちゃんがどうかしたの？」

「あの子、プリキュアかも知れないロト」

「ほえ？ 珠代ちゃんが？ どうして？」

私は再びターロットに訊き返ししながら、冷蔵庫を開けて中を確かめた。今夜のメニューは何にしようかな。

「観月 珠代が居なくなつてからネガテバーが現れたロト。そしてターロットたちが戻ってきてから姿を現したロト。タイミングはあつてるロト」

「それだけだと、ちよつと強引じゃない？」

人参、ジャガイモ、豚肉……うーん、肉じやがじやかな。それとハウレンソウのお浸し。メインのおかずにもう一つ二つは欲しいなあ。

「マスクをしてたロト」

「花粉症って言つてたし」

「鼻を殴られた痕を隠すためロト」

「つまり珠代ちゃんがオラクルだつて、言いたいんだね。でも、それは決めつけでしかな

「よ、よ」

よし、豚肉が少し多めにあるし、豚野菜炒めにしよう。

「信じてくれない口トか？」

「珠代ちゃんの言い分を否定する証拠もないからね。それと、オラクルはあの性格について、いても気になることがあるし」

「観月 珠代は確かにオラクルほど好戦的じゃ無さそう口ト。でもあのプリキュア、明らかに途中から性格が変わっていた口ト。まるで二重人格口ト」

「二重人格とは、ちよつと違うと思うの」
「どういふこと口ト？」

私は夕飯の材料をキッチンに並べながら言った。

「“クルリン”と“クリルン”。オラクルは性格が変わる前後で、パートナーのことをそう呼び変えていた。それに、あのパートナーも“クルリン”と“クリルン”じゃ、性格が変わっていたみたいだった」

「それは……確かにそんな気もする口ト。だとすれば、まさかオラクルは、パートナーと人格を入れ替えているってこと口トか？」

「確証はないけれどね」

「だったら、観月 珠代がオラクルでもおかしくない口ト」

「確証も無いのに友達を疑いたくないよ。そもそも、性格がコロコロと入れ替わるなら、誰だつてオラクルの可能性があるってことだし」

「その言葉を聞けて安心したロト」

「どういうこと？」

「ミクも本心では観月　珠代を含めて周囲の全員を疑っているってことロト。油断してないようでも何よりロト」

「それ、褒めてるの？」

まるで人間不信の塊みたいな扱いじゃないか、失礼な。私はちゃんと友達を信頼している。でも、それはそれとして疑いは晴らしておくべきだろう。

私はカレンダーに目を向けた。

明日から大型連休だ。ウチは生憎、父さんが仕事で休めないなので家族で出かける予定は特にない。

珠代ちゃんも連休はお店の稼ぎ時だといっているので、実家のお店の手伝いだそうだ。そして星華ちゃんは天文部の文化祭の出し物であるプラネタリウムの制作に取り掛かるらしい。

明日の夜、私と珠代ちゃんはその手伝いのために星華ちゃんの自宅にお泊りすることになった。

ターロットが、カレンダーを眺めている私を見て、その表紙の中でニヤリと笑みを浮かべた。

「パジャマパーティー。これはチャンスロト」

「無用な疑いを晴らすためだからね？」

「ミクのそういうところ、好きロトよ」

ターロットが見透かしたようにフフと笑った。この腹黒妖精め。これじゃまるで私たちが悪役みたいじゃないか。

私はやれやれと溜め息まじりで、フライパンで野菜を炒め始めたのだった。

連休初日の夜、私は父さんと夕食を済ませた後、星華ちゃんの自宅があるマンションの前へと来ていた。

「ほえ〜」

私は目の前の建物を見上げ、思わず感嘆の声を漏らしてしまった。駅前近くという好立地にある高級マンションだ。地上十五階。一階には駐車場と、管理事務所付きの広いエントランスがあった。

星華ちゃんの自宅は八階の角部屋だそうだ。どのへんかな。と、歩道からマンションを見上げて、探してみると、まさにその八階の角部屋にあるベランダから外を見下ろしている星華ちゃんと目が合った。

やつほー、星華ちゃんーん。と、私がベランダに向かって手を振る。けれど星華ちゃんは手を振り返してはくれず、それどころかすぐに部屋の中へ引っ込んでしまった。

あらく？　なんか不愛想じゃない？

その態度にちよつと不快感、そして疑念を抱きながら、私はエントランス入口の自動扉前に立ち、インターホンのキーパネルで部屋番号をプッシュした。

数秒ほど待つと、星華ちゃんの声がインターホン越しに聞こえてきた。

『ミクっち、いらつしやーい。ちよつとエントランスで待つて。いまからそつちに迎えに行くから』

どうやらカメラが付いていたようだ。私が名乗るまでもなく星華ちゃんはすぐにインターホンを切り、同時に自動扉が開いた。

星華ちゃんの声の調子はいつも通り、明るくて、そして人懐っこい感じだった。じゃあ、さっきの態度は何だろう？　単に私の思い違いかな？

エントランスは管理事務所に通じるカウンターや、待合客用の大きなソファーなんかがあつて、まるでホテルのロビーのようだった。そこで待つこと数分、エレベーターの

扉が開いて、星華ちゃんが姿を現した。

「ミクっちお待ちせう。そんなでもって、いらっしやーい」

「おじやましまーす。しっかしすごいマンションだね。私んちのアパートなら、呼び鈴鳴らしてドア開けるまで三秒だわ」

「にはは、待たせちやってごめんごめん。エレベーターが一基、故障しててさ。そのせいで残るエレベーターに利用が集中しちやって、なかなか順番まわって来なかつたのよ」

そんな風にあ笑いながら謝る星華ちゃんの様子は、いつも通りだった。やっぱりベランダのあの態度は、私の思い過ぎだったようだ。

「別に気にしてないからいいよ。それより立派なマンションだよ。星華ちゃんのご両親って、会社の経営者でもされているの？」

「うんにゃ、パパはしがないサラリーマンよ。ママは近所のスーパーでパートタイマーやってる」

「どうみてもお金持ちしか住んで無さそうな高級マンションなのにな？」

「お爺ちゃんか昔、農家やっててね。あちこちにいくつか畑を持つてたのよ。それが新興住宅地とか高速道路とか、色んな土地開発にドンピシャで重なったみたいでさ。畑と、ついでに古い家ごと実家の土地も残らず売っぱらった結果がこのマンションって訳」

「ほえ、すつこい」

「お爺ちゃん、相当ごねてたらしいけどね。先祖伝来の土地を全部手放して、代わりに手に入れたのがこのマンションのワンフロアぽっちや割に合わないって、死ぬまでぼやいていたらしいわ」

「ふう〜ん……ん？ ワンフロア？」

「ああ、ここの8階、全部あたしんちなのよ。まあ一部屋以外は、みんな賃貸に回してるけど」

「ほえ〜……」

エレベーターに乗り、部屋まで移動する間に、星華ちゃんはそう話してくれた。

「はい、ここだよ。改めていらっしやーい」

「改めてお邪魔します。…って、誰も居ないの？」

「パパは出張。ママはマンションのママ友たちと一緒に旅行。他には……まあ気にしないでいいよ。今日はアタシたちだけだから、気兼ねなくパーっとやろう、パーっと」
玄関から長い廊下を経てリビングへ。星華ちゃんは自宅は一室だけと言っていたけど、実際には隣室の壁を撤廃して、二室分を一部屋にリフォームしていた。なので元から広い部屋がさらに広い。

こりや文字通り、住んでる世界が違うわ。とその豪華な部屋の様子に圧倒されながら

星華ちゃんの後を着いて歩き、彼女の部屋に案内された。

「ようこそ、我が城へ！」

「ひつろーい」

私の六畳一間（押し入れ含む）な部屋と比べて二倍以上の広さがある。大きなベッドに立派な勉強机、そして私よりも背の高い本棚にはファッション雑誌や漫画の他に、星座や宇宙に関する書籍がズラリと並んでいた。

「星華ちゃん、本当に星が好きなんだね」

「名前に星が付いているから、幼いころからなんとなく好きでさ」

「じゃあ家族そろって好きなの？」

「これまた、うんにや、なのよ。あたし、本来は『聖華』って名付けられるはずだったらいいんだけど」

セイは聖母マリアのセイだよ、と星華ちゃんは補足してくれた。

「それも良い名前だね」

「でしょ？ でも画数が縁起悪かったらしくてさ。だから星の字になったんだってさ」

ばかばかしいよねー、と星華ちゃんは明るく笑うが、その当の本人の書棚には星占いの本がたくさん並んでいたりする。それに毎朝、彼女と顔を合わせるたびにテレビの星占いの話題になるのは、もはや挨拶代わりだった。

そのことを突っ込むと、「そりゃー、星座が好きだからに決まってるでしょ」と軽く流された。

「別に占いが好きって訳じゃなくて、星座占いだから気にしてるだけだしね」

星華ちゃんはそう言って笑いながら、大きな本棚に目を向けた。私もつられて目を向け、そしてそこに飾ってあるモノを見つけた。

それは金属氏の円盤だった。いくつもの同心円が刻まれた円形の金属板に、時計の長針のような針が付いている。

「星華ちゃん、これ？」

「ああ、アストロラーベっていうんだ。珍しいでしょ」

「アストロ……」

「古い時代の星座盤だよ。なかなかお洒落なインテリアでしょ。まあレプリカなんだけだよ」

この針の部分をこっちのメモリに併せて……と星華ちゃんが説明してくれようとしたところで、部屋に來客を告げるインターホンが鳴り響いた。

「おっ」

星華ちゃんがリビングへ移動し、そして、

「ミクっちゅ、珠代っちが来たってさ。あたし迎えに行ってくるから、ちょっと待ってて」

「うん、わかった」

星華ちゃんが玄関から出て行ったのを確認し、私はすぐに本棚に飾ってあるアストロラーベににじり寄った。

「ターロット、これ見て」

「…あいつにそっくりロト」

私のカバンからターロットが飛び出し、本棚の傍を浮かびながらしげしげと観察する。

「でも、これは何も感じないロト。妖精じゃないロト」

「そうなんだ。……ちよつと、ホツとした」

「そうは言っても、こんなニツチなアンティークを持っている女子中学生なんて、普通は居ないロト」

「ニツチな趣味がたまたま一致しただけでしょ?」

「それでも、キュアストロジーに繋がる何かはあるかもしれないロト。気には留めておくべきロト」

「……………」

確かに同意の気持ちはあるけれど、それはあまり明言したくなくて、私は黙ったまま曖昧に頷くとどめた。

「どうやら、私もあまりターロットのことを言えた口じやなさそうだ。

そうこうしている内に星華ちゃんが珠代ちゃんを連れて部屋に戻ってきた。

「ミクちゃん遅れてごめんね。お詫びに特盛りフライドポテトの差し入れよ」

両手には観月バーガーのロゴがプリントされた大きめの紙袋。それを掲げる珠代ちゃんの顔半分は、やっぱり白マスクで覆われていた。

「へくち」

マスクの下で小さく可愛いくしゃみ。女子力ってこういうところにも現れてくるんだなあ。

続いてリビングでガサゴソやっていた星華ちゃんも部屋に戻ってきた。ぶつといてコーラのペットボトルを両手で抱えて。

「にはは、フライドポテトにはやっぱりコーラっしょ」

「ねえ星華ちゃん、そのボトル見たこと無いくらいでつかいんだけど？」

「そりやまあ普通のスーパージヤ売ってないからね。パパの知り合いが基地に勤めててさ、そのの売店で買ってきてもらったんだ」

「ちなみにそれで何リットルあるの？」

「ん、0.5ガロンって書いてあるから、1.8リットルくらいかな」

「ほええ…アメリカンサイズ恐るべし…」

「基地の人たちにしたたら、これでもまだ少ないほうだよね」

と、珠代ちゃんも平然として言う。その珠代バーガーのフライドポテトも特盛りだけあつて、かなりの量だ。

「ねえ、これ、総力ロリー凄いいことにならない？」

「ええ、そりやもう」

と、珠代ちゃんは頷いた。

でもさミクつち。と、星華ちゃん。

「せっかくのパジャマパーティーじゃん。今夜ばかりは背徳の味に溺れたっていいでしょ？」

二人が堕天使のような笑みを浮かべながら——珠代ちゃんはマスク越しだけど——部屋のテーブルにポテトとコーラをドスンと置いた。音の重みが半端ないなコレ。

それから十数分後。時刻は既に夜九時過ぎ。

私は炭水化物と油と甘味料の暴虐の宴に為す術もなく籠絡され、友人二人と共にカロリー摂取という名の快樂の虜になっていた。

観月ブランドのフライドポテトは売れ残りで冷め切っているシロモノのはずなのに、油のべとつき感も少なくサクサクとした食感を残していた。

「いい食材といい油。この二つが揃っていれば、誰が揚げても八割がたは美味しいのよ」

と、珠代ちゃん。

残りの二割は？ と訊くと「もちろん、愛」とドヤ顔で答えてくれた。マスクで隠れてるけど。

珠代ちゃんがポテトを食べるたびに、私はそれとなく彼女の顔を観察しようとしたが、珠代ちゃんはマスクを外したり、顎の下にズラしたりしなかった。

珠代ちゃんはマスクの下端だけをわずかに前へ引つ張って、その隙間からポテトを一本ずつ上品に食べていた。星華ちゃんなんて二三本まとめて大口開けて放り込んでいくというのに、えらい違いだわ。

飲み物にしてもストローで同じようにマスクの下から啜えて飲んでいたので、相変わらず素颜の様子——特に鼻の頭の状態——はよく分からなかった。ちなみに星華ちゃんはデカイマグカップになみなみと注いだコーラを一気飲みして派手にゲップをかまっていた。女子力どころの話じゃないわ、これ。

「星華ちゃん、豪快過ぎるよ…」

「にはは、女の子しか居ないし、いーじゃん、いーじゃん」

「星華の中はオッサンだからね」

と、珠代ちゃんも呆れ気味に言った。

「お、言ったな珠代っち。そんな生意気なJCは、オジサンがセクハラしちゃうぞ」

星華ちゃんが指をワキワキさせながら珠代ちゃんのお尻に手を伸ばす。けれどその手はピシリとはたかれた。

「あ痛」

「そんな油まみれの手で触らないでよ」

「ほほう、じゃ綺麗な手なら触っていいんだ？」

星華ちゃんはそう言って、自分の指をべろべろ。

「こら、そんな指の拭き方しないの！」

珠代ちゃんが近くのティッシュを数枚抜き取って星華ちゃんに投げつける。星華ちゃんがそれをキャッチしながら「にはは」と笑った。

「ところで」

と私は口を挟んだ。

「星華ちゃん、今夜はプラネタリウム作るんでしょ？ 私たちは何を手伝えばいいの？」

「ん？ ああ、それならもう手伝ってもらってるから、このままでいいよ」

「どういうこと？」

フライドポテト食べてコーラ飲んでるだけなんです。

「こうしておしゃべりすることで作業に疲れた私のリフレッシュの手伝いになってるってことよ」

「要するに、手伝いを口実にパジャマパーティーしたかっただけ、ってこと?」
「そーゆーこと」

乾杯イエーイ。と、よく分からないノリで星華ちゃんがマグカップを掲げたので、私も珠代ちゃんも同じくカップを掲げて乾杯イエーイ。

女三人寄れば姦しい。学校での話題であーだこーだ。ワイドショーのゴシップであーだこーだ。アイドルの話題であーだこーだ。と、益体もない話で時間を忘れて盛り上がった。

0・5ガロンのコーラがやつと0・25ガロンまで減ったころ、私はブルツと小さく身震いして腰を浮かせた。

「ミクつち、どしたん?」

「ちよつと、お花を摘みに」

「花あ? 何でまた急に?」

首を傾げた星華ちゃんに代わり、珠代ちゃんが、「玄関に向かう廊下の真ん中のドアよ」と教えてくれた。

「ああ、トイレか」

「男性なら、雉を撃ち行く」ね。星華もこれくらいの暗喩は覚えておいたほうがいいわよ」

「何でさ。そのまま直接言えばいいじゃん。言い換える必要がどこにあるのさ」

「決まってるでしょ。清潔感が出るからよ」

「清潔感？」

「ウチも飲食店だからね。商品を待っているお客さんに聞かれるかもしれないのに、トイレなんて口に出せないでしょ」

「なあるほど。でも飲食業界の珠代つちはともかく、ミクつちが言い換える必要は無い？」

「女子力向上を目指して珠代ちゃんを真似てみました」

「む」

「あら、ミクちゃんありがと。お礼に残ったフライドポテト全部上げちゃう」

「その気持ちだけ受け取っておくね」

私は立ち上がりながら足元のターロットをさりげなく拾い上げ、部屋を出た。

珠代ちゃんから教わった通り廊下を歩いてトイレに入り、ドアを閉めた途端、ターロットが私にささやきかけてきた。

「調査がぜんぜん進んでない口ト」

「仕方ないよ。あなたがプリキュアなんですか？」 って直接問いかける訳にもいかな

いっや」

「花粉症なのに観月 珠代は一度しかくしゃみしてない口ト」

「このマンション気密性いいよね。エアコンも最新式だし、さつきりビングを通つたとき大きな空気清浄機まで見かけたしき。ウチのアパートのおんぼろエアコンとは比べようも無いわ」

トイレも広いし奇麗だよね、と小さく呟きながら、私はドアを少しだけ開けて、その隙間からターロットを廊下に出した。

「何する口ト？」

「トイレですることなんて決まってるでしょ」

「ガチだった口トか。小口ト？ 大口ト？」

「それ訊く？ サイテー。：耳、塞いでちようだいね」

「下らん心配しなくても、そんなもん聞きたくもない口ト。さつきと済ませる口ト」

私は扉を再度閉めてロックする。用を足す前に横の壁を見ると、音符マークのボタンがあつたので押してみた。すると個室に川のせせらぎのようなヒーリングな調べが流れだした。

あら素敵。こんな機能、ウチのトイレにも欲しいな。あの安アパート、壁が薄いから隣室の排水音が丸聴こえなのよね。

そんなことを考えつつスッキリしたところで個室を出て、廊下に置いたターロットを

拾い上げる。

「お待たせ」

「ミク、今さつき日比野 星華が外に出て行ったロト」

「星華ちゃんが？ 急にどうしたんだろう？」

疑問に思ったその直後、廊下の先から星華ちゃんの大きな笑い声が漏れ聞こえてきた。

「部屋に居るじゃない。ターロットの嘘つき」

「嘘じゃないロト。確かにあれは星華だったロト。あっちの部屋から現れて、そのまま外へ出て行ったロト！」

あっち、とはリビングや星華ちゃんの自室とは反対方向の、玄関からすぐ傍にある部屋のことだった。

「じゃあ、別人？」

「同じ顔、同じ服だったロト」

服まで同じというのは確かに引っかかる。私は廊下を玄関側へ進み、例の部屋の前に立った。

閉じられたドアに顔を寄せ、耳をそばだてたが、中からは物音ひとつしなかった。試しに軽くノックしてみたが、やはり反応なし。どうやら無人のようだ。

ドアノブに手をかけて回してみたが、施錠されていた。

「自宅なのにロックされてるとか、怪しき満点だロト」

「私室なら鍵くらいかけるよ」

ウチには無いけれど。それどころか扉や窓の立て付けが悪いのできちんと閉まりさえしない。それにウチの父さんは家族間のプライベートの確保どころかその概念さえいい加減な人なので、そんな部屋でもまったく気にする様子が無いから困る。

立て付けについてはアパートの管理人さんの問題だからともかく、せめてトイレにヒーリングなせせらぎぐらい欲しいもんだ。いや、それ以前にウォシュレットにして欲しい。

「ミク、何を考えているロト?」

「我が家の切実なトイレ事情について」

「マジで何を考えてんだロト。そんなことより、星華の分身を探しに行くべきだロト」

「もしかして、その分身だか何だかがプリキュア…ストロジャーかも知れないって疑ってるの?」

「星座盤が部屋に飾ってあったことも考えれば、可能性は高いロト」

「分身が変身するプリキュアとはね」

私は思わず肩をすくめた。仮定に仮定を重ねて疑い出せばキリがない。

「分身の正体について一番可能性が高いのは、星華ちゃんの家族のだけか、ってことだよ。お姉さんか、妹かも知れない」

「今夜は、家族は居ないと言ってた口ト」

「両親は留守と言ってたけど、何か言いかけていたし、他に兄弟姉妹が残っていたのかも」

「本人そのものだった口ト」

「じゃあ双子かもね」

「他に家族が居ると聞いたことがある口トか？」

「無いけど、本人に聞けば済む話だよ」

私はその部屋の前から踵を返した。

星華ちゃんの部屋に戻るためにリビングの方へ廊下を進むと、その先から珠代ちゃんが姿を現した。

「あ、ミクちゃん」

「珠代ちゃんもお花摘み？」

「うふふ、違うわよ。ちよつと甘いものが欲しくなったから、コンビニへお買い物に行ってくるわ」

「ほええ、あれだけカロリー摂取しておいて、さらに甘味を倍プッシュしちゃうの？」

「ふふふ、狂気の沙汰ほど面白い、つてね。ミクちゃんの分も買ってきてあげるから、一緒に食べましょう」

「あらやだ、悪魔のお誘いだわ」

「何が欲しい？」

「じゃあ栗羊羹で」

「渋いわね」

それじゃ行ってくるわ、と言い残して出て行った珠代ちゃんを見送り、私は星華ちゃんの部屋に戻った。

「ミクっちお帰り。ウチの花畑の使い心地はどうだった？」

「フローラルな香りとヒーリングなせせらぎに大満足だったよ。ウチもお父さんのボーンス出たら最新式のトイレをねだろうかな」

「風呂、トイレ、キッチンはこのマンションを購入した時に、ママが一番こだわってりフォームしたところだからね。パパは追加工事するくらいなら新車を買いたいって言うってたけれど、ママが押し切った」

「ママさんが正しいと私は思う」

「あたしはパパ派だったんよ。めっちゃカッコいいスポーツカーだったから、めっちゃ乗りたかったんだけどな」

「星華ちゃんって、中身はけっこう男の子寄りだよね」

「珠代たちからもオツサンオツサン言われてるからね。おかげでさ、男と女の価値観の違いってやつがよく分かるのよ」

「例えば？」

「女は家の中とか身近な生活に関わることばかりを気にして、それ以外のことには興味が無い！」

「うわ、いきなり極論。いかも男視点に立ってるし」

「逆に男は家の中にはあんまり興味ない感じ。あつても対象が違うっていうかさ。部屋のインテリアにしても『男の部屋』ってコンセプトだと、生活感より趣味を前面に押し出してる感じがすんのよね」

「それってつまり、この部屋のこと？」

「そ。珠代たちからも、よく『あんたの部屋は男子みたいだ』って言われるよ。アキラたちの部屋そっくりだったさ」

「ほえ〜……え？」

「ということとは、珠代ちゃんはアキラ君の私室の様子をよく知っているという事だ。いや、まあ幼馴染だからってこともあるだろうけど。」

けれど、それでも私なんかは、年ごろの異性が自分の部屋に出入りすることを想像す

るだけで、ちよつと落ち着かない気分になつてしまふ。正直、父さんでさえ部屋にはあまり入つて欲しくないというのに。

私は微妙な表情をしていたのだから。星華ちゃんが私の顔を見てニヤ／＼と笑つた。

「あの二人、お互いの部屋をけつこう頻繁に行き来してつぽいよ」

「それもビツクリだけど、珠代ちゃんがその事実を特に隠す気も無さそうなのが、もつとビツクリだよ」

「それだよね。珠代つちもアキラつちも、それが当たり前みたいな態度してるから、あたしもついつい、それが普通なのかなつて思つちやうときがあ？んのよ。でも冷静に考へたら赤の他人つしよ？ 普通、意識するつしよ？ まして珠代つち美人だし、大人つぽいし。それにアキラつちも、女子の間じゃイケメンつてそこそこ評判だし」

「アキラくんは、珠代ちゃんのことをどう思つてゐるのかな？」

「わからん。珠代つちのことは間違いなく特別扱いしてるけど、異性として見てゐるかどうかは、本当によくわからん」

「確かにね。異性として見てたら、トイレの最中に大声で呼んだりしないよね」

「言えてるわ。あれだけお互いあけすけにものを言い合えるつてのは、彼氏彼女の関係とは違うわな」

「身内、家族、兄弟姉妹みたいな感じなのかな？」

「兄弟姉妹、ねえ……」

あたしなら会話さえしないけど。と、星華ちゃんがポツリと呟いた。ひどく小さい独り言だったのと、言ってる意味が分からなかったこともあって、私はそれに対して反応が遅れた。

その間に星華ちゃんはすぐに元の調子で「それにしてもさ」と話を進めだした。

「アキラ、あれでも昔は、もうちつと素直だったらしいんよ。野球一筋の熱血スポーツ少年でさ。小学生の頃はリトルリーグでもトップクラスのエースピッチャーとして有名だったんだってさ」

「そういえば珠代ちゃんも、そんなことを言ってた気がする。でも、今はもう野球やってないよね。どうしてやめちゃったの？」

「さあ、知らない。珠代っちは知ってるっぽいけど、他人にはあまり話したくない感じだし……」

星華ちゃんはふと遠い目をして、ため息を吐きながら、続けた。

「……珠代っち、ああみえてけっこう悩んでるっぽい雰囲気あるんだよね。だから、こういう機会に色々つぶつちやけてくれたら、少しは力になれるかも知れないんだけどさ」

「そっか……」

今夜のパジャマパーティーには、そんな意図も含まれていたのだと、私は知った。

それでいて珠代ちゃんに直接その話題を振らなかつたのは、星華ちゃんの氣遣いだらう。相談の場は用意するけれど、あくまで自分から話してくれるのを待つスタンスだ。

「星華ちゃんは優しいんだね」

「ん？ 急になにさミクつち。褒めてもなんも出ないよ。ニハハ…」

「ふふ——痛つ!?!」

正座していた私の足の小指に、何か固いモノがぶつかって思わず声をあげてしまった。足も動かしてないのに、なんで急に？

足元に目を向けると、そこに一冊の本がページを拡げて転がっていた。

《いつまで関係のないことをくつちやべってる口ト！ さっさと本題に入る口ト！

》

あー、はいはい、星華ちゃんによく似た姉妹がいるかどうかの話ね。別に忘れていた訳じゃないけど、藪から棒に訊くのもアレだし、話の流れでタイミングを見計らつたのよ。

「ミクつち、どしたん？」

「ほえ!?! あ、足つつちやつて。イタタ……」

足をわざとらしく曲げ伸ばししてみせながら、私は「そういえば」と話を変えた。

「星華ちゃんって、お姉さんとか居るの？」

ちよつと強引だけど、ターロットも焦れてるし仕方ない。

私の質問に、星華ちゃんは怪訝そうに顔をしかめた。

「ミクつち、どうして急にそんなこと訊くのさ…?」

「ほえ? あー、えつと…それはね…」

私はつい口ごもってしまった。なぜなら、星華ちゃんの機嫌が目に見えて悪化したからだ。

さつきまで笑っていたというのに、そこから一瞬で雰囲気様が変わりってしまった。私を見る目の冷たさが尋常じゃない。

これは単に兄弟姉妹が居る居ないの問題ではなく、その話題そのものに触れて欲しくない者の反応だ。どうやら私は、思いもかけず星華ちゃんの地雷を踏んでしまったらしい。

「その…なんていうか…」

なんとなく、という答えでは済まされないような気がして、私は他の言い訳を必死に探そうとした。

「ミクつち、さつきトイレへ行つたとき、もしかして何か見た?」

「ほえ!!? あ、いや、えと!!?」

「見たんだね?」

私の目を覗き込むように睨みながら、星華ちゃんはまるで尋問のように訊いてきた。怖い、怖いよ星華ちゃん!

「ミクっち、正直に答えて」

「お、怒らない?」

「…返答次第では」

星華ちゃんから低い声で無情な答えを告げられて、私は目の前が真っ暗になった。

この場合の「真っ暗」というのは気分的な比喻ではあるが、この時ばかりは、物理的にも、文字通り「真っ暗」になっていた。

そう、部屋の明かりが突然消えたのだ。停電だった。

明かりが消える直前、耳をつんざくような爆発音が外で響き渡り、ガラス窓をビリビリと震わせた。

「ほえ!?!」

「あわあつ!?! な、なに? なに!?!」

部屋は暗くなったが、窓の外は赤い光で照らされ、街の景色が揺らめくようにぼんやりと浮き上がっていた。

この赤い光は、街灯の明かりじゃない。見える範囲ではあるが、外も同じように停電している様だ。

私は窓を開けてベランダに出ると、手すりから身を乗り出すようにして外を眺め渡した。

外に出た途端に、火事だと分かった。ガソリンが燃える匂いが外に充満していた。そして耳には、車のクラクションや、人々の騒ぎ声、何かがバチバチと爆ぜる音、そして

「テエエエバアアア!!!」

——ベランダから見えたのは、佐世浦駅の近くにあるコンビニの駐車場で咆哮を上げる、小山のような黒い塊の姿だった。

その大きさは5〜6メートルくらいだろうか。手も足も無い真っ黒な塊の中心に、目と口のような三つの光点が鈍く輝いていた。

ネガテバーはコンビニの駐車場から這うようにゆっくりと移動していた。きつとその時に破壊されたのだろう、駐車場に停まっている自動車が二台ほど、ひしゃげた状態で激しく炎上していた。

さつきの爆発音は、きつとこの自動車が破壊されたときの音だろう。そして、その爆発の影響か、近くの電信柱も倒壊し、電線が切断されていた。停電の原因はこれだ。

私に続いて星華ちゃんもベランダに出てきて、ネガテバーの姿を見つけて目をむいた。

「な、なにさ、あの怪物!? え、嘘、マジの現実!?!」

驚きながらも動画を撮ろうというのだろう、スマホをいじり出した星華ちゃんに、私は問いかけた。

「ねえ、珠代ちゃんが買い出しに行ったコンビニって、もしかしてあそこなの?」

「へ…ああ! あわあ!?! そうだ、そうだよ。珠代つちきつとあのコンビニだよ! どうしよう、やばい、やばいよ!?!」

星華ちゃんはスマホのカメラアプリを閉じ、通話に切り替えて珠代ちゃんのスマホに電話をかけ始めた。

だが、着信音は部屋の中から聴こえてきた。

「珠代つちスマホ部屋に置きっぱなしだし!?!」

「ターロット!」

「ミク!」

私の声にターロットがページをはためかせながらベランダに飛び出してきた。

「ごめんロト! 昨日の今日で出てくるとは思わなかったから、油断してたロト!」

「謝罪しなくてもいいから、すぐに変身するよ!」

私はサインコイン取り出し、指で宙高く弾き上げた。放物線を描くようにベランダの外に飛び出したコインをターロットが空中でキャッチする。

私はベランダで目を向いたまま絶句している星華ちゃんを横目に、ベランダの縁に足をかけて、空中へ身を躍らせた。

地上八階、約27メートルの高さに飛び出した私の身体を浮遊感が包み込む。

「プリキュア、フォーチュンセレクト！」

夜空に向かって伸ばした手の中に、ターロットが飛び込んでくる。

「オーブン！」

全身を光に包まれながら、私は重力に引かれるままに自由落下し、地上へ着地した。

黒地にピンクのフリルが付いたゴシック風のミニスカート姿と、それを覆うように羽織ったルビーの光沢をもつ赤い色のマント。赤く染まった髪。

そう、これがプリキュアとしての私。

「未来へ歩む、明日よりの使者。キュアルカナ！」

突然、空から降りてきた私の姿に、マンシヨン周辺に集まっていた野次馬たちの視線が一斉に集まった。

……わ、ちよつと恥ずかしいかも。

—
(後編に続く)
—

第4話・三人一緒♪ わくわくパジャマパーティー（後編）

「未来へ歩む、明日よりの使者。キュアルカナ！」

変身し、マンションから飛び降りて着地した私の姿に、コンビニでの爆発や停電騒ぎで外に出ていた大勢の野次馬たちの視線が一斉に集まった。

そんな状況で名乗りを上げたものだから、みんな訳も分からずポカーンとしか表情を浮かべていた。おまけにスマホを向けている人もたくさん居た

うわー、これ、かなり恥ずかしい。

じゃあなんでわざわざ名乗りを上げたんだって話だけど、変身したら無意識に出ちゃうんだから仕方ない。以前、ターロツトにこの件について質問してみたら「そういう仕様だロト」って答えが返ってきた。そうか、なら仕方ない。

仕様と言えば、もうひとつプリキュアならではの能力があった。

「思いつきり目立ってるけど、ネガテバーを浄化すればみんな忘れるんだよね？」

「スマホのデータも消えるロト。だから気にせず、全力で行くロト！」

「わかった！」

私は地面を蹴り、コンビニ駐車場に居るネガティブめがけ突撃した。ネガティブへの距離を詰めながら三枚のカードを一気に引き抜く。

「THE MAGICIAN（魔術師）」の逆位置、「THE EMPRESS（女帝）」の正位置、「THE HIROPHANT（法王）」の正位置。

暗示は「自信の喪失」、「母性」、「慈しみの心」

カードを光に変えて拳に宿したその刹那の狭間に、私はタロットカードがもたらしたヴィジョンを垣間見た。

幼い少年と、その幼馴染の少女。少年は野球のユニフォームに身を包み、少女とキヤッチボールをしながら将来の夢を口にする。

——俺、高校生になったらピッチャーになって甲子園に行くんだ。絶対にだ！

——ふーん。

——反応うすいな!? お前マネージャーだろ！

——高校まで一緒に行くなんて決めないでよ。あんたに合わせてたら底辺高校間違いないでしょ。

——じゃあどうするんだよ。お前が居なかつたら誰が俺の面倒を見るんだよ？

——何を当然みたいな顔して依存してんのよ。私はあんたの母親か!?

——幼馴染なんだから似たようなもんだろ。

——いっぺん辞書を引いて意味を調べてきなさい。少なくとも私の持つてる辞書にはそんな意味は含まれてない。

野球ボールが行き交うたびに、二人の言葉もキャッチボールの様に互いの間を行き来する。

ヴィジョンに視える二人の姿はどこか曖昧で、それでも不思議と見覚えがある気がした。けれど、それが誰だったかを思い出す前に、私はネガテバーに対して拳撃の間合いにまで踏み込んでいた。

私はヴィジョンを脳裏から振り払い、腰だめに構えた拳を打ち放った。

ネガテバーが目のように輝く光点を私に向けたが、それが何かをしようとするよりも早く、私の拳がその身に炸裂する。

「プリキュア、イレイザーナックル！」

黒い塊の表面に拳と光が激突し、その衝撃がネガテバーの黒い表面を波紋となつて震わせ、風船のように膨らませた。

限界まで膨らみ切ったネガテバーが、周囲に黒い破片を飛び散らせながら破裂する。そして、その中から核にされていた人物が姿を現した。

それは――

「珠代ちゃん!？」

吹き飛んだネガテバーの中心に、うつろな目をした友人が覚束ない足取りで立っていた。

私はすぐに彼女に向けて駆け寄ったが、その全身には黒いオーラが薄くまとわりついていた。

「珠代ちゃん、目を覚まして!」

「駄目ロト!　　またすぐにネガテバーがあふれ出してくるロト!」

ターロツトの言葉どおり、珠代ちゃんを覆っていた黒いオーラが爆発的にその量と濃度を増し、彼女をすっかり覆いつくしてしまうと、そのまま瞬時に元の大きさまで復元してしまった。

私は一度大きく飛び退いて、ネガテバーとの間合いを取る。

ターロツトが言った。

「これは生者から生み出されるタイプのネガテバーだロト。ルカナとは相性が悪いロト!」

そうだ。以前このタイプと戦ったときは浄化させきることができず、結局ストロジ―が倒したのだった。

「でも、いったいどうして珠代ちゃんが!？」

「——それは、彼女には拭い難い悔恨の過去があるからだよ」

「っ!？」

横から突然かけられた言葉に、私は拳を構えながら振り向いた。

駐車場で燃える自動車の炎に照らされて、一人の男性がその姿を闇に浮かび上がらせていた。

まばゆいほどの金髪に、透けるような白い肌。モデルのような高身長とスタイル。その秀麗な顔には澄み切った氷のような瞳が、怖気を振るうほどの冷たい光を放ち輝いていた。

ターロットが叫んだ。

「イエス！ 今度はいったい何を企んでいるロト！」

「企むことなど何も無いよ。僕らは『過去よりの使者』。叫びたがっている過去の求めに応じて、力を授けているだけさ」

「つまり、あなたが珠代ちゃんをネガテバーに変えたのね？」

私の問いに、彼：イエスはうつつすらと笑みを浮かべながら頷いた。

「珠代ちゃんを元に戻しなさい」

「断ると言ったら？」

「あなたを倒す」

そう告げ終える前に、私は拳を構えたまま、既にイエスの目の前まで踏み込んでいた。友達の命が懸かっているのだから、躊躇う訳にはいかなかった。私はイエスの美しい顔面目掛け拳を叩き込む。

だけど、私の拳がイエスの顔面を捉える寸前、私の脳裏に再びヴィジョンが過ぎった。これは「予知」だ。私はインパクト寸前だった握り拳を、咄嗟に開いた。

手の内に込められていた光の力を防御用フィールドとして周囲に展開した、その直後、私は真つ青な光に包まれた。

周囲で激しい爆発が起き、その衝撃で展開したフィールドが相殺され、消失した。それでも余波までは消しきれず、私は思わずよろけてしまう。

何が起きたのか、それを認識するのにコンマ数秒を要した。横から強烈なエネルギー波を撃たれたのだ。撃ったのはネガテバーだった。

きつと、イエスの差し金だ。あの男は私が攻撃を受けた隙に高々と跳躍してコンビニの高い看板の頂点に降り立ち、私を見下ろしていた。

「その迷い無き拳、流星はキュアルカナだね。実に君らしい」

「……………」

私らしい、と評されるほどあの男と付き合った覚えはない。というか初対面のはず

だ。なのに、私はこの光景になぜか既視感を抱いていた。

イエスへの攻撃をネガテバーに邪魔されたのは、単にイエスが私の攻撃を予測していたから？

そして私がネガテバーの奇襲を防げたのは、直前に予知できたから？

不意に湧き上がった違和感が私の思考を支配しそうになったが、しかし、今はそんな場合じゃない。

私は視界の片隅にイエスを捉えたまま、視線をネガテバーに戻した。ネガテバーは目のように輝く二つの光点で私を、まるで狙いを定めるかのように見据えていた。そしてその下にある口のような光点が徐々に輝きを増していく。

視界の片隅で、イエスが笑った。

「ルカナ、また逢おう。幾度も繰り返す時空の螺旋で」

芝居がかった台詞と共にイエスの姿が掻き消えた。

その次の瞬間、ネガテバーの口の光点がフラッシュの様に強く瞬いた。

「プリキュア、イレイザーフィールド！」

私は同時にフィールドを展開し、その口から放たれたエネルギー波を相殺した。激しい大爆発が私を包み込んだ。今度は踏みとどまることができた。

だけど、この爆発と同時に周囲でいくつもの悲鳴が上がったのが聞こえた。

ハツとなつて周囲を見渡すと、辺りには大勢の野次馬が右往左往していた。コンビニの店内に残っていた従業員や客たちが慌てて飛び出し、戦場となつた駐車場を必死に駆け抜けていく。

パトカーや消防車がサイレンをけたたましく鳴らしながら近づいてきているのも分かった。

「テエエバアア!!」

ネガテバーが再びその口を大きく発光させた。狙いは私だ。予知を使えば避けるのは簡単だけど、でも――

「――イレイザーフィールド!」

避けてしまえば流れ弾で周囲に被害が及んでしまう。私は足を留めたままネガテバーの攻撃を受け止めるほか無かつた。

爆発!

先ほどよりもエネルギー波の威力が上がっている。私は思わず背後へ二、三步ほどよろめいてしまった。

ターロツトが叫んだ。

「周りを気にしたら戦えないロト!」

「でも、巻き込むわけにはいかないよ! なんとか人気の無い場所に誘導しないと!」

「どうやってロト?」

「わかんない」

いい案が浮かばないまま、再びネガテバーのエネルギー波に襲われた。これもフィールドで受け止めたが、やはりさつきよりも威力が増していた。

まずい。このペースで威力が上がっていけば、後三〜四発ほどで受け止めきれなくなってしまう。

どうする? 迷いで私の心に焦りが生じた。その時――

「ぞでいあんるーれつと!」

「VIRGO!」

「アコギな真似はおとめなさい。乙女座です!」

聞き覚えのある声としようもない駄洒落と共に、私たちが居るコンビニの敷地が、白いレース上のカーテンのようなもので取り囲まれた。そのカーテンは敷地を完全に取り囲んでしまうと、今度は上へ向けてぐんぐんとその背を伸ばし、やがて頭上で結びつき一つの頂点と化した。

つまり、私たちとネガテバーはドームによって覆いつくされ、外界と隔絶された訳だ。

「テバア!?!」

ネガテバーがうろたえながらも、そのドームに向けてエネルギー波を放った。ドーム

の内側で爆発が起きたが、そこには傷一つ着いていなかった。

「どーよ、この鉄壁の防御力。これぞまさしく『乙女のてーそー』ってやつ?」

貞操の意味もわからずに言つてそうだな、コイツ。

声の聴こえた方向へ振り向くと、燃え盛る自動車の陰から、煤まみれになったストロジーが姿を現した。

「ストロジー、もしかしてずっとそこに居たの? とうか、その恰好はどうしたの?」
「いや、コイツの出現に一番乗りしたのは良かったんだけどさ、なかなか手手強くて」

真正面から挑んだら返り討ちにされて、駐車してあつた自動車に突っ込んで爆発させてしまった。と、彼女は手短かに説明してくれた。

「それよかせんばい、このドームの感想はどうなのさ。これがあれば周りの野次馬を気にすることなく思いっきり戦えるっしょ?」

「ありがとうストロジー、助かるわ。それじゃ一緒に協力してネガテバーを浄化しましょう」

「いや、そこはせんばいに後は任せた!」

「ほえ?」

ストロジーの言葉に首を傾げた私に対し、ネガテバーがエネルギー波を放ってきた。

私とストロジューはその場から飛び退いてそれを回避する。

着地後、ネガティブバーに向けて構えを取った私に対し、ストロジューはそのままドームの壁をすり抜けるようにして外側へと消えて行ってしまった。

「ほええ!?! ちよつとストロジュー、どこ行くの!?!」

——アタシさあ、このドーム以前にすでに一回、るーれつと使っちゃってさ——と、ドーム越しにストロジューの声が聞こえてきた。

——だから、もう戦えないんだわ。あ、ちなみにこのドームは私以外は出入りできないからヨロシク——

「何がヨロシクよ! それつまり私一人で戦えつてことだよね!?!」

——これ以上、邪魔が入らないようにサポートしたじゃん。それにどうやら、独りじゃ無いっぽいしさ——

「ほええ?」

その言葉に私はハツとなって周囲を見渡した。もう一人別の気配を感じたからだ。

彼女はコンビニの建物の上に立っていた。豊かなブロンドの髪が炎の光を受けてまばゆく輝いている。

キュアオラクルだ。

——あいつ、るーれつと発動直前に飛び込んできたんだよね。せんぱい、頼もしい

仲間が来てくれて良かったじゃん。がんばってね、アタシ外から応援してるから」

頼もしい仲間とか、白々しい。オラクルが来たこともドームの外に避難した理由の一つだろうに。

ターロットが呆れ声で言った。

「ストロジーは、ルカナが浄化させるのを待つてサインコインを奪う気口。漁夫の利狙いとか、こすつからい奴だ口」

ターロットの言葉に、ドーム越しにアストロの声が反論した。

——NO, Reasonable price with proper support

「ふざけたこと言つてんじゃねえ口」

ドーム越しに口喧嘩するターロットとアストロ口だったけど、オラクルはそんな私たちに目もくれずに、ネガテバーだけを睨みつけていた。その表情は怒気をはらんでいるかのように険しいものだった。

彼女の唇が微かに動き、小声で何かを呟いた。私はプリキュアとして強化された視力のお陰で、その唇の動きをはつきりと読み取ることができた。

(あのバカ、ネガテバーなんかに取り込まれやがつて……)

まるでネガテバーの中に珠代ちゃんが取り込まれているのを知っているかのような

口ぶりだった。

これはどういうこと？　もしかして私がオラクルの唇を読み違えた可能性もあるかもしれない。答えの出ない疑問が私の胸中を一瞬過ぎりさつていく間に、オラクルがネガテバーに向けて跳躍した。

オラクルが手にしている水晶玉をネガテバーめがけて投擲する。

「テバアッ!？」

水晶玉は高速螺旋回転しながらネガテバーに命中し、そのまま貫通した。しかしその水晶玉には、ネガテバーの体を構成している黒くねばついた物体が絡みつき、しかもそれは何本ものひも状となってネガテバー本体と繋がっていた。

跳躍したオラクルが、そのままネガテバーの頭上を跳び越え、その背後に回り込む。

そこで黒ヒモを絡みつかせた水晶玉をキャッチすると、今度はそのまま自らの身を高速回転させた。

「はああああああ!!」

オラクルの回転に合わせ、手にした水晶玉に絡みついていた黒ヒモが縊り合され、ねじれていく。縊りはたちまち限界に達し、ネガテバー本体からもその黒い物質をねじり取り始めた。

「テバッ!?!　テバアア!?!」

「はあああああ!!!」

高速回転を続けるオラクルの手元に、ねじれた黒ヒモがどんどん大きな塊りになっていくのとは対照的に、ネガテバー本体はみるみると小さくなっていく。

このまま上手く行けば、珠代ちゃんからネガテバーをねじり切ることができるかも知れない。私がそう期待を抱いた直後だった。

人の背丈近くまで小さくなったネガテバーが、その身に反して大きいままの口のような光点を、ひとときわ大きく輝かせた。

「危ない!?!」

その時すでに、私はオラクルとネガテバーの中間に飛び込んでいた。

「イレイザーフィールド!」

右拳を突き出すと同時に、強力なエネルギー波が展開したフィールドとぶつかり合った。今までで最大級の威力に、私は後方へ吹っ飛ばされ、オラクルを巻き込んでドームの内壁に叩きつけられた。

ドームの内壁は思ったよりも柔らかく、ダメージはほとんどなかったのは幸いだった。けれど吹っ飛ばされたことでオラクルの高速回転も止められてしまい、その手に縋り集められていた黒い塊りも、その反動によって逆回転しながらほどけ始めた。

ほどけた紐がネガテバーの本体に戻っていき、その大きさが瞬く間に復元されてしま

う。

「チイツ！」

オラクルが舌打ちして私を睨みつけた。

「あと少しだったつてのに、余計な真似をしやがって！」

「あの攻撃をまともに食らっていたらタダじゃ済まなかったよ」

「オラクル、先ずは礼を言うのが筋つてもんだ口ト」

「かばつてくれと頼んだ覚えは無えぜ。すつこんでろ」

オラクルは吐き捨てるようにそう言うど、すぐにまたネガテバーに向かって飛び掛かっていった。

「待つて、オラクル！」

「放つておく口ト。勝手にやらせておけばいい口ト」

「でも」

オラクルの様子は、どこかただならぬ気配を感じた。焦りのような余裕の無さが垣間見えたのだ。

ネガテバーは接近するオラクルに再びエネルギー波を放つた。オラクルは直前で身体を大きく捻ることど、その一撃を回避すると、その捻つた勢いを利用して、横方向に高速回転しながら鋭い手刀をネガテバーに振るつた。

ネガテバーの体の上部三分の一が切断され、空中へ舞い上がった。

切断された部分はそのまま離れたところへ落下したが、そこでモゾモゾとうごめき続けている。うえ、気持ち悪い。

ターロツトが声をあげた。

「あいつ、ネガテバーの一部を切り離れた口ト。ストロジーと同じく、オラクルもその能力を持っていた口トか」

以前、切り離せずに苦労した私からすれば羨ましい能力だ。というか三人中二人が切り離す能力を持っているということは、それができない私とターロツトのコンビがポンコツなだけじゃなからうか。

「オラア！　もういつちよだ！」

オラクルが再び手刀を振りあげ、ネガテバーをさらに寸断しようと襲い掛かる。だけど――

――切断された一部分が、俊敏な動きでオラクルに向けて体当たりを仕掛けた。

「ぐっ!？」

横から奇襲を受け、オラクルが吹っ飛ばされてしまった。体当たりをした一部分は、その反動を利用して本体へ向け、ポヨンポヨンと跳ね跳んでいく。

その一部分が本体と元通りにくつつこうとした、その寸前、私はその間に割り込み、拳

を放った。

「プリキュア、イレイザーナックル！」

光の拳を叩き込み、その一部分を欠片も残さず消滅させた。よし、本体に繋がっていないや、私でも浄化できる。

私は手応えを感じながらオラクルのそばに駆け寄った。

「オラクル、手を貸して！」

「手を出すなって言ってるんだろ！」

「友達を助けるためなの！」

「っ！」

すかさず言い返した私に、オラクルがわずかに怯んだのがわかった。この機に、私は言葉を畳みかけた。

「ネガテバーにされている子は、私の友達なの！ コインが欲しければあげる。だから、助けるために手を貸して！」

「ルカナ、また勝手な約束するんじゃない口ト!？」

ターロットを無視して、私は言葉を続けた。

「私もあなたも単独じゃ決め手に欠けるわ。だから協力しよ？ オラクルはネガテバーをとにかく刻んでちょうだい。欠片は私が片っ端から浄化するから、それで弱体化させ

ましよう！」

「…勝手なことをベラベラと言つてんじゃねーよ」

オラクルが不機嫌そうに私を睨みつける。

「だけど——」

「——手前がやりたきや、勝手にやりな」

オラクルはそう言い捨てると、すぐさまネガテバーに向かっていった。その後姿に、私は思わず笑みを浮かべた。

「うん、わかった。勝手にする！」

オラクルがネガテバーの脇を駆け抜け様に手刀を振るい、その一部を切り飛ばした。私はオラクルに続いて接近し、その切り離された一部に拳を打ち込む。

「イレイザーナックル！」

私はその一部を浄化させた間に、オラクルは既に次の一撃をネガテバーに見舞つていた。

「オラア！」

「テバア!!」

切り離された分だけネガテバーの体が小さくなっていく。

ネガテバーは反撃のエネルギー波を放つたが、オラクルも予知を持っているのだろ

う、その攻撃を素早く察知してかわすと、次々とネガテバーを刻んでいく。

そうして切り離された大量の欠片を、私は次々と浄化した。

ネガテバー自身も、取り込んでいる珠代ちゃんから新たな身体の供給を受けているのか、切り離れた直後から再生を始めていたけれど、それよりもオラクルの攻撃の方が早かった。

「オラア！ もつとスピード上げていくぜ！」

オラクルがネガテバーの周囲を駆け巡る。その速度は、プリキュアの動体視力をもつとしても残像しか見えぬほどだ。ネガテバーの体が、まるでミキサーにでもかけられでもしたように細切れになっていく。

「おい、ルカナ！ 大口を叩いておいて浄化しそこねたら許さねえからな！」
「任せておいて！」

空中に舞い上がった大量の細かい欠片を見据え、私は拳に力を込めた。これだけ大量の欠片を一個ずつ殴っていたんじゃないかととても間に合わないけれど――

——大丈夫、多分、一撃で浄化しきる方法はある。

私は数秒間、拳へのチャージを続けた。いつもより多く、限界いっぱいまで力を溜め込む。

「ルカナ、何をする気口ト？」

「ちよつと新しい技を思いついたの」

「ロト？」

イレイザーフィールドの応用だ。ストロジーがドームで覆つて密閉空間にしてくれ
たから、効果も大きいはずだ。

私は真上に向かつて跳躍する。

すぐに身体を反転させ、ドームの天井に足を付ける。天井内壁は弾力をもつて私を受
け止め、大きくなつたわんだ。そのままトランポリンの様に、私の身体は、今度は地面に向
けて押し出された。

「プリキュア、イレイザーボンバー！」

私は着地と同時に、大地に向けて掌底を叩きつけた。溜め込んでいた力が大地との反
発で爆散し、ドーム内に光と衝撃波が吹き荒れた。

これにより、大量の細かい欠片が残らず浄化されていく。

「よし、上手く行った」

「……行き過ぎだロト」

呆れ声のターロットに、私の顔も思わず引きつってしまった。

……いや、うん、威力がちよつと強すぎたみたいで、私の足元には巨大なクレーター
が出現していたし、コンビニの建物は完全に倒壊して瓦礫の山と化していた。

これ、ちゃんと元通りになるのかな。心配になってきた。

あ、そういうえば肝心の珠代ちゃんも、ついでにオラクルは大丈夫なんだろうか？

見渡すと、駐車場の隅にオラクルが居た。その腕には、珠代ちゃんをまるでかばうように抱きすくめられていた。

オラクルの目が私を睨みつける。

「ちったあ加減しやがれ、このバカ。助けるはずの友達まで吹っ飛ばすつもりか！」

「うん、ごめん。本当にごめん。自分でもここまで凄いことになるとは思わなかったよ。

……でも、珠代ちゃんを守ってくれたんだね。ありがとう、オラクル」

私が礼を言うと、オラクルは不機嫌な表情で「フン」と鼻を鳴らしながら、珠代ちゃんを地面を下ろして横たえた。

珠代ちゃんの胸元から、ネガティブの黒い塊が再び噴き出しかけていた。

「まだ終わってねえぞ。さっさと片付けちまえ」

オラクルは噴き出した黒い塊を無造作に掴み取ると、もう片手で手刀を放ち、塊りを根元から断ち切った。珠代ちゃんの胸元からは、それきり新たなネガティブは噴き出してこなかった。

オラクルが最後の欠片を、私に向かって投げて寄こす。

私は力を込めた右手でそれをキャッチした。そのまま握りつぶすように浄化する。

私の手の中には、一枚のサインコインだけが残されていた。

「やったロト。サインコインゲットだロト」

「オラクル」

私はサインコインをオラクルに投げ渡した。

「何やってるロトおお!?!」

「珠代ちゃんを助けてくれたお礼だよ」

「だからってあげちゃダメロト!? プリキユアはサインコインを集めることが一番の目的だロト!」

「友達の命の方が大事だよ」

「ロ……ロトおお……!」

ターロットはまだ何か言いたげな様子だったが、そのまま押し黙ってしまった。

一方、コインを受け取ったオラクルは、私を鋭い目つきでしばらく眺めていたけれど

……

「……ほらよ」

コインを指で弾き、私に向けて打ち返してきた。

コインに妙な回転がかかっていなかった。私は打ち返されたそれを素直にキャッチした。

「いいの?」

「貸しは作らねえ。慣れ合うつもりもねえ。それだけだ」

オラクルはそれだけを言い捨てる。水晶玉を近くの内壁めがけ投げつけた。螺旋回転のかかった水晶玉は内壁に命中すると、えぐるようにめり込み、そのまま貫通してしまった。

——あわあ!」

開けられた穴の先からストロジーの慌てた声が聞こえてきた。どうやらすぐ近くに居たらしい。オラクルもそれを分かかって水晶玉を投げたんだろう。オラクルはさすがに駆け出して、開けた穴の周辺を力いっぱい蹴りつけた。

ドーム全体が激しく揺れ、続いて全体に細かいヒビが走ったかと思うと、次の瞬間、ドームは粉々に砕け散った。

ドームが消えたその先で、ストロジーが目を丸くしていた。

「このドームぶっ壊すとか、ぶっちゃけありえないでしょ!」　つか、せんばい。アンタのあれのせいで脆くなったんだ、絶対!」

「がたがたウルセエぞ、青いの。そもそも私を閉じ込めるなんざ、いい度胸してんなあ!」

「アンタが勝手に飛び込んだんでしょーが、この黄ばみキュア!」

「黄ばんでるだあ!? てめーぶん殴ってやる。サインコイン全部吐き出しても許さねえからな!」

「これ以上付き合つてられるかバーカ!」

「待ちやがれ!」

ダツシユで逃げるストロジート、それを猛烈な勢いで追うオラクル。

二人を見送る私の周りでは、破壊したコンビニの建物や駐車場のクレーターなどが、まるで時間を巻き戻すように復元されていった。それと共に、周囲に詰め掛けていた大勢の人々も先ほどまでの記憶を失い、何事も無かつたかのように立ち去っていく。

ただ、コンビニから逃げ出していた従業員や客たちは、自分がなぜ店外に居たのか理解できないまま、不思議そうな顔をしながら店の中へ戻って行った。

既に変身を解いていた私は、駐車場の片隅でまだ横たわつたままの珠代ちゃんのそばに駆け寄つた。

「珠代ちゃん、大丈夫?」

「ん……ん? ミクちゃん?」

目覚めた珠代ちゃんは、少し呆けた表情で辺りを見渡しながら、ゆっくりと立ち上がった。

「私……何をしていたんだろう? ……つていうか、ミクちゃんこそ、どうしてここに?」

「私もちよつと買い出しにね」

「ああ、そう……そうなの……」

「帰ろう、珠代ちゃん」

「うん……そうね」

私は珠代ちゃんと並んで歩きだす。彼女の片手には購入したお菓子やジュースの入ったビニール袋。

しかし、珠代ちゃんの顔を隠していたマスクは、どこかに飛ばされて失われていて、彼女の素顔が露わになっていた。

珠代ちゃんの鼻の頭には、大きな絆創膏が貼られていた。

「珠代ちゃん、その鼻、どうしたの？」

「へ……鼻？ ……鼻!？」

珠代ちゃんは今さらマスクを失ったことに気が付いたのだろう、慌てて自分の鼻先を手で隠した。

「マスク無い!? なんで!？」

「花粉症じゃ無かったんだ？」

「あ、いや、うん、まあ、そうなのよ……」

珠代ちゃんはバツが悪そうに鼻先から手を離した。

「……昨日の墓地公園での掃除中に躓いちやって、近くの樹に顔から衝突しちゃってね。格好悪いし、恥ずかしいから花粉症ってことにしてマスクで誤魔化してたの」

嘘ついていてごめんね、と珠代ちゃんは笑いながら、懐から観月バーガーの割引券を出して渡してくれた。

「これって、もしかして口止め料？」

「そうよ。特に星華には黙っててね。あの子、絶対に大爆笑した挙句にみんなにバラすだろうから」

そういつて、珠代ちゃんは冗談めかして笑った。

そんな彼女の笑顔の中心に張り付いた絆創膏を眺めながら、私は複雑な思いでマンシヨンへの帰路についたのだった……

第5話・コンビ解散!?! 家出したターロット（前編）

ターロットと喧嘩してしまった。

私がサインコイン集めに消極的な態度でいることについてに我慢ならなくなったらしい。それと他のプリキュアたちとことあるごとに協力しようとする私の態度も問題だったようだ。

それでも私たちがサインコインを入手出来ている間はまだお互い穏便な関係で居られたのだけど……

珠代ちゃんがネガテバーにされた事件から一か月、あれからもネガテバーは二度出現していた。その一回目はキュアオラクルと、そして二回目はキュアストロジとそれぞれ遭遇し、私は彼女たちと共闘してネガテバーを浄化した。〃サインコインを渡すことを条件に〃。

共闘したおかげで浄化はとてもスムーズに行えた。もちろん、ターロットは激怒したけれど。

「ミクはすぐそうやってコインを渡そうとするロトー!」

「でも協力したおかげで、すぐに浄化出来たでしょ。今日のネガテバーも、この前もすご

く強かったから、私一人じゃ浄化は手こずるよ」

「浄化したってサインコインを入手できないきや意味がないロト！」

「どうして？」

「それがプリキュアの使命ロト！ でなきや、未来が間違った方向に進んじやうロト！」
「でも浄化できなかったら、そもそもコインだって入手できないよ？」

「そんなこと——」

無い、と言いかけてターロットは口をつぐんだ。

そう、最悪の手段だけど、ネガテバーを放置しても最終的にサインコインを入手することは可能だったりする。

サインコインを埋め込まれた対象はいずれ力を使い果たされてネガテバーの状態を維持できなくなり、サインコインの形に戻る。それを回収すればいいだけの話だ。以前、ターロットはそう言ってた。

でも、そんな手段を平然と選べるなら、ターロットはそもそも私をプリキュアに選んでくれなかったはずだ。

「私はネガテバーを救いたい。ターロットだってその気持ちは一緒でしょう？」

「そ、それはもちろんロト……でも……」

「だったら、何よりもネガテバーの浄化を優先すべきだよ。ストロジューも、オラクルも

きつと同じ気持ちだと思うよ。だって、プリキュアだもん」

「だからって……コインは渡せないロト!」

「どうして? ターロットとは違う歴史を未来にしたいからってこと? だったら、先

ずは話し合おうよ。コインはその時に渡してもらえばいいじゃない」

「ミクは何もわかってないロト! ミクにとつては未来でも、ターロット達にとつては変えることのできない過去の歴史ロト! それは話し合いでどうにかできるものじゃないロト!」

「どうして? それこそ訳が分からないよ。たかが歴史じゃない!」

思わず強く言い返した後、私は自分の失言にハッと気づいた。今、私は言うてはいけないことを言ってしまった。

「ミク……たかが、って言ったロト……」

「ご、ごめん!? 今のは、その……っ!」

言い訳しようとしたときには、もう手遅れだった。ターロットは窓から部屋を飛び出し、そのまま空へと舞い上がってしまった。

「ターロット、待って!」

私も慌てて外へ飛び出して追いかけたけれど、ターロットの姿はもうどこにも見当たらなくなってしまうていた。

「ターロット、ごめん！ 私が言い過ぎた、謝るから戻ってきて！」

虚空に向かつて叫んだけれど、返事は無かった。空をはばたく黒い影を見つけて目を凝らしたけれど、それはただのカラスだった。

カラスは分厚い雲の下、湿った風に逆らいながら南へ向けて飛んでいく。その彼方の景色には薄く白いベールがかかっていた。

雨だ。

時刻は夕方、季節は梅雨。雨雲が風に乗って流れてきて、私にも降り注いだ。

拙い。私はターロットの身を案じた。彼女は本だ。しゃべって飛べて不思議な力を使える妖精だけど、その身が紙でできた本であることには変わらない。水はターロットにとって天敵だった。

早く見つけないと。

私は雨の中を駆け出した。雨はターロットが飛び出してからすぐに降り出したから、ターロットもそんなに遠くへは行けないはずだ。私はターロットが雨宿りできそうで、かつ人目に付きそうにない場所を探すことにした。

街路樹の枝葉の影や、駐車場の車の下を、私はびしょ濡れになりながら探し続ける。でも、見つからなかった。

となると、ご近所の家屋の軒下かもしれない。でもそれだと逆に住人に見つかる可能

性が高い。

だったら誰も住んでいない空き家に潜んでいるかもしれない。この町内には確か空き家が2件ほどあったはずだ。

私は雨の中、その場所を目指してひた走った。

「ターロット、お願い。居るなら返事をして！」

空き家の敷地に足を踏み入れ、声を張り上げたけれど、やっぱり返事は無かった。戸も窓も全て閉め切られていて、内部の様子をうかがい知ることはできなかった。

裏側にまわると、勝手口があった。ドアノブに手をかけ回すと、カギはかかっておらず、ガチャリと後がして開けることができた。

私は一瞬だけ躊躇ったけれど、ドアをおおきく開け放ち、中へと足を踏み入れ——
「——その君、何をしているんだ！」

背後からかけられた声に、私は足を留めざるを得なかった。

振り向くとそこに、赤色灯を回したパトカーと、その傍に立つお巡りさんの姿があった。お巡りさんが持っていた懐中電灯で私を照らし上げ、その眩さに私は顔を歪めた……

……猫を捜していた、という私の言い訳に、お巡りさんはパトカーを運転しながらため息を吐いた。

「いくら心配だからって、不法侵入は駄目だよ」

「……はい」

「空き家だからって私有地なんだよ。わかってる?」

「……はい」

「もう暗くなつたし、雨も強いから、今日はもう諦めなさい」

「……はい」

お巡りさんの言葉に答えながらも、私の目は横の窓ガラスを透けて過ぎゆく外の景色に向けられていた。私はパトカーに乗せられて、自宅へ送り届けられている最中だった。

私の住むアパートは山の斜面を切り開いた住宅街にあつた。佐世浦市の街は急峻な山々と海とが接する土地だった。平地はほとんどなく、住宅地は海沿いか、または山を切り開いた斜面に造成されている。

だから市内の道幅は基本的に狭く、家々の間には時折、切り開かれた山の斜面が壁のようにそそり立ち、その地肌を露わにしていた。

そんな山肌には洞窟のような横穴がいくつも開けられていた。防空壕だ。

かつて軍港として栄えていたこの街は、戦時中は攻撃目標とされ、激しい空襲を浴びた。その戦火から逃れるため、街の人々は自宅のすぐそばにある山肌に防空壕を掘り、そこに身を隠していた。

この佐世浦の街には、そんな防空壕の跡地が、数えきれないほど残されている。今も、道路わきの山肌に防空壕の一つを目にして、私はハッとした。

そうだ、防空壕なら人目につかず雨風をしのぐのに最適じゃないか。

自宅についてお巡りさんがいなくなったら、すぐに近所の防空壕を捜しに行こう。私
が心中でそう決意を固めた、その時。

突然、お巡りさんがクラクションを鳴らしながら急ブレーキを踏んだ。

「その君！ 急な飛び出しはやめなさい！」

お巡りさんがパトカーのマイクを使って呼びかけた先、ヘッドライトの光に照らされて、一人の男性の姿が雨煙の中に浮かびあがっていた。

背が高く、モデルのように長い手足、褐色の肌に堀の深い顔立ち。

「タデイ!？」

怪物：ネガババーを生み出す“過去よりの使者”を名乗る男。どうして彼がここに？

タデイはパトカーの行く手を塞ぐように立っていた。金色に輝くその瞳が、射すくめるように私に向けられている。

お巡りさんはタデイの視線が私に向けられていることに気づき、後部座席の私に振り返った。

「君の友達……という訳ではなさそうだね」

お巡りさんは私の様子を一瞥すると、すぐに険しい顔になってパトカーから降りようとした。

「待つてください！ 危険です!？」

「君はここに居るんだ。いいね」

お巡りさんはそう言い残して、パトカーのドアを開けて外へ出て行った。

「君——」

お巡りさんがタデイに声をかけようとした、次の瞬間、お巡りさんは糸の切れた人形のようにその場に倒れ込んだ。

「お巡りさん!？」

タデイは指一本も動かさなかったけれど、彼の仕業に違いなかった。パトカーの周りにだつて、タデイ以外の気配はどこにもない。雨だけがしんと降っていた。

私は後部座席のドアに身を隠しながら、慎重にパトカーから降り立った。すぐ傍に倒れているお巡りさんの手首をつかみ、脈を測る。

良かった、生きてる。そんな私の様子を眺めながら、タデイが口を開いた。

「安心しな。殺しはしねえ」

「タデイ…何が目的なの？」

「別に。大した意味はねえよ。ポリ公の相手をするのが面倒だから眠らせてただけだ」

タデイはつまらなさそうにそう言いながら、その指を弾いてパチンと鳴らした。

するとお巡りさんがパツと目を覚まし、急に立ち上がった。いや、それは立ち上がったというより、倒れた時の様子を逆再生したような不自然な動きだった。

タデイがさらに指を鳴らすと、お巡りさんはパトカーの運転席に戻り、後部ドアが勝手に閉まり、奇妙な音色のクラクションを鳴らしながらパトカーはバック走行で急発進し、そのまま遠ざかって行った。

雨の夜道に、私とタデイだけが残された。

「やっぱ、お前には俺の力が通じねえか」

「またネガテバーを生み出すつもりなの？」

「当たり前だろ。俺たちがそれ以外のことをしたことがあるか？」

「その目的は何なの？　そもそもあなた達は何者なの？」

「質問の多い奴だ」

冷笑するタデイの手に、サインコインが現れた。私の質問に答えるつもりは無さそう
だ。

タデイが道路脇に向かってコインを投げようとしたのを見て取り、私は彼に向かって飛び掛かった。

「させない！」

タデイの腕を抱きかかえるようにしがみついたつもりだったのに、私の手は何の手ごたえも無く空を切った。

「え!？」

勢い余って水たまりに転倒してしまった私の背後で、タデイの嘲笑う声が聞こえてきた。

「二度も同じ手を食うかよ」

私が振り返ると、随分と離れた場所にタデイが立っていた。以前、海軍墓地で私が囮となつてターロットに不意打ちを食わせたことを警戒していたのだろう。

タデイは笑うのをやめ、辺りをきよろきよろと見渡し始めた。

「おい……ターロットの奴は居ないのか？」

「……居ないわ」

「んだとお？　じゃ、今日はお前ひとりだけつてことかよ」

おいふざけんな、とタデイが苦虫をかみつぶしたような表情になった。

「これじゃ本気で避けた俺がバカみたいじゃねえか！」

「そう。なら謝るよ。ごめん」

「やかましい。余計にバカにされた気分だ。……てか、そもそもお前は どうして パトカーなんかに乗ってたんだよ？」

「……気になるの？」

「気にしちゃ悪いか」

「私の質問には答えなかつたくせに？」

私の言葉はタデイの神経を逆なでしたようだ。

「言うじゃねえか……」

タデイの表情がみるみると険しくなっていく。

彼は躊躇なく手にしたコインを放り投げた。私がそれを止めようにも、場所が離れすぎていた。サインコインは雨の中、街灯の明かりを煌めかせながら道路脇へと飛んでいく。

その先にあつたのは、山肌に開けられた横穴——防空壕だった。サインコインが投げ込まれた途端、その防空壕の奥から真っ赤な炎が激しく噴き出した。

「サインコインよ、過去に従い未来を示せ！ この地に眠る悲しみよ、現世に黄泉がえり未来へ進め！」

「ボオクゴオオオオオネガテバア!!」

防空壕から噴出した炎は、一か所に集まるとその姿を変え、全身に炎を纏った灼熱の巨人：ネガテバーとなって私の目前に現出した。

「ひどい……なんて姿なの……!?!」

ネガテバーの咆哮は、全身を焼き尽くし続ける炎に、もがき苦しむような叫び声だった。

プリキュアに変身してアルカナカードを引くまでもなく、この防空壕が持っていた過去がどんなものだったのか、想像がついてしまった。

「やめて！……こんな悲しい過去を利用しないで！」

「悲しいからこそ泣き叫ぶんだろ！ 止めたきや力づくでやってみろ！」
「くっ!?!」

私は変身用のサインコインを握りしめたまま怯んでしまった。力づくで止めたくても、ターロットが居ないんじや変身できない。プリキュアじゃない私じや、ネガテバーを止められない……

……でも！

「私は、止めたい！」

私は雨の中、ネガテバーの燃え盛る巨体へ駆け寄った。

私のその行為に、タデイが目を見開いた。

「お前、変身しないのか!？」

「こつちだよ、ネガテバー。こつちにおいで!」

私は手のサインコインを頭上で振ってみせた。これでネガテバーの気を引けるかどうかは分からないけれど、ネガテバーは何かを感じ取ったのか、私の方へとその顔を向けた。

「ネガアア!」

炎を纏った長い腕が、私に向かって差し伸ばされてくる。背を向けて駆け出した私のすぐそばをその腕が掠め、肌がちりちりと痛んだ。火傷しそうなほどの熱波だった。私は喉から出かけた悲鳴をこらえながら、全力疾走でわき道に逃げ込んだ。

「ボオオオオ!!」

私を追ってネガテバーも走り出す。降り注ぐ雨は燃え盛るその身体に触れた傍から蒸発し、ネガテバーは大量の蒸気を全身から噴き上げながら私の背後へ迫ろうとしていた。

「ネガアア! テバアアツ!」

プリキュアとしてではなく、生身の状態で聞くその叫び声と、背後へ迫るその圧倒的な熱と気配に、私は心底から恐怖を感じた。

怖い、怖い、怖い!! このままじゃ死んじゃう!?

どうしよう、嫌だ、死にたくない！

パニックに陥りそうになる心を抱えながら、私は死に物狂いで住宅街から人気の無い場所を目指して走り続けた。

とりあえず周りに被害が出ないようにネガテバーを誘き出す。でも、そのあとはどうしよう？

「はあーッ！ はあーッ！」

息が苦しい。胸が痛い。脚だつて重たくなってきた。

「ボオオクゴオオオ!!」

「うわあああ!!」

それでも、背後からの熱と気配に追いつかれたくない一心で、限界に達しかけている身体をもがくように動かし、走り続けた。

「はっ…はひッ!…ひぐッ!」

それでも一歩踏み出すことに足は重さを増していく。呼吸だつてもうまともにできやしない。苦しい。

「ネエエエガアテエバアアアア!!」

自分が情けない。何がネガテバーを救いたいだ。プリキュアに変身できなきや、私はまともに走ることにさえできないただの中学生だ。ターロットが居なきや、逃げることにさ

えままならない無力な子供だ。

ごめん、ターロット。ごめんなさい。私、思い上がっていた。心のどこかであなたの力を利用しようとしていた。あなたの事情を私の正論で抑え込もうとしていた。その結果が、この様だ。

——でも、ターロットだって何か隠し事してるっばいし、私ばかり悪くもなくな
?

朦朧とした意識の中、反省しきりだった最後の最後でついつい自分を弁護するような言い訳をしたのが悪かったのか、私は足をもつれさせて転倒してしまった。

「ほええっ!?!」

ずるぺたばっしやーん。水たまりの中に盛大にすっ転んで倒れた私に向かって、ネガテバーが炎の両腕を振り上げ、襲い掛かってくる。

「ネエエエガアアア!!」

駄目だコレもう私死んだ。人生最期の瞬間、人は走馬灯のように自分の人生を振り返るといふ。私も確かにそれを見た。この場所まで逃げてきた足取り、パトカーで送られながらお巡りさんにお説教されたこと、ターロットを探し回ったこと——

——ネガテバーの炎の拳が目前に迫ったとき、私の回想はようやくターロットとの口論に差し掛かったところだった。我ながら随分と短い走馬灯だ。せめて家族との思い

出くらいまで遡ってくれたっていいじゃないか。炎の拳が私を焼き尽くした……

と思つたら、それは私じゃなかった。

ネガテバーの拳は、私のすぐ隣にいた「別の私」に向かつて放たれていた。私そつくりの姿形をした、「別の私」は、その拳をひよいとかわすと、軽い足取りで走り去っていく。

「ネガアアああ!!」

ネガテバーは「私」に攻撃をかわされたことが気に喰わなかったのか、走り去る「私」を追いかけて、私から遠ざかって行つた。

「ほえ? なにこれ? なんなのコレ?」

「にやははは!!」

「ほええつ!」

背後から突然、テンションの高い笑い声が響いた。驚きとともに振り返つた先、そこに青いアイツがいた。

「星詠みの使者、キュアストロジ―! お呼びとあらば即参上!」

そうか、さっきの「別の私」は彼女が作った幻だったのか。というか、別に呼んでない。呼んでないけれど来てくれて本当に助かつた。

水たまりの中で息も絶え絶えな私に向かって、キュアストロジューはニコリと笑顔を浮かべた。

「困らなかってネガティブを誘い出すなんて、無茶な真似するよね、あんた。でも、カツコよかったよ」

褒めた？ 彼女が？ 私を？

「さ、安全なところへ避難するよ」

ストロジューはへたり込んだ私のそばにしやがみ込むと、足と背中に腕を回し、軽々と持ち上げた。これってお姫様抱っこ？

そのままストロジューが高々と跳躍した。うわ、たつか!? いやちよつと待って生身でこの高さはヤバい！ プリキュアの身体能力ヤバい！

そして急降下。

「ほええええええ!?!」

「大丈夫、大丈夫、ヘーキヘーキ」

十数メートルもの高さからスタツと着地。衝撃も何も感じなかったあたり、プリキュアのヤバさを改めて思い知った。

ストロジューは私をその場に下ろし、言った。

「ここまですればもう安心つしよ。後は私に任せて、あんたはさっさと逃げるんだよ。」

いいね」

そう言つて、彼女は頼りがいありそうな微笑みを私に向けた。

何だコイツ、いつもは「どうしたんですか、せんぱあゝい。こんなやつに苦戦してるんですか、ウケるゝ」とか言つて小バカにしてくるクセして、今日は随分と親切じゃない。何か悪いものでも食つたのか？

「さあ、行くよアストロ！ 最近いいところなかったし、さつさとネガティブ浄化して今日こそ先輩たちをぎやふんと言わせたるんだから！」

意気揚々とネガティブの居る方向に顔を向けて気合を入れたストロジの姿に、私はちよつと安堵した。うん、これはいつものストロジだ。というか、この様子には今はさらながらに気が付いた。

もしかしなくてもこの子、私がキュアルカナだつて気づいてない？

自分じや変身前後で外見にそこまで変化は無いと思つていたけれど、傍から見たら意外と分らないものかもしれない。まあ普通の人だつてメイク落としたら別人みたいな人もいるし、案外そんなものなんだろう。

そもそも私だつて目の前のストロジが変身を解いたらどんな素顔になるのか想像もつかないし。

ほえ？ てことはあれか。ストロジは私の見えないところじゃ、こんな風にちゃん

と人助けをしていたってことか。なんだ、なあんだ、見直したよ。

「あん? ちょっとアンタ。他人の顔見てなにニタニタ笑ってんのさ?」

「:キュアストロジーツて、ヒーローみたいでカッコいいなって」

助けてくれてありがとう。そう告げると、ストロジীর顔が暗い雨の中でもはつきりとわかるほど赤く染まった。

「え、お、いや、えと、かかかカッコいいとか、そつそれほどのことは……、ま、まああるし?」

調子づいてドヤ顔してみせるものの、目は泳いでいるし口元はわなないているしで、ああこの子はこんな風に褒められたことが無いんだな、つてわかってしまった。

「とととにかく、アンタは安全なところにさっさと逃げなつて! ほらほら!」

ストロジীরは私に念を押すと、そのまま戦場へ向かって跳躍していった。私はそれを見送り、さてどうしようかと思案した。

ネガテバーについてはストロジীরに任せておけば大丈夫だろう。あの子は口は悪いけれど、腕は立つ。それにいつものパターンならキュアオラクルも駆けつけてくるはずだし。

あ、そうだ。私はここであることに気が付いた。ターロットだって当然、ネガテバーの出現に気が付いているはずだ。そしてそれを放置するような性格じゃない。

ターロットは絶対に現場へ来るはずだ。私はそれを確信し、パートナーとの再会を果たすためにネガテバーの居る戦場へ向けて走り出した――

第5話・コンビ解散!?! 家出したターロット（後編）

ネガテバーの出現を感知し、ターロットは歯噛みした。今すぐに現場へ駆けつけたいのに、それができない。

今、ターロットの目の前には、「過去よりの使者」イエスが立ちはだかつていた。

ターロットが居る場所は、ミクの住むアパートからほど近い場所にある防空壕の一つだった。

ネガテバーを生み出した防空壕とは違う場所だが、この町には古い防空壕がいたる所に残っている。ほとんどは閉鎖されているが、私有地の敷地内にあるものは物置として使われていたりする。駅前近くの繁華街や商店街にもこの防空壕は存在し、店の倉庫や、モノによつては表側だけ建物を増築し、そのまま店舗として利用されているものさえある。

過去の戦争の遺物が今を生きる資産として活用されている。佐世浦は、そんな独特の街並みを持っていた。

今、ターロットが隠れているのは、とある住宅の裏庭にある、物置として使用されている防空壕だった。イエスはその入り口をふさぐかのように立ちはだかり、横穴の奥に

潜むターロツトを冷たい目で眺めていた。

「家出かな、ターロツト。ミクと喧嘩でもしたかい？」

イエスは冷たい目でクスクスと笑った。他人の庭に不法侵入した挙句、防空壕に向かつて笑いかけているなど、不審者を通り越してホラーですらあるわね。と、ターロツトはイエスと対峙しながらそう思った。

ターロツトがここで大声を上げれば、家人はこの庭に立つ不審者に気が付き、大騒ぎになるか、または警察を呼ぶだろう。そうすればその騒ぎに乗じてここから抜け出せるかもしれない。

しかしターロツトはその考えを却下した。『過去よりの使者』は人間の理を超えた存在だ。人間と同じ姿勢をして人語を解するが、その本質はまるで違う異質なものだ。そんな危険な存在を相手に、一般人を巻き込む訳にはいかない。

だったら、どうする？

ターロツトのその悩みを見透かしたように、イエスは微笑みながら言った。

「君の大事なミクは今、変身さえせずにはネガテバーへ立ち向かっているよ」

「っ!？」

イエスの言葉を聞き、ターロツトの背中にゾッと悪寒が走った。

「そ、そんなこと無いロト！ い、いくらミクでも、そんな無謀な真似はするはずが……」

「するよ。あの子はそういう子だ。僕にはわかる。だって、ずっと観てきたからね。君だって僕と同じだろう?」

「だ、だったら!」

ターロットは宙に浮き上がり、イエスを正面から睨みつけ叫んだ。

「だったら、早くそこをどくロト! このままじゃミクが死んじやうロト!」

「断る」

「ふざけんなロト! ミクが死んだら困るのは、お前たちも一緒な筈だロト!」

「その時はまた巻き戻るだけさ。これまでと同じように、何度も、何度もね。そして、そのたびに新たな違う『今』が生まれる。それはとても貴重で、愛おしい瞬間だと思わないかい?」

「イエス……あんたって奴は!」

「ミクが生身でネガティブに立ち向かう。これは今までの時間にはなかった新たな出来事だ。彼女がこれを生き延び、新たな未来を生み出すか、それともあえなく散ってこの時間をサイinconイーンに変えるだけに終わってしまうのか。賭けようじゃないか、ターロット」

「戯言を言うなロト!」

ターロットは自らのページを開き、四枚のカードを空中に舞わせた。女教皇、力、太

陽。防空壕の中でカードが一斉に眩い光を放ち、ターロットを包み込んだ。

女教皇のカードはターロットを成人女性の姿に変え、力のカードが彼女の細腕をガントレッドとなって装着され、そこに太陽の力が熱となって込められる。

「退きなさい！」

ターロットはガントレッドを装着した右腕を振りかざし、入り口をふさぐイエスに殴りかかった。

「暴力では何も解決しないよ」

イエスが軽く手をかざし、その人差し指を立てて迫りくるガントレッドの拳に突き立てた。たったそれだけで、ターロットの拳は固い壁にぶつかったかのように止められてしまった。

ターロットの姿がいくら女性とはいえ、灼熱の装甲を纏った体重が乗った拳であるにもかかわらず、イエスの指先は微動だにせず、ターロットの拳のみならず、前に踏み込んだその身体ごと制止させてしまっていた。

「くっ!？」

ターロットは忌々しそうに顔をしかめたが、しかし、この拳自体が止められるであろうことは想定内だった。この程度の攻撃でどうにかできる相手なら、そもそも苦労はない。

「ホイールオブフォーチュン！ 運命の輪よ、この男を拘束しなさい！」

ターロットが叫ぶと同時に、ガントレットから炎が噴き上がり、それは輪となってイエスを取り囲んだ。その輪が収縮し、イエスの身体を縛り上げる。

それは骨を砕く強大な圧力と、鉄をも溶かす高熱の拘束術だった。

しかし、それでもイエスは涼しげな表情で微笑み続けるだけだった。

「どうしてもミクの元へ行くんだね。でも、それでは新たな未来は生まれないよ。決まりきった時代を繰り返し続けるだけだ」

「あの子の命と引き換えに生まれる未来なんて願い下げよ！」

拘束したイエスの脇を駆け抜け、ターロットは防空壕から抜け出した。すぐに成人女性の姿を解き、雨にその身が濡れることも厭わず、そのページをはばたかせて空へと舞い上がる。

遠ざかっていくターロットの姿を見送りながら、イエスはポツリと呟いた。

「君のその優しさが、ミクを縛り付けているんだよ。いい加減、子離れすべきなんだ」

イエスは軽く腕を動かし、己を縛り付ける炎の輪を無造作に引きちぎった。自由の身となったその身体には、傷ひとつ着いていなかった。いや、身体どころか服にも焦げ跡さえついていない。

「ヤッ……」

イエスはそこから立ち去ろうと踵を返しかけたが、不意に何かの気配を感じ取り、その動きを止めた。

「珍しいね。君がネガテバーに向かわずに、こっちに来るなんて」

イエスが首を巡らし、視線を向けた先。そこには金色のプリキュアが佇んでいた。

「……テメエにや、デカイ貸しがあるからな。利子付きで返してもらわないことには、腹の虫がおさまらねえよ」

雨の中、金色のプリキュア：キュアオラクルが、凄惨な笑みを浮かべた。

「サインコインよりも意趣返しを選ぶのか。なんとも後ろ向きであることだ。君は未来に興味が無いのかい？」

「明日なんか知らねえ。過去に未練もねえ。私が興味あるのは、いつだって今だけだ！」
オラクルが叫び、大地を蹴り、その拳にかぎ爪を立て、イエスへと襲いかかった。

雨煙る閑静な住宅街に、肉を打つ鈍い音が響き渡った——

一方その頃、キュアストロジューは、炎を纏った防空壕ネガテバーを相手に孤軍奮闘していた。

「やっぱいなく、もう！ コイツ、強いじゃん!」

襲い掛かる炎の拳を間一髪で避け、背後へ飛び退きながら距離をとった。反撃する余裕は十分にあったが、先ほど既に肉弾戦を挑んだ際に火傷しかけて以来、至近距離での攻撃には慎重になっていた。

「手で触れないんじや遠距離戦しかできないけど、技を使えるのはあと一回かあ。…どうすっかなあ」

「Because it was wasted」

「人助けのために使ったんだからしゃーないじゃん!」

ターロットと言い争っている隙に、ネガテバーがまた襲いかかってきた。その動きは直線的で、攻撃も大振りで避けることは簡単だった。

しかし、全身を覆いつくす高熱の炎がこちらの攻撃を無効化してしまう。ストロジーは後退を続けているうちに、その場所はすでに郊外へと達していた。

降りしきる雨がネガテバーの炎の身体にあたる傍から蒸発し、濃い霧となって周囲へと拡がっていく。

「こうなったらイチカバチか、水系の技で一発で消し去ったるし!」

「Can, t extinguish the fire even in rain
?」

「まとめてドバつとかけりや流石に消えるっしょ!」

「If fail?」

「失敗したら……そんなときやケツまくって逃げりゃいいし?」

「You are a liar」

「なんで嘘つきよばわりなのさ!? っていうか、いつもならそろそろ、せんぱい達が割り込んでくる頃合いでしょ! なんで今日に限ってこんなにも遅いのさあつ!?」

ストロジーのやけくそな叫びは、強くなった雨と、濃さを増していく霧に溶けて消えて行った。

日も暮れ、闇も濃くなっていく中、そこで唯一まばゆく燃え盛っていたネガテバーの姿が、消えた。

「うっそでしょ!? なんであんな目立つ奴が見えなくなっちゃうわけ!」

「Above!」

「上? あわあつ!」

見上げた瞬間、空中から炎を纏った巨体が落下してきたのを認め、ストロジーは慌てて横へ飛び退き、地面を転がった。

ストロジーが倒れ込んだそのすぐ脇に、ネガテバーが拳を叩きつける。凄まじい爆音とともに地面がクレーター上に陥没し、吹き飛んだ土砂が炎を纏って間近に居たストロジーに襲い掛かった。

「あちっ！ あちいあっつう!？」

プリキュアとして強化されたその姿だからこそ、炎が服に燃え移ることは無かったが、その痛いほどの熱にストロジューは悲鳴を上げながら地面をのたうち回った。

さらに――

「ネエエガッアア!!」

地面を転がるストロジューめがけ、ネガテバーが助走をつけて蹴りつけた。

「げふうっ!？」

ストロジューはまるでサッカーボールのように大きく弧を描いて空中を舞い、大地に墜落した。

「あぐ……ッ、ゴホッ!？」

蹴られたのは腹部だった。地面に身体をくの字に折り曲げて横たわるストロジューめがけ、ネガテバーがトドメをさそうと更に駆け寄ってくる。

「テエバアア!!」

「ひっ!？」

深い雨と霧の向こうから迫りくる炎の巨人の姿に、ストロジューは絶叫しそうになった。

（ヤバい、死ぬ…!？）

逃げようにも腹部へのダメージが大きすぎて、立ち上がるどころか呼吸さえままならない状況だった。

プリキュアが危険な仕事だという事は理解していた。下手をすれば死ぬということも覚悟の上だった。どうせ生きる意味などない、死んだほうがましだとぼんやり生きてた人生だったから。

でも、いざその時を迎えてしまうと、ただひたすら後悔の念だけが湧き上がっていた。

(ヤダ……やっぱりまだアタシは死にたくない！)

目の前に迫ったネガテバーが、炎の拳を高々と振りかざした。

「やだあ……こんなのやだよお……助けて……誰か——」

ネガテバーの拳が、ストロジューめがけ振り下ろされた。

「助けてよお、せんばあい！」

「任せて」

「へ？」

轟音とともに、ネガテバーの拳を誰かが受け止めた。

ストロジューをかばうように立っていたのは、たなびくルビー色のマントを羽織った、赤き髪の少女の姿。

「せ……せんばい……？」

「遅れてごめんね。ストロジーは大丈夫？」

キュアルカナは片手ひとつでネガテバーの拳を受け止めたまま、振り返ってストロジーに微笑みかけた。

ストロジーは地面に倒れ伏したまま、顔をしかめた。

「…あのさ、この状態で大丈夫なわけないじゃん」

「減らず口叩ける程度には大丈夫っぽいね」

「言ってくれるじゃん。ムカついたからアタシもう手伝わないからね。せんぱいだけで後ヨロシク」

「はいはい」

ルカナは苦笑しながら、再びネガテバーに目を向けた。

ネガテバーあ、ルカナに掴まれた右拳を必死になつて振りほどこうとしていたが、もがけどもがけど、離れるどころか腕を動かすことさえできなかった。

ルカナは左手ひとつでネガテバーの拳を拘束したまま、右手に抱えていたターロットに呼びかけた。

「お願い。私に力を貸して」

「言われなくたって貸すロト」

ターロットがルカナの左手からふわりと浮かび上がり、そのページを開いて三枚の

カードを舞い落した。そのカードは光の粒子と化して、ルカナの右腕に力となって宿っていく。

その瞬間に垣間見えたネガテバーの過去に、ルカナは目を伏せ、黙とうを捧げながら、その拳を引き絞るように腰だめに構えた。

「プリキュア……イレイザーナックル!!」

「ネ、ネガアア?!」

ネガテバーの右手を拘束したまま、ルカナの拳がその腹部に突き刺さった。ルカナの拳に宿っていた光が奔流となってあふれ出し、ネガテバーの全身を炎ごと消し去っていく。

そして最後に、サインコインが一枚、放物線を描いて遠くへと飛んでいく。

ルカナはすぐに大地を蹴り、そのサインコインを追いかけた。地に落ちるようとするコインを捕まえようと、右手を前方に差し伸ばす——伸ばそうとする前に、ルカナは背後に振り返った。

「プリキュア、イレイザーフィールド!」

振り返りざまに右掌を掲げ、光の領域を展開する。そこへ、背後から突進してきていた一頭の猛牛が衝突し、そしてあえなく消滅していった。

その向こう側では、ストロジューが星座盤を構えたまましかめ面をしていた。

「ちえつ、読まれてたか」

「あなたのことだから、どうせそう来るとは思ってたよ」

ルカナはターロットを手放し、両手の拳を握りしめ、ストロージーに向かって構えを取った。

「悪いけれど、今日はサインコインを譲るつもりないから。これ以上、邪魔をするなら、私はあなたと戦うよ」

「へえ、珍しくやる気じゃん。そんなのアンタらしくないよ、せんぱあい」

ストロージーは軽口を崩さないものの、ルカナの態度には明らかに焦りの色を浮かべていた。そんな彼女を前にしながら、ルカナはターロットに言った。

「私があの子をけん制している間に、ターロットはコインを回収して」

「わかった口ト!」

ストロージーと対峙し続けるルカナを残し、ターロットがサインコインへ向かって飛んでいく。

しかし――

「サインコインは渡さないルン!!」

「口トおっ!?!」

突如、物陰から水晶妖精：クリルンが飛び出し、ターロットを体当たりで弾き飛ばし

た。

クリルンはそのままサインコインのそばに着地すると——何をどうしたのかは不明だが——コインを水晶の中に取り込み、そのまま猛スピードで地面を転がり、遠くへと去って行ってしまった。

「ターロット、大丈夫!？」

「ぬがああああ!! 油断してたロト! 畜生だロト!」

「…大丈夫そうだね」

「あーああ、くたびれ損だわ」

ストロジージが緊張が解けた声で、吐き捨てるように呟いた。そして、

「せんぱーい、この借りは高くつくからね。次はきっちり返してもらおうから覚悟しなよ」
そんな捨て台詞を残して、彼女もまたいずこかへと去って行ったのだった。

夜。

あれから、プリキュアの姿のまま急いで帰路に就いた私は、父さんが帰宅する前になんとか自宅のアパートへ帰りつくことができた。

何食わぬ顔で父と夕食を過ごし、片付けをして、入浴まで済ませて、ようやく部屋に

戻った後、私はベッドに倒れ込んだ。

「あ~~~~~疲れた」

「心配かけて、悪かったロト」

ターロットが、ベッドわきに佇みながら申し訳なさそうに言った。

「そんなこと無いよ」

私はそう答えながら、ターロットに手を伸ばした。

「私の方こそ、言い過ぎちゃった。ターロットにも事情があるのに、それを考えもせずに私の事情ばかり押し付けようとした。それに……」

私はターロットを手に取り、上体を起こして彼女と向かい合った。

「……ターロット達の歴史を、たかがって言っちゃった。私、軽く思ってた。ごめん、って謝って済むとは思わないけれど……でも、ごめんなさい」

「ミク……」

本の表紙の中で、ターロットが力無く微笑んだ。

「謝ってくれてありがとうロト。だけど、ミクが言ってたことも当然だロト。ミクには、決められた未来なんてない……それでも……ごめんロト」

「それって、コインの奪い合いは避けられないって意味での、ごめんってこと?」

私の問いに、ターロットは小さくうなずき、そして言った。

「ターロットには、まだミクに話してないことがいっぱいあるロト。でも、まだそれを全部明かすことはできないロト。…だから、ごめんロト」

「いつか話してくれる？」

「もちろんロト！ それにターロットはミクを騙したり、嘘を吐いたりしてないロト！…これだけは信じて欲しいロト！」

「うん、信じるよ。だから、私からもお願いいいかな？」

「わかったロト。ちゃんと聞くロト」

「私は、やっぱりネガテバーを放っておきたくない。悲しい過去を利用して暴れているネガテバーを何とかしてあげたい。そこに人が取り込まれているなら、絶対に助けない。そのためには、プリキュアの力がどうしても必要なの。もうサインコインを取引には使わないし、ネガテバーを浄化したらコインを全力で獲りに行くって約束する。…でもね、その前に私はネガテバーの浄化に全力を尽くす。そのためにストロジーやオラクルとも積極的に協力していきたい。…どう思う？」

「コインを奪い合うのがわかっていのに、協力し合うのは難しいと思うロト」
でも、とターロットは続けた。

「ミクがそうしたいというなら、ターロットも精一杯頑張るロト！」

「ターロット…いいの？」

「それでいい口ト。きつと難しくて、上手く行かないときもいっぱいある口ト。でも……だからって、最初から切り捨ててしまうのは違う口ト」

「そうだね……そう言ってくれて嬉しいよ。ありがとう、ターロット」

私の言葉に、ターロットが表紙の中で微笑んだ。その彼女の姿が、ぼやけてにじむ。にじんだのは私の視界だった。あくびが口から漏れ出て、睡魔が頭の芯を痺れさせた。

ターロットが言った。

「ミク、もう眠る口ト。しっかり休んで、また明日を迎える口ト……」

「そうだね。うん、お休み、ターロット」

ベッドに横になり、目を閉じる。睡魔はたちまち私を支配し、そのまま意識は眠りの奥底へと沈んでいった——

——ターロットはベッド脇に佇みながら、眠りに落ちたミクを眺めていた。

「ミク……確かに未来は誰にも決められないものだ口ト。……でも、せめてあなたが幸せに笑って暮らせる未来を選ばせてほしいと望むのは、許して欲しい口ト……」

それが例え、他の誰かの幸せの犠牲に成り立つ未来であったとしても。

ターロットの最後の言葉は、微かなつぶやきとなつて、闇夜へと溶けて消えて行った。

人気の無い郊外。その空き地の一画で、オラクルは目を覚ました。

時刻は深夜、雨はとうに上がり、雲も晴れ、頭上には満天の星空と、そして細い三日月が浮かんでいた。

オラクルの身体はボロボロだった。仰向けになつて倒れたまま身動きさえすることができず、ただ夜空を見上げることしかできなかった。

「ちつきしよう……ボロ負けかよ……なさけねえ」

「ほんと、情けないよね」

くすくすと笑う声とともに、オラクルの視界に、少女の顔が割り込んできた。星空と月を背景に、少女はオラクルを見下ろしながら苦笑した。

「やっと起きたわね。私、ずっと待ってあげていたんだからね。感謝しなさい」

「あの金髪野郎はどこ行つた？」

「知らないわよ」

「ネガテバーはどうした？」

「ルカナが浄化したわ」

「コインは？」

「(ハ)ハよ」

少女が手に持っていたコインを手放し、それはオラクルの額にコツンと当たって転がり落ちた。

「いつてえ!？」

「寄り道してネガティブの浄化をサボった罰よ。おかげで私、ルカナからの印象が悪くなっちゃったじゃない」

「どうせもとから良くねえよ」

「それはあんたの話。あの子、私たちが入れ替わってることにちゃんと気づいているから、『私』に対しては悪くない印象を持つてると思うんだけど、それも今回限りかしらね」

あゝあ、と落ち込む少女。

そんな少女に、オラクルは言った。

「それでも……コインを集めなきゃならねえんだろ」

「うん……そうだね……」

過去を取り戻すために。

そう呟きながら、少女は夜空を見上げた。

その視線の先に浮かぶ細い三日月は、まるで夜空があざ笑っているかのよう、少女には思えた……。